

# 教会学校教案誌

2014.7.8.9月号



主が一步一步を備えてくださる。  
箴言16章9節

No.54

日本キリスト改革派教会  
中部中会日曜学校委員会

## 2014年7～9月カリキュラム（第54号）

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月6日	御言葉をめぐって 整えられる奉仕者	問44	ハイデ1, 6、ウ小46
		使徒言行録7:1-7	使徒言行録7:7
働きは違っても、「証」という一つの目的に喜んで仕えて励む教会員となる。			
13日	サウロを回心させる 復活のキリスト	問29	ウ小30-32、ウ大66-68
		使徒言行録9:1-19	使徒言行録9:4-5
目からうるこを落とし、キリストの証人として立てる神の力と愛にあずかる。			
20日	世界を目指す アンティオキア教会	問65	ハイデ32, 54, 55
		使徒言行録11:19-30	使徒言行録11:26
地の果てまで証人とする預言は日本の教会にまで至る。私達も世界を目指そう。			
27日	会議を通し、聖霊に 導かれる教会	問34, 65	—
		使徒言行録15:1-21	使徒言行録15:16
教会は会議を通し聖霊に導かれ福音の真理を確認した。教会の交わりを大切に。			
8月3日	マケドニア人の幻の 信仰的解釈	問76, 13	—
		使徒言行録16:6-15	コリント二4:8, 9
一人が見た幻を神の召しとして確信したキリスト者たちから信仰的解釈を学ぶ。			
10日 (平和)	平和主日	平和カテキズム	—
		イザヤ2:1-5	イザヤ2:5
もはや戦うことを学ばない、戦争放棄の憲法を擁護するキリスト者として立つ。			
17日	ローマで伝道するパウロ	—	ウ小11、ウ告白5:6
		使徒言行録28:17-31	テモテ二4:2
いかなる壁をも乗り越えさせる御言葉の力が、今も教会を導く。伝道し続けよう。			
24日	聖霊とキリストに 導かれて歩む教会	—	ウ告白8章、ウ大182等
		ローマ8:26-39	ローマ8:26
聖霊とキリストの執り成しに支えられる教会は、勝利の内に成長を続ける。			
31日	天上のキリストの働き	問35	ウ大52, 54, 121、ウ告白21:7
		黙示録1:9-20	黙示録1:17-18
天上にあって教会をご支配しておられるキリストの御姿を仰ごう。			
9月7日	天上の礼拝	—	—
		黙示録4:1-11	ヘブライ13:8
地上の礼拝は天上の礼拝に連なっている。礼拝の恵みを喜ぼう。			
14日 (敬老)	天地創造	問12, 15, 37	ウ小1, 9, 10、ウ告白4章
		創世記1:1-2:3	創世記1:31
世界を神の作品としてみるまなざしの中で、平安と使命感を持つことに招く。			
21日	人間の創造	問15	ウ小12
		創世記2:4-25	創世記2:7
神に造られた存在として、神を知り、喜び、その栄光をあらわす人間の幸い。			
28日	罪と墮落	問16-21	ウ小12-20
		創世記3:1-24	創世記3:15
人間の罪とその恐ろしさを知り、悔い改めと信仰へと招く。			

も く じ

2014年7・8・9月カリキュラム

まえがき	牛島 智子	4
巻頭説教	坂井 孝宏	5
日曜学校・教会学校訪問①	今枝 光彦	9
犬山教会教会学校のご紹介		
日曜学校・教会学校訪問②	金 蕙 苓	13
教会学校のための視聴覚教授法と実例（パワーポイント）		
教会学校教案誌の原点とカテキズム	相馬 伸郎	18
ジュニアサマーキャンプ2013(続)	長谷川はるひ	21
はこぶねにのろう～恵みの契約の継承～		
副読本のご案内		23
自由募金のお願い		24

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

7月 6日	26
7月13日	32
7月20日	38
7月27日	44
8月 3日	50
8月10日	56
8月17日	62
8月24日	68
8月31日	74
9月 7日	80
9月14日	85
9月21日	91
9月28日	97

2014年10・11・12月カリキュラム

2014年度年間カリキュラム	104
執筆者よりひとこと・あとがき	107

---

# まえがき

牛島智子（東京恩寵教会執事）

---

私は日ごろ療育センターというところで仕事をしています。そこには発達が遅くゆっくりだったり、得意不得意のでこぼこが大きかったりするために支援が必要な子どもたちが通ってきます。ことばの理解が難しいため、絵や実物、音楽など様々な手段を用い、五感に訴えることで成長していく子どももいます。幼稚園や学校と違い、何歳だからこれが理解できるはず、教えられるはず、という前提はありません。一人一人の子どもの発達に合わせて個別にプログラムを立て、楽しんで取り組みながら達成感を持てるように支援していきます。また、子どもだけでなく保護者への働きかけも重要視しています。

この「療育」あるいは「特別支援教育」といわれる考え方は、発達に課題を持つ子どもに限らず大切なのではないかと思います。日曜学校にとっても参考になることがたくさんあります。

日曜学校の教師としての私は、ずっと2歳くらいまでの乳幼児の分級を担当してきました。おしゃべりのできない赤ちゃんでも、同じ場面で同じ歌を歌い、手を合わせて祈る見本を見せるうちに自然にお祈りの姿勢を真似っこし、かたことで「アーメン」と言えるようになります。聖書物語のストーリーは分からなくても、神様がおられて、私たちを愛してくださっていることを感覚として伝えることができます。五感に訴える楽しい遊びのアイディアは、ずいぶん療育場面から盗んできました。工夫次第で赤ちゃんにも教会に来る楽しさを伝えることができますし、物心のつかない年頃からの刷り込みがその後大きな影響を与えます。

また、日曜学校には様々な年齢の子どもたちが集まっています。たとえ同じ学年であっても

一人一人違う理解の道筋を持っています。療育ほどではないにしろ、子どもの発達に合わせた働きかけを意識する必要を感じていました。

この文章を書くにあたり、教案誌の基本方針を改めて読ませていただきました。「日曜学校を子どもの礼拝共同体として捉え、働きの比重を礼拝式に置くと同時に、分級を子どもと向き合う『牧会』のイメージで考える」という主張は、なるほど腑に落ちました。「均一の知識を提供するのではなく、子どもの心、気持ちを聴き取ることが求められる」というのは、まさに療育で意識している個別的な対応に通じます。

また療育では子どもへの支援だけでなく保護者への働きかけ・家庭支援も大切にしています。これも日曜学校に通じるものがあるのではないのでしょうか。特に乳幼児は親に連れてこられるのでなければ教会に来ることができません。

赤ちゃんを連れて教会に来るのは本当に大変です。健康を整え、様々な準備をしてやっとの思いで礼拝に出席しても、子どもを静かにさせることばかりに気を取られてちっとも説教に耳を傾けられない、という悩みをよく聞きます。それでも子どもと共に礼拝に出席するのはなぜなのでしょう。日曜学校にはその答を明確に示し、保護者を励ます働きも与えられています。子どもは教会でだけ聖書を読んだりお祈りをしたりするのではなく、家庭でこそ信仰教育がなされます。その大切さを保護者に伝え、どうすればよいかを具体的に示し、親の悩みに耳を傾け、共に祈り、共に喜ぶ。これは日曜学校だけの課題ではありません。役員はもちろん、教会全体が、託されている子どもたち一人一人を覚え、親たちを支え励ますことで、ともに豊かな祝福を与えられるはずです。

# 旅路が守られますように

坂井孝宏（勝田台教会牧師）

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるよう。見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるよう。あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるよう。今も、そしてとこしえに。

（詩編121編）

## 1. 信仰の旅路をはげます、121編の言葉

信仰の生涯というのはしばしば、長い旅路にたとえられます。この地上ではよそ者、仮住まいの者として、天に用意された都に向かって旅を続けるのが私たち信仰者だと、ヘブライ11章にも書かれています。あるいはフィリピ書3章のパウロの言葉でいえば、死者の中からの復活という救いの完成にたどりつくまで、目標目指してひたすら前を向いて走る。クリスチャンとは、だれもがそんな旅の途上にある者であります。

聖書の言葉というのは、そのような旅を導く道しるべであり、灯です。また、歩けばのどが渴きますし、腹が減りますが、そんな飢え渴きを癒す、命のパンであり命の水です。あるいはまた聖書の言葉というのは、汗をぬぐうさわやかな聖霊の風を運んでくれるものでもあります。そんな風に、聖書を通して与えられる神の励ましによって支えられて、私たちは一歩ずつ前へと進んでいく。そんな聖書の中でも、とりわけ今日与えられた詩編121編の御言葉というのは、旅にふさわしい御言葉です。この詩編は都のぼりの歌の一つで、神殿があったエルサレムへと巡礼する旅人たちに歌われた巡礼歌だっ

たと言われます。

## 2. 「あなた」のための「わたし」の祈りである、121編

この詩の解釈のポイントとなるのは人称の変化です。これをめぐっては、難しいことを言い出すと色々あります。でもそういう議論は置いておいて、私がおすすめる読み方だけをお伝えします。この詩編は旅立つ「あなた」に対する、「わたし」からの祝福の祈りです。「わたしの助け主なる主が、どうかあなたを守ってくださるよう」との切なる祈りをもって、全能の神に愛する者を委ねる歌であると考えて、解き明かしさせていただきます。そのように解き明かしていく以上、この解き明かしは、「わたし」坂井孝宏から、私が心に思うお一人お一人の「あなた」のためになされる切なる祈りとならざるをえません。

特に今は、日曜学校教案誌の巻頭説教としてこの解き明かしを進めるという文脈において、「わたし」坂井孝宏は、私の教会に属する愛する子どもたち一人一人の顔を思い浮かべながら、あるいはキャンプなどで共に汗と涙を流した若者たちの顔を思い浮かべながら、「あなた」を主

が守ってくださるようにと祈りたいと思います。

これから長い長い信仰の旅路へと向かっていく、幼い「あなた」のために、若い「あなた」のために、主の祝福がありますように……。これをお読みの皆さんもまた、皆さんにとっての具体的な「あなた」を思いながら、この詩編の祈りを共に祈っていただきたいと思います。そのような導きを示されることを願って解き明かしさせていただけます。私たちにはいつも、自分のためにこのように祈ってしてくれる信仰の家族がいるということを思いながら、この詩編を読んでほしいのです。また私たちにはいつも、自分のこのような祈りを必要としている家族がいるということも、覚えていただきたいのです。この詩編は、そのようにして、信仰の旅路を共に歩む兄弟姉妹たちによる、祝福ととりなしの豊かな祈りの世界を開いてくれる詩編であるのです。

### 3. 「わたし」の確信

そのような思いをもって順番に読んでいきましょう。まず最初に、「わたし」の確信が表明されています。「目を上げて、わたしは山々をあおぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから」。天地万物を創造された全能の主なる神へのまっすぐな信頼が表明されています。今、この歌い手であるわたしは、自分の目の前にそびえたつ山々に向かって目を上げています。それは穏やかな日本の美しい緑の山ではありません。パレスチナの厳しい、乾いた岩山です。生物の気配を感じることの難しい、峻厳な岩山が目の前にそびえたっているというのです。それは、人間を寄せ付けない自然の脅威の象徴であり、またそのようなものとしてそれは、私たちの人生において与えられる厳しい試練を象徴しています。エルサレムへの巡礼の旅路においては、このような厳しい岩肌を縫い、いくつもの山を越えねばなりません。私たちの信仰

の旅路においても同じなのです。震えが来るような、たちすくんでしまうしかないような厳しい試練を、必ず越えていかねばなりません。そしてそのような試練に向かうとき、私たちは誰もおのれの小ささを思わずにはいられません。この詩編の歌い手も、今、はるかな山々を前にして、おのれの小ささを思い知らされているのでしょう。無力を、また深い孤独を覚えているのかもしれませんが。乾いた風の音しか聞こえないような荒れ野にあって、助けてくれる人はどこにもいません。小さなおのれ一人しかいない。そんなどこまでも厳しくさみしい景色に向かって、わたしは目を上げています。

その景色の中で問うのです。この私の助けはどこから来るのか。この問いに、彼は自ら答えます。わたしの助けは来る。天地を作られた主のもとから。まったくシンプルな信仰告白です。まさに、試練の炉によって練清められ、そぎ落とされて残った、確信の言葉という感があります。私の助けは来る、天地を造られた主のもとから。この短い言葉に、どれほどの深い意味が込められているのでしょうか。

この人が言おうとしていることは、どんな時も神の助けがあるから百戦錬磨というような楽観的なことではないことは確かだと思います。神を信じる人は知っています。自分の願いというものがほとんど聞かれない時もあるれば、思いを越えて与えられる時もあるということ、よく知っているのです。助けというのは、自分が望んでいるような形で与えられるわけではありません。でも確かに全能の神は生きておられ、私をその手の中にとらえていてくださいます。天地万物を創造された全能の御手の中に、私は存在している。ただそのことを、よりどころとして生きる。神を信じるとは、そういうことです。圧倒的な厳しい自然にあって、わたしは無力で孤独な小さなものです。それこそ、上から見ると、石ころと同じにすぎない。でもその限りなく小さな私が、その遥かな山々をも作ら

れた創造者の目に、いとおいしいものとして見ていただいている。そのようなものとして私は生み出され、今もこれから生かされている。この信仰が、信仰者を支えます。

ぜひハイデルベルク問26をお読みください。121編の「わたし」も、これを確信しています。キリストのゆえに、天地を造られた方が、私の味方でいてくださる。父でいてくださる。この方が必要なすべてを与えてくださる。たとえ災いが下されたとしても、私の小さな思いを越えて、それらをわたしのために益としてくださる。そのことを信じて疑わない。「私の助けは来る、天地を造られた主のもとから」という短い言葉に込められているのは、このような信仰の確信であります。

#### 4. 「わたし」の主が、「あなた」をも助けてくださるように

この信仰をもった「わたし」が、「あなた」のために祈るのです。「どうか、主があなたを助けて足がよろめかないようにし、まどろむことなく見守ってくださるように。」これから長い長い厳しい旅を始めようとしている「あなた」のために。あるいは、険しい山の前で立ち尽くして、自分の小ささに気づいてくじけそうになっている「あなた」のために。主が助けてくださるように。その足を支えてくださるようにと祈っているのです。

そして「見よ」と続きます。「見よ、イスラエルを見守る方はまどろむことなく、眠ることもない。主はあなたを見守る方、あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。昼、太陽はあなたを撃つことがなく、夜、月もあなたを撃つことがない」「見よ」と言われています。これは「顔を上げよ」という呼びかけです。「わたしの神を見よ」と、旅立つ者の心を引き上げているのです。この神は、まどろむことなく、眠ることもない神であると言っています。私たちが寝ている時も、寝ずの番をして見守ってくださ

る、それが私たちの神です。出エジプト12章42節には、エジプトから脱出するイスラエルの人々を、主が寝ずの番をして見守ったとあります。私は一回だけ寝ずの番をしたことがあります。三人の子が与えられていますが、一番下の子がまだ1歳にもならないころ、グループという気管支の不調で夜間病院に連れて行きましたところ、そのまま一晩入院ということになりました。狭いベッドで幼子と一晩過ごしました。息が苦しいことと、母親のいない不安から、なかなかぐっすり寝れないのをあやしながら、一晩寝ずの番をしました。その時に、私が思い出していたのが、先の出エジプトの言葉であり、この詩編121編の言葉でした。主はこのようにして、不安ばかりの私を眠ることなく見守ってくださるのだなあ、胸がいっぱいになったものです。

太陽はあなたを撃つことがないともありますね。パレスチナの真昼の太陽は、殺人的です。でも、その光線を遮る陰として、主がかたわらに立っておられるのです。夜も危険です。でも、寝ずの番をしてくださる方が、いつも右にいてくださるのです。だから歌い手は、この頼もしい主を見よ、と呼びかけているのです。

それは、信仰の友のために私たちがなすことができる精一杯の愛情表現です。たとえば、友が大きな試練にあるとき、私たちは何ができるでしょうか。私たちは言葉を失います。そんな時、泣く人と共に泣くことは、とても大事なことです。しかしもっと大事なことは、その人が今は見失っている光を、「見よ」と示してあげることであります。その人の内側をのぞけば、今は嘆きしかない、悲しみしかないという時がある。その内側に入って行って、一緒に泣くという繊細なやさしさは必要です。でも、同時に私たちは、その人の外側から「一緒に神を見上げよう」と呼びかけることもできるのです。その人が今は顔を背けている神の恵みを、あるいはその人がまだ十分に味わっていない神のすば

らしさを、「一緒に見よう」と。外からの言葉として呼びかけるのです。わたしの神のすばらしさを見よ、神が与えてくださるもののすばらしさを見よ。この神があなたの神でもいてくださるのだ、この神を見てほしいのだ……と。

それは、自分の信仰によって相手を立たせるなどという傲慢なことではありません。そんなことはできないのです。「わたし」の確信は、どこまでも「わたし」と神様との関係において与えられたものであって、それを誰かに分けてあげることなどできません。誰かが確信をもつことができるかどうか、そして試練に立ち向かえるかどうかは、その人と神様との関係次第です。そこには決して、第三者は立ち入れないのです。たとえ恩師であろうが、親であろうが立ち入れません。どれほど私がおその人のことを思っている、立ち入れません。だから、寄り添って立たせてあげようなどとは傲慢なことです。そんなことをする必要ありません。なぜなら、その人のかたわらには神が立っていてくださるからです。その人を支えるのは私の役目ではないのです、それは神様のお働きなのです。だから、究極的には神に委ねるよりありません。私にできることは、「わたし」の神を見よと示すことだけです。「わたし」のかたわらにいてくださる神が、「あなた」のかたわらにもいてくださると、確信をもって言い表すだけです。そして、祈るだけです。「主がすべての災いを遠ざけて、あなたを見守り、あなたの魂を見守ってくださるように。あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに」。

私たちが、愛する子どもたちのためになすことができることも、これだけではないかと思えます。いやむしろ、これ以上のことをすべきではないかもしれません。彼らと神との垂直な関係が確立されること、それがすべての始まりです。そのお手伝いのために、私たちにできる

ことなどは、ごくごく限られているのだということをおぼえていないと、信仰の継承には色んな面での歪みが生じてくるかもしれません。ちゃんとわきまえた上で、愛して、愛しぬきたいと思います。主が弟子たちを極みまで愛しぬき、その足を洗ってくださったように。そしてその命を使い果たし、十字架で死んでくださったように。私たちも、子どもたちに仕え、時に苦悩し、労苦しながらも、愛しぬきたいと願います。なにより祈りましょう。彼らには決して気付かれないように、彼らのために祈り続けましょう。彼らがやがて、信仰の旅路の途中で、後ろを振り返る時に、「ああ、私のために、こんなにたくさんの祈りが重ねられていたのだ……」と気付く時が来ます。主に感謝を帰す時が来ます。そして、彼らもまた、後に続く者たちのために祈り始めるのです。必ずその時が来ます。だから、その時を具体的にイメージしながら、隠れたところで祈り続けるのです。これから始まる、「あなた」の旅路が守られますように。主が、どうか「あなた」を見守ってください、「あなた」を雄々しく立たせてくださるように、と。

主は力ある方です。天地を造られたその全能の力をもって、私たちの一步一步を支え、万事を益としてくださいます。私たちの流す涙や失敗や挫折さえも、益としてくださって、救いの完成へと向かわせてくださいます。フィリピ1:6にもこうあります。「あなたがたの中で善い業をはじめられた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。」私たちを生み出してくださいましたのは神です。私たちの内に救いを始めてくださるのも神です。この神が、その力ある手をもって、どこまでも支えてくださって、必ず永遠の命まで導いてくださいます。「わたし」も「あなた」も、そのような頼もしい神を信じることができるのです。



# 犬山教会教会学校のご紹介

今枝光彦（犬山教会長老・教会学校校長）

## 1. 教会キャンプを行いました

当教会の教会学校では、昨年4回の行事を行いました。イースターキャンプ、夏のキャンプ、秋のキャンプとクリスマス会です。クリスマス会以外は、1泊2日で行います。

まず夏のキャンプですが、以前は近隣のキャンプ場でテントを張って行っていました。ここ数年は雀のお宿を利用しています。開催期日も日曜日の午後から月曜日の昼過ぎまででしたが、昨年からは平日の朝から翌日の昼過ぎまでに替え、教会に集まって、借り上げたバスで移動します。夏のキャンプは、どの教会でも行っていると思いますので、ここでは触れません。

## 2. 教会でのキャンプ

イースターキャンプと秋のキャンプは、昨年からは始めました。時間は、土曜日の午後から日曜日の午前まで。教会でのお泊りです。下記は、初めての「イースターキャンプ」の案内とプログラムです。

**イースターキャンプ案内** 犬山教会 教会学校

日 時：2013年3月30日(土) 午後2時～

3月31日(日) 午後1時（一泊二日）

場 所：日本キリスト改革派 犬山教会

住 所：犬山市松本町2丁目45番地

持ち物：聖書、筆記用具、洗面用具（タオル、歯ブラシなど）、着替えなど

費 用：一泊二日500円、一日200円

テーマ：『イースターってなあに？』

### (1) 3月30日(土) プログラム

時 間	項 目	準 備 等
2:00～ 2:15～ 2:45～	さんび練習 礼拝①：キム先生 分かち合い①	さんびか♪23、29、ホサナ イエス様の生涯 グループをつくる
3:00～4:00	ゲーム	典子先生、主香先生 自由あそび、全体あそびなど (戸外または礼拝堂)
4:00～ 4:15～ 4:40～	おやつ 礼拝②：今枝先生 分かち合い②	カルピス、おかし ②イエス様の十字架と死 グループをつくる
5:00～ 5:45～	夕食作り イースターエッグ作り	係りを決める 献立：カレー ゆで卵60個 セロファン・りぼん
6:00～	夕食（食前に暗唱聖句）	
6:30～	さんびの時間	さんびか♪いのってごらん、 めばえる、その他
7:00～8:00	お風呂	サンパーク
8:00～8:30	映画鑑賞	よみがえったイエス様
9:00～	おいのり	帰宅または就寝準備
9:30～	消燈	

(2) 3月31日(日)

時 間	項 目	準 備 等
7:00～7:30	起床・朝のおいのり 全員で	復活の聖書箇所をよんでおいのり、ふとん整理
7:30～	ラジオ体操	天気の良い時は戸外
8:00～9:00	朝食（食前に暗唱聖句） （朝食後、卵さがしゲーム）	献立：オープンサンド他 （食事中に卵カードを会堂に隠す）
9:30～	主の日の礼拝③ お話：キム牧師	③イエス様の復活 さんびか♪ 115B、41
9:55～	分級（わかちあい）③	感想文
(10:30～12:00)	大人の礼拝	
12:00～	報告会 昼食	
1:00～	帰宅	

初めの予定から時間や順序の変更はありましたが、無事にプログラムをこなすことが出来ました。

### 3. キャンプの目的

この、イースターキャンプと秋のキャンプを計画した目的は、①夏のキャンプやクリスマスに子どもたちを誘い、定着化させること、②重要な教理について理解を深めさせること、です。

このためテーマは、クリスマスの時はイエス・キリストの誕生であり、イースターの時はイエス・キリストの十字架の上での死と葬り、復活です。この2大テーマは、キリスト教の基本であるため、毎年扱う必要があるからです。そして、夏と、秋では、教会学校で学んできたことの復習とまとめであり、新しく来た子どもたちにはキリスト教の要点を伝えたいと考



礼拝の様様。礼拝室で行います。

えています。

### 4. テーマについて

- (1)夏のキャンプでは、テーマを「神と人を愛する」として、十戒を扱いました。教材は、昨年の教会学校教案誌の4月から8月にかけての十戒に関する箇所を利用しています。
- (2)秋のキャンプでは、テーマを「教会ってどんなところ？」としました。教案誌の9月からは、教会に生きる、子どもカテキズムの教会に生きる道から特に新しく来る子供たちを意識して、神の家族としての教会を理解させようとして次のようなことについて話し合いました。

10月13日の教案誌では、『御言葉への服従』となっている。このため、礼拝の時間を12日・13日の2回とすること。

1回目；サブテーマ『教会、みんなの家』とし、神の家族性、平和・成長・一致等について、教会と一般の家とを対比させつつ教える。特に、教会の必要性と教会の主であるキリストについて。

2回目；サブテーマ、教案誌にあるように『御言葉への服従』を主とし、教会での礼拝はどんなことをしている

か、目的を教える。

わかちあいは、教会のことをある程度知っている子どもたちと、あまり知らない子どもたちのグループに分け、分級は通常教会学校のグループ分けです。礼拝の中で話されたことの確認と感想を述べさせ、礼拝の中での話やテーマに対する補足説明を10～20分間行います。

ただし、夏のキャンプでは長い時間を使えるので、テーマの展開、作業は別に考えます。

## 5. 教会キャンプの実際

- (1)参加費用は、実費以下です。教会からの補助はありますが、こどもの礼拝で献金していますので、主にこれを当てています。
- (2)宿泊場所は、教会です。3階の和洋室で男子、1階の集会室で女の子としました。カーペットや寝具類は、会員からの借り物がほとんどです。経験からすると、早く休ませるためには、体を動かせることは効果が大い実感できます。このためにも、屋外での遊び時間を設けています。
- (3)食事はみんなで作ります。教会員のお手伝いもありますが、準備から後片付けまでグループに分けて行います。グループ分けでは、参加する子どもたちの日常生活を知っている必要があります。また、メニューは簡単なものになっています。夜はカレー、朝はパンです。



作って食べよう、カレーライスづくりに挑戦。食事は、グループごとに暗証聖句を行ってから頂きます。振り付けを行うと覚えやすいので、教師が独自に考えています。

- (4)お風呂は大人気。歩いて10分ほどの距離に、宿泊施設があり、ここを利用しています。低学年の男の子はどうしてもはしゃぐので、事前の注意と時間帯に工夫が必要です。
- (5)グループ分け。分級、食事の準備、クイズで行います。目的に合わせて行います。
- (6)報告会。キャンプの報告を朝の礼拝式後に教会員の前行います。これによって子どもには目的意識を、大人には教会学校の活動を知らせることとなります。
- (7)宝探しゲーム。ヒントを書いたメモから、次のヒントのメモを探し、最終的には、ミッション（多くはテーマのまとめ、関連事項報告などの指令）達成をグループで行います。ヒント＝なぞなぞでOKです。教会内にあるもの、3回ほどでミッションに到達できる、難易度を合わせるのがポイントです。



宝探しゲームで。なぞなぞを解いて、ミッションに到達。(教会玄関脇の傘の中にありました)

- (8)秋のキャンプでは、那加教会と合同で行いました。こういう場合の交わりの場をどのよう



那加教会のお姉さんたちが、歌と振り付けを教えてください。

な形で持つか。担当、グループ分け、自己紹介など。

(9)教師は5名ですが、それだけでは足りません。教会員のお手伝いが必要です。

## 6. 教会キャンプの結果

イースターキャンプは、子ども17名（男9名、女8名）、大人10名の参加。秋のキャンプは、子ども23名（男5名、女18名）（内、那加教会5名）、大人7名（内、那加教会2名）の参加。

夏のキャンプは、子ども14名（男6名、女8名）、大人17名の参加。夏は教会外の父兄のお手伝いがありました。教会学校の子どもは8～9名ほどです。

当初の願いであった新しい子どもを定着させるという目標は、困難な現状です。けれども来てくれた子どもたちの友達には、教会がどこであるかを伝えることはできたと考えています。教会の子どもたちに信仰を着実に伝えること、これが私たち教師の願いです。



## 教会学校のための視聴覚教授法と事例 (パワーポイント)

金 蕙 苓 (犬山教会)

「若者を歩むべき道の初めに教育せよ。年老いてもそこからそれることがないであろう」

### 箴言2章6節

若い時の経験は年を老いても忘れないというこの言葉は子どもを預っている教師や親に大きな教訓になる。ですから神様の御言葉を子供たちに伝える時、どのようにすれば更によく効果的に教える事ができるかという教師の心と態度がまさに視聴覚的な教育方法を試して、工夫する動機になる。

しかし親や教師が子どもや生徒を養育する時、難しさを感じる原因は小さい子どもたちがどのような方法で物事を理解し感じるのかをよく知らないことにある。その中の一つは幼児、子どもたちがどれほど長く集中できるのかについて親がよく知らないことである。いくら論理的に説明してもその言葉の深い意味を知らないし、なぜそのようにすべきなのかということを知りません。子どもたちは暫くはひとつのことに関心を持ちますが、その関心はすぐ他のところへと向けられる。子どもたちが物事や説教に集中できる時間は未就学幼児(5歳未満)は5分、小学校以後、1年生は10分、2年生は20分(学年ごとに10分加えられる)とよく言われます。

### 教会学校での視聴覚教育とは？

#### 1) 定義

教育者が聖書を人間の感覚器官である視覚と聴覚を通してより効果的に被教育者に伝達する教育方法を意味する。

#### 2) 目的

子どもたちが神様の御言葉をたやすく理解し、受け入れ、信じ、実践し、献身するなど霊的な真理を確固不動に学ぶことを助けるのがその目的である。

神様の御言葉をよく理解するように直接見て聞いて触る色々な種類の多様な教材を使えば、子どもたちは神様を正しく悟ることができる。抽象的な教訓を具体的な生活へ適用するように助けてあげる。しかしあくまでも視聴覚教材はそれ自体では私たちの魂を救えないし、ただ目的のための手段に過ぎません。

#### 3) 効果

- (1)短い時間に多くのことを学ぶことが出来る。
- (2)印象的な教育ができ、長く覚えられる。
- (3)学習を明確にさせる。
- (4)興味を引き起こし、注意集中がよくできる。
- (5)情緒や感情を動かす力がある。
- (6)学んだことを再確認する役割をする。
- (7)全ての場所や時間が学習の場として活用できる。

#### 4) 視聴覚教授の順序

##### (1)材料準備

数多くの資料の中で教師が目指す事を正確に教えるために正しい資料を適当な分量で準備する。

##### (2)予備準備

いくら材料が準備できたとしても教育する前に予備練習をすることが必ず必要です。映写機やプロジェクターの場合、焦点を合わせておくかパネルシアターの場合、フェルトに絵を貼る順番に置いておくなど予備練習をし

ておく。

### (3)教材使用

教育者は教材を使うとき被教育者たちが視覚物がよく見えるところに立って教育し、もし途中で失敗があっても決して慌てず自然に説明し即時に直す。

### (4)授業整理

教えた内容をよくまとめて締めくくる。

### (5)評価活動

まず教師自身が評価してみる。福音を伝える目的において何を、どのように使って、どのぐらいの成果があったのかを記録しておく習慣が必要である。

## 5) 視聴覚教授法の要領

(1)興味の反応を見ながら授業を進める。

(2)子どもたちにも教材に接触する機会を与える。

(3)機材を取り扱いながら語る。

(4)制作活動を通して授業を進める。

(5)授業の進行計画を立てる。

(6)質問、討論、などを重ねて使用することが効果的です。

(7)協力者として生徒に助けをもらう。

(8)子どもたちの座る位置も研究する。

(9)分級か合同か区別する。

(10)材料の保管を慎重にする。

(11)デメリットもありえることも覚えて注意する。

(12)子ども一人一人について関心をおく。

(13)教師の位置も考慮する。

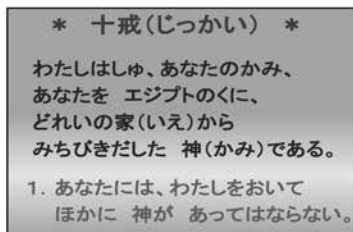
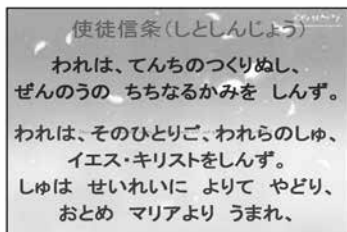
## 視聴覚説教の例（パワーポイントを活用した説教—教会学校教案誌2014年3月23日）

1) 礼拝順序を背景画面に入力する。

—背景は季節か教会暦に合わせる。

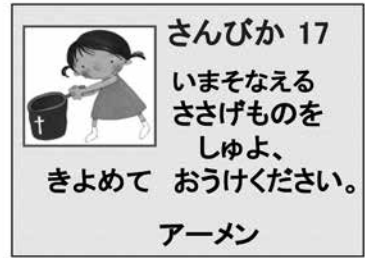


2) 信仰告白、十戒、主の祈りを前もって入力しておく。



3) 聖書箇所と讃美歌は毎週入力する。

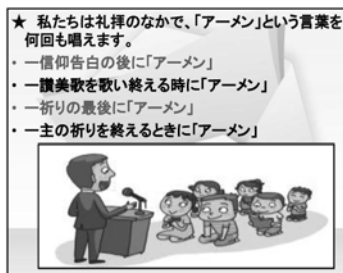
—子どもたちが聖書を自分で開き、讃美歌を手に持って大きく歌う習慣をつけるため、聖書の箇所と讃美歌の歌詞は入力しない。



4) 説教の内容は教会学校教案誌の説教展開例を中心に準備する。

—聖書物語りは資料（紙芝居や聖書の絵本）が多いが、今はカテキズム中心の説教ですので、言葉中心の説教になりやすい。

—説教の文章を一つずつ画面に写しながら子供たちが理解しやすい絵や写真を写して説明する。



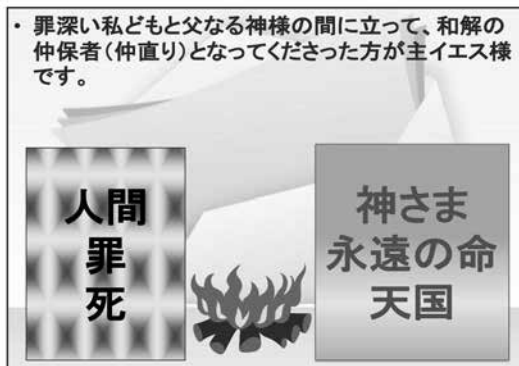
〈例1〉

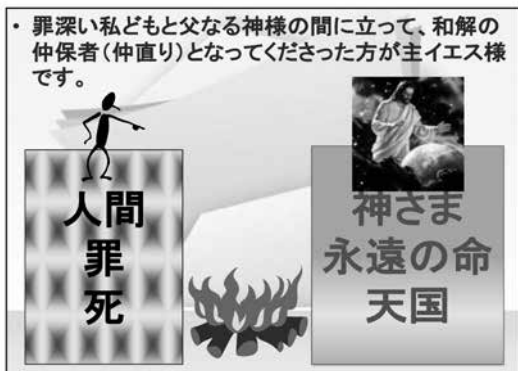
一番目の画像—文書と絵だけ写す。

二番目の画像—左から右へ人が登場（背景音楽と共に）。

三番目の画像—右から左へ神様が登場（背景音楽と共に）。

四番目の画像—下から上へ十字架があがる（背景音楽）。





〈例2〉

- 一番目の画像—文書と絵だけ写す。
- 二番目の画像—考える絵が現れる。
- 三番目の画像—考えること一つ一つ現れる。
- 四番目の画像—次の文章と絵が現れる。



5) 多様な画像や写真の挿入  
PPT 背景、説教に必要な画像や写真などはイ

ンターネットで検索する。他の教会のホームページやブログなどをも参考する。



## 〈まとめ〉

6、7年前、私が教会学校の説教を始めるときにはPPTを使いませんでした。教案誌を使用しながら個人的に言語の限界を感じるだけでなく、どうすれば子どもたちの心によりよく伝えることができるのか悩みました。それで最初には紙に書いたり、ホワイトボードに書いたり、聖書の絵本を見せながら視聴覚資料を活用し始めました。特別な時（イースタ子ども会、夏のキャンプ、子どもクリスマス会）にPPTを使用しました。そして教会学校にも適用するようになりました。

初めの時は文章一つずつ画像を写しましたが、段々絵や写真を挿入し始めました。言葉だ

けで説教することより画像が出て、映像が出ると子どもたちがもっと集中するようになりました。神様の尊い御言葉を語ることに於いて視聴覚資料の適切な使用こそ大きな効果をもたらすと思いました。実際15分ぐらいのPPT説教を準備するため本当に多くの時間を費やします。その間、私は常に祈る心で準備します。「知恵を与えてください。聖霊なる神様、私と生徒たちの心に働きかけてください」と。イエス様が自ら実物資料で視聴覚的な方法を通してたとえ話や比喻などを語られたことを覚えながら、私に足りないことはすべての源でおられる神様に求め、子どもたちが神様を正しく知ることをお祈りします。



---

# 教会学校教案誌の原点とカテキズム

相馬伸郎（中部中会日曜学校委員長・大会教育委員会委員・弊誌編集長）

---

いよいよ2015年度第57号から、大会教育委員会から発行される「子どもと親のカテキズム」を用いたカリキュラムで弊誌を編んでまいります。これは、編集部のおもにとりましても採用して下さる読者、諸教会、伝道所の皆さまにとっても大きな事だと思います。既に第52号に、「2014年度 救済史カリキュラムについて」と題して、一文をしたためました。しかし、今回、あらためて弊誌の基本方針や志、また、新しいカテキズムについて、皆さまのご理解とご協力を仰ぐべく、記させていただきます。

## 子どもの教会像と教会学校教案誌

私どもは、第13号より毎春号に「本誌の基本方針 一教会（日曜）学校像について」と題する3ページの文章を掲載してまいりました。新しく執筆に加わって下さる皆さまにも必ず読んで頂いてまいりました。まことに稚拙な文章ですが、私どもにとっては常に立ち返るべき原点であることに変わりありません。

この号には、四国中会教育委員会主催の日曜学校教師研修会における講演記録も掲載されています。第一講演の主題は「伝道する日曜学校を目指す教会形成」、第二講演は、「私どもの目指す日曜学校像」となっています。まさに、この二つが「本誌基本方針」の核となっているわけです。

ちなみに今号の「まえがき」をご寄稿くださいました東京恩寵教会の牛島智子執事は、まことに嬉しい応答を記して下さいました。「『日曜学校を子どもの礼拝共同体として捉え、働きの比重を礼拝式に置くと同時に、分級を子どもと向き合う【牧会】のイメージで考える』という主張は、なるほどと腑に落ちました。」

## 教団（大会・教会）と教会学校教案誌

さて、2001年4月の創刊号には、上記に勝るとも劣らない、大切な二つの文章を記させていただきました。「まえがき」と『『子どもカテキズム』オリエンテーション』です。教会学校教案誌の大きな節目となる今この時、あらためて創刊の原点を確認させて頂きたいと思います。

わたしは、日本キリスト改革派教会に何故、定期刊行物としての「教案誌」がないのだろうかと素朴な疑問を持っていました。およそ責任のある教団（教会）形成を志す群れであれば、自分たちの教師を養成する神学校を擁すべきことは、必須です。ほとんどの方が同意して下さると思います。そのこととただちに関連付けるのは、乱暴かもしれませんが、教団（教会）には、教会員とその子弟のために行われている教会学校のための全体のカリキュラムを整備し、提示する責任があると考えるのは、いかがでしょうか。このような問題意識を持っていた私の背中を、「自分たちの『教案誌』があればどれほど良いであろうか」との多数のしかも批判的な響きを持つ声を押してくれました。もとより、そのような企画は、まさに大会教育委員会が担うべきであるとの強い思いがありました。当然、打診とお尋ねをしましたが、そのような企画はまったくないとのことでした。そこで、委員会による仕事ではなく、まさに「有志」によって出発したのが弊誌なのです。

## カテキズム教育と教会学校教案誌

最初に、どのようなカリキュラムを整えるのかという点に、既に、私どもの目的意識は明確にされていました。「教理体得」を目指すという道です。教理の体得とは、キリスト者として、生きることそのもののことです。教えと実践と

を一つに結ばせ、神の栄光をあらわす存在として聖化の歩みを重ねる方法のことです。言葉(信仰)を行い(実践)が裏切らないこと、それはキリスト者の証の土台です。ただし、その裏切りを完全に克服することは、地上においては不可能です。

この課題は、信仰の教師としての務めを担うそのときに絶えず犯してしまう、信じている事柄と語っている言葉との「裏切り」の問題にも通じます。それは、真実の意味で言葉を磨く修練に勤むことです。それは、単なるレトリックつまり巧みな言葉や語り口を磨くことではありません。キリストの福音を福音として、真理を真理としてまっすぐに説き明かす力のことです。そして、それを克服する教理体得の道は、まさに改革教会の教育の真髄であるカテキズム教育によってこそ、よりよく担われるというのが私どもの確信でした。まえがきに、こうあります。「カテキズム教育という点、『言葉』の理解に終始する過ちに誘われやすいかと思えます。この教案誌は、それを克服すること、『事柄＝生けるキリスト』に導かれることをこそ目標として、編まれることになっております。」

### 子どもカテキズムと教会学校教案誌

そのようなカテキズムを用いた教育こそ、まさに日本キリスト改革派教会が積み重ねて来た教育の歴史に他なりません。そしてそのために、多くの教案やカテキズムが大会教育委員会によっても紹介また提供されてまいりました。さすがに優れたものが多いのです。何よりも、ウェストミンスター小教理問答は、契約の子らの教育のためにこれからも継続して重んじられて行くはずでしょうし、用いられるべきです。

しかしそれなら、何故、わざわざ「子どもカテキズム」なのでしょう。か。「日曜(教会)学校教案誌」とセットで発行され、言わば双子のような関係として企画されたのでしょうか。そこには、やはり私どもの問題意識がありました。

それは日本においてまた現代の子どもたちに信仰を教え、養おうとするとき、果たしてウェストミンスター小教理問答がもっともふさわしいものかという素朴な問いです。答えは、否です。そもそも、日本に生きる子どもたち、また教える親や教師たちに、自分たちの言葉で編まれたカテキズムが必要だと判断することは、理の当然ではないでしょうか。

子どもカテキズムは、確かにウェストミンスター小教理問答をベースにして編まれています。しかし、小教理には、教会論がきわめて手薄となっています。それは、うっかりすると私どもに致命的とも言える危うさをもたらすと思います。

さらに、私どもが願ったのは、教理体得の道、カテキズムの学びが即伝道になるべきことでした。オリエンテーションにこうあります。「この『子どもカテキズム』・『日曜学校教案誌』がキリスト者の「伝道のことば」を紡ぎだす一助となることも、私共の深い祈りの内にあることであります。」

教理体得の道、カテキズムによる学びはキリスト者の成長、成熟のためですが、それは、常に、キリスト者の伝道のことば、証のことば、存在をつくりだすためのものです。何よりも、このカテキズムを学ぶこと、教えることによって、罪を示され、個人的にイエスさまを主、キリストと告白できるように導きたいとの願いです(もとより、それが果たされているとは思っていません)。

数々の不備を抱えながらも「子どもカテキズム」は、個人的な使用のための再版を含めれば少なくとも2000部以上が販売されたと思われます。

### 現場へのエールと教会学校教案誌

最後に、定期刊行物へのこだわりです。14年前、「本」は手に取るものでした。しかし今、タブレット端末でも読まれ始めています。多く

の人が、なお、本の力を実感しておられるだろうと思います。それは、教材と定期行物との違いに通じるように思います。教師方は、おそらく真新しい弊誌を手にする時、新しい思いで奉仕に向き合っていると信じています。それは、弊誌の背後に祈りを込めて届ける奉仕者の存在があるからだろうと思います。教案誌とは、教師たちを励ます媒体であり、そうなりたいのです。

一昨年、休刊の危機に陥った時、内外から、「すでに膨大な蓄積があるから、それをメディア媒体で提供すればよいのでは」との声があがりました。確かに、廃刊の危機とは関係なく、それは便利です。しかし、もし定期発行でなくなっ

たとき、あの思いがしぼんでしまわないでしょうか。

大会教育委員会発行予定の「子どもと親のカテキズム」の全貌とその解説については、役員修養会での牧田先生の講演を収めた次号にお譲りします。私どもは、このカテキズムを、なんとしても実らせたいとの思いを持っています。それは、皆さまのご支持とご協力なしにはできません。そして何よりも！、諸教会、伝道所に契約の子はもとより地域の子どもたちの賛美と祈りの声が溢れるようになることです。そのために、いよいよ弊誌が充実したものとなりますように、お祈り下さい！ Soli Deo Gloria！



# はこぶねにのろう～恵みの契約の継承～(続)

長谷川はるひ (中部中会ジュニアサマーキャンプ実行委員会、関キリスト教会会員)

## 来てください

♩ = 120

F C F C Em7

Vocal

こ こ にきてくださーい み ん なきてくださーい だいこう

7 Dm7 C Dm7 Am7 Dm7 Fm

ずい が やっ て く る から そのま え に ー そのま え に

13 C C7

ー きー て く だ さ い

## 舟の中で

♩ = 90

C7 Em7 Dm7 C Em7 Dm7

Vocal

あ ば れ る み ず の う え を た だ よ う は こ ぶ ね を

5 C Dm7 Em7 Dm7 Em7

ー し ず ま ー な い よ う に ー こ わ れ ー な よ う に ー ま も っ

10 Dm7 Gb C

て く れ る ー か み さ ま

## 虹のやくそく

♩ = 90

Dm En Dm An

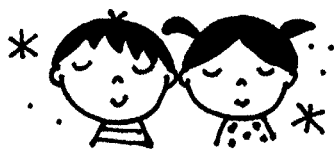
にじのやくそく - 主がかわれた - うめ

6 Dm G7 Cm7 Fm7 An

よふえよ地に満ちよ - もう二度と - おおみずで - い

10 Fm7 Dm7(b9) Cm7

きものをぜんめつに しはしないと



### ※編集部注

前号(53号)に掲載されるべき楽譜でしたが、編集部ミスで掲載されませんでした。長谷川はるひ姉をはじめ、関係者の皆様にお詫びいたします。

# 副読本のご案内

## 『主は羊飼—中高生のための教理入門—』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

### ❶ 人生の目的—神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしてきたときの事です。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということ考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことなってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなのです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の眞の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の眞の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなく、いと美しく、いと聖い、いと慈しむお方であられる。なみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

## 『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに13年目に入り、第54号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。



聖書默想・説教展開例・分級展開例

---

---

## 7月6日 御言葉をめぐって整えられる奉仕者 聖書黙想

---

テキスト	使徒言行録 7章1～7節
子どもカテキズム	問44
参照教理問答	ハイデルベルク信仰問答 問1,6 ウェストミンスター小教理問答 問46

---

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

ステファノは、エルサレム教会の中で選ばれた霊と知恵に満ちた評判の良い7人の1人でした。ステファノは、知恵と霊によって語るのに、ユダヤ人との議論では負けませんでした。ステファノとの議論で打ち負かされた人びとは、ステファノが「モーセと神を冒瀆する言葉を吐くのを聞いた」と人びとを唆しました。そして、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動してステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いていきました。それだけではなく、最高法院において、偽証人まで立て、「この男は、聖なる場所と律法をけなして、一向にやめようとしません」と訴えました。

そこで、議長である大祭司は、ステファノに「訴えのとおりか」と尋ねました。こうして、ステファノは、弁明を始めました。この弁明は、7章2節から53節まで続きます。

最初に、モーセが預言者として神の民イスラエルに「聞け、イスラエルよ」（申命記6:4）と語りかけたように、「兄弟であり父である皆さん、聞いてください」と最高法院の議員たちに訴えかけます。

ステファノは、2節から8節まで、創世記に記されているアブラハム物語を要約して語ります。「わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、『あなたの土地と親族を離れ、わたしの示す土地に行け』と言われました」。

創世記11章31節から12章1節には、次のように記されています。「テラは、息子アブラムと、ハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れて、カルデアのウルを出発し、カナン地方に向かった。彼らはハランまで来ると、そこにとどまった。テラは二百五年の生涯を終えて、ハランで死んだ。

主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。』

ステファノが大雑把に「メソポタミア」と呼んだ地は、「カルデアのウル」のことです。また、ステファノが用いた「栄光の神」という表現は、聖書には、詩編29編3節で「主の御声は水の上に響く。栄光の神の雷鳴はとどろく」と記されている一回しかでてきません。「栄光の神」と表現することで、アブラハムをご自身が示す地に導いた神の力強さ、偉大さを言い表したと思われます。4節よりステファノは、カルデアのウルを出た後のことについて語ります。

「それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なさったのです」。

創世記12章4節から7節には、次のように記されています。

「アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの櫛の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。主はアブラムに現れて、言われた。『あなたの子孫にこの土地を与える。』アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた」。

アブラハムは、ハランを出て、主なる神の指し示した地、カナンに入っていました。そこで、

主なる神よりこの地がアブラハムとその子孫に与えられました。

ステファノは、6節から7節で、主なる神がアブラハムにカナンの地を与える約束をした後の出来事について語っています。

「神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』」

創世記15章13節から15節で、主なる神は、アブラムを深い眠りに襲わせた後、次のように言われました。

「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く」。

ステファノは、7節で主なる神が「この場所でわたしを礼拝する」と語ったと言います。この言葉は、出エジプト記3章12節に記されている主なる神がモーセに語った次の言葉です。

「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」。

ステファノは、神を冒瀆しているという疑いによって、最高法院へと連れてこられました。ステファノは、自分が決して神を冒瀆していないことを伝えるために聖書から語っています。

ステファノは、主なる神が主の民を導く方であること、民は、自分たちを導く神にその与えられた状況の中で仕えていくことが強調されています。ステファノは、神殿礼拝にこだわる当時のエルサレムのユダヤ人に対して、聖書が決して神殿礼拝にこだわっているわけではないことを伝えようとしています。礼拝とは、「栄光の神」が民を召し出して整え、守り導いておられるので、行うことができます。ステファノは、ユダヤ人にこの

ことを伝えようとしていました。

### 〈カテキズムの解説〉

ハイデルベルク信仰問答問6の答では、人間の創造について次のように告白しています。

「神は人を良いものに、また御自分にかたどって、すなわち、まことの義と聖において創造なさいました。それは、人が自らの造り主なる神をただしく知り、心から愛し、永遠の幸いのうちを神と共に生き、そうして神をほめ歌い賛美するためでした」。

本来、人間は、神をほめ歌い賛美するため、すなわち、礼拝するために主なる神によって造られました。

ところが、罪に墮落したことで、人間は、正しく神を礼拝することができなくなってしまいました。

しかし、神はそのような罪人に聖霊を送って、神のため、自分を罪から救ってくれた主イエスのために喜んで生きることができる者となるように、礼拝できる者に整えてくださいます。

「そうしてまた、御自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることが心から喜びまたそれにふさわしくなるように、整えてもくださるのです」(八問答1)。

礼拝は、私たちにあって第一のものであり、これがなければまことの人間として生きていくことができません。十戒の第一戒は、聖霊の導きによって守ることができるようにされます。

「第一戒が私たちに求めている事は、神を唯一のまことの神また私たちの神として知り、認めること、またそれにふさわしく神を礼拝し、神の栄光をあらわすことです」(ウ小46)。

「私たちの真の神さまだけを心から礼拝しなければならない、ということです。これがもっとも大切な戒めです。ですから、私たちは喜んで礼拝をささげます」(子どもカテキズム問44)。

私たちは、聖霊の導きによって、どこでも主なる神を礼拝できる恵みの中を生きています。

(浅野正紀)

---

7月6日

御言葉をめぐって整えられる奉仕者

説教展開例

---

テキスト

使徒言行録 7章1～7節

参照子どもカテキズム

問44

---

### (単元のねらい)

聖書に記されている主なる神は、私たちを守り導いてくださる栄光の神さまです。主イエス・キリストによって罪ゆるされた私たちは、この栄光の神をどこにいても礼拝することができます。そして、私たちを守り導く栄光の神は、私たちに送った聖霊の働きによって、私たちが喜んで礼拝することができるように、整えてくださいます。この恵みの中を今生きていることを語りたい。

---

## 私たちを導く栄光の神さま

---

エルサレム教会は、イエスさまの十二人の弟子たちを助ける働きをするために7人を選びました。ステファノは、この7人の内の1人でした。

ステファノは、イエスさまが救い主であることを力強くエルサレムの人びとに宣べ伝えていました。ステファノは、神さまから力を得て、福音を語っていました。ですから、誰もステファノに議論で勝つことができませんでした。多くの人びとがステファノに議論で打ち負かされました。議論で打ち負かされ、悔しい思いをした人びとは、ステファノが神さまに従わない人であるというそをひろめました。

こうして、ステファノは、神さまに従わず、神さまをきちんと礼拝しないという罪のために捕らえられてしまいました。捕らえられたステファノは、ユダヤの議会であり裁判所でもある最高法院で裁判を受けることになりました。

最高法院の議長である大祭司は、ステファノに、「あなたは、神さまに従わない人物であると訴えられて捕らえられましたが、この訴えは、本当ですか」とたずねました。

そこで、ステファノは、大祭司と最高法院の議員に向かって、聖書の話をはじめました。ステファノは、聖書の話をする中で、自分が神さまに従っていること、神さまをきちんと礼拝していることを訴えようとしていました。

ステファノは、最初、旧約聖書の創世記に出て

くるアブラハムについて話しました。

「わたしたちの先祖であるアブラハムは、故郷のカルデアのウルにいた時、栄光の神さまに、こう語りかけられました。『あなたの土地と親族を離れて、わたしが示す土地に行きなさい。』」

神さまは、アブラハムに故郷のカルデアのウルで語りかけ、彼にこの土地を出るように命じました。こうして、アブラハムは、カルデアのウルを出て、ハランに住むことになりました。

ステファノは、アブラハムに語りかけた方を栄光の神さまと呼んでいます。「栄光」とは、とてもすばらしいこと、とても力強いことをあらわす言葉です。

神さまは、力強い御手をもって、アブラハムを導きました。栄光の神さまは、アブラハムの父、テラが死んだ後、アブラハムをハランからさらにカナンへと導きました。そこで、アブラハムにある約束を与えました。

「このカナンの土地をあなたに与えます。あなたの死後はあなたの子孫がこの土地を受け継ぐこととなります」。

神さまは、それだけではなく、続けて次のこともアブラハムに伝えました。

「あなたの子孫は、わたしが与えたカナンの土地から別の場所に移り住み、400年の間、その土地で奴隷として苦しんで生きていくこととなります。しかし、あなたの子孫を奴隷にする国民をわ

たしが裁きます。その後、あなたの子孫は、その国を脱出して、再びこの場所に戻ってきてわたしを礼拝することができるようになります」。

以上が、ステファノが最高法院の議長である大祭司と議員に語ったアブラハムの話です。ステファノは、アブラハムの話をするので、いったい何を伝えたかったのでしょうか。

ステファノは、栄光の神さまが神さまを信じる人びとをどんな時も導いてくださる方であることを伝えようとしています。ですから、神さまを信じる人びとは、どのような状況の中にあっても必ず自分たちを導いてくださる栄光の神さまに仕えていくことが求められています。

ステファノの時代、エルサレムに住んでいた人びとは、立派な神殿に行って、神さまを礼拝することを大切にしていました。神殿礼拝を行うことがきちんと神さまを礼拝し、神さまに従っていることだと思っていました。

しかし、イエスさまが生まれて、エルサレムで十字架にかかって死に、三日目に復活し、天に上げられた後は、もはや神殿で礼拝する必要はなくなりました。

私たちは、わざわざ、エルサレムまで行って、神さまを礼拝しなくてもよいのです。それは、イエスさまは、神さまを信じる人びとのいるところ

どこにでも必ずいっしょにいてくださるからです。

そもそも、人間は、神さまのかたちにつくられ、つくり主である神さまをほめたたえ、礼拝する者としてつくられました。

ところが、人間が罪に墮落して、つくり主である神さまに背を向けて生きていくようになったことで、神さまをきちんと礼拝することができなくなってしまいました。

このような罪ある私たちのために、神さまは、イエスさまをこの世界に生まれさせてくださいました。そして、イエスさまは、私たちの罪を神さまの前で償うために、十字架にかかって死んでくださいました。

こうして、罪ある私たちが神さまの前に出ることができるようになり、喜んで神さまをほめたたえ、礼拝することができるようになりました。ですから、罪ゆるされた私たちは、どこにいても、どんな状況の中にあっても、神さまを礼拝することができます。

礼拝とは、栄光の神さまが私たちを招いてくださり、整えてくださることでどこにいても、いつでも行うことができます。私たちは、どこでもいつでも神さまを礼拝できる恵みの中を、今生きています。(浅野正紀)

---

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 7章7節

更に、神は言われました。

「彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。」

---



7月6日

御言葉をめぐって整えられる奉仕者

幼稚科

〈ねらい〉

神さまは、私たちが主イエス様のために喜んで  
生き、喜んで礼拝できるよう、力を与えて下さっ  
ています。

〈展開例〉

「教会」と「祈り人」のぬり絵をしましょう。



対話の手掛かりとして……

①ステファノは、まずアブラハムのことについて語り始めました。神の民イスラエルの歴史はこのアブラハムから始まったのです。アブラハムは、神様の言葉を聞いて、神様の示す地に向かって旅立ちました。「あなたの土地と親族を離れ」(3節)とあるように、慣れ親しんだ地と親しい者たちを離れて、旅立ったのです。人生を旅にたとえることがあります。信仰もアブラハムに見られるように、旅に出ることなのです。しかし、その信仰の旅は、普通の旅とは違います。自分が行きたい所に行くわけではありません。あるいは、綿密に旅の計画を立てて歩み出すことでもありません。反対に、何の計画も立てずに、行き当たりばったりの旅に出かけることでもないのです。では信仰の旅において大切なことは何なのでしょう。それは「神様の言葉」に聞き従うことです。

②「財産も何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも」(5節)とあるように、「これは自分のもの」と言うことができる物を何も持たずに旅に出ました。つまり自分の持っているものに依り頼むことが全くできない中で、ただ神様の約束の言葉を信じて歩み出して行くのです。それが信仰の旅です。アブラハムは、この神様の約束の言葉を信じて旅立ち、歩んだのです。「約束」とは、今はまだ目に見える現実となっていないことの約束です。目に見える現実においては、一步の幅の土地さえも得てはいないのです。また、アブラハムも妻のサラも、旅立った時には既に高齢であり、子どももいませんでした。そういう現実の中で、「この地をあなたに与え、あなたの子孫に相続させる」(5節)という約束だけを与えられて、それによっ

て歩んだのです。さらに、エジプトへの移住と、そこでの奴隷の苦しみ、そしてモーセによる出エジプトとカナンの地への定住の歩みが予告されます(6～7節)。これらのことも、まだ起っていないことの約束です。そのようなことが実現するという目に見える保証は何もない、ただの約束の言葉に過ぎないと言ってしまえばその通りのことです。しかし、アブラハムはこのような神様の約束のみ言葉を信じて歩みました。

③こういう信仰を見て、皆さんはどう思われるでしょうか。これは、「信仰の父」と呼ばれたアブラハムという偉大な人物だから、そのような立派な信仰を持つことができたのだと思うかもしれません。でも、創世記を読むと、そんなアブラハムも数々の過ちを犯したことが分かります。神様の約束よりも、自分たちを取り巻く現実の方が、より確かだと信じてしまったことがあったのです。そうだとしたら、この信仰の旅を最後まで支え、導いてくださるのは、アブラハム自身ではなく、神様御自身であることが分かります。「信仰の旅をわたしと共に歩もう」と声を掛けてくださった神様は最後まで、私たちの手を取り、約束の地まで導いてくださいます。「わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ わたしが与えた使命を必ず果たす」(イザヤ書55種11節)。信仰の旅、それは「冒険」とも言われます。冒険に出かけるとき、確かに不安はありますが、それにも勝ってワクワクする思いの方が強いのではないのでしょうか。やがて、誰も発見したことのない大陸を見つけ、大きな喜びを得ることができるように、神様の約束の言葉に従う歩みの先には、まだ経験したことのない豊かな祝福があるので

---

## 7月13日 サウロを回心させる復活のキリスト 聖書黙想

---

テキスト 使徒言行録 9章1～19節

---

### 〈救済史カリキュラムの文脈〉

聖霊降臨日から始まった救済史の終わりの時代をたどるカリキュラムは、ステファノの説教と殉教を契機として、福音がエルサレム・ユダヤ・サマリア・地の果てまでも伝播してゆく出来事を、聖霊の働きとして語り継ぎます。とりわけ、復活の主イエスによるサウロの回心は、シリアのアンティオキア教会から派遣される宣教師の召命へと整えられ、それに応えた使徒パウロの働きが、小アジア・ギリシアにおける異邦人伝道に用いられます。救済史の終わりの時代は聖霊による使徒の働きに始まり、福音の全世界的宣教がサウロ回心の出来事、すなわちパウロの召命体験に始まったことを、喜びをもって語り伝えましょう。

### 〈単元の主題と目標について〉

「サウロを回心させた復活のキリスト」。この歴史的な出来事を、聖書が伝えるままに受け入れ、生徒たちと分かち合うことが、単元の主題です。その際、「目からウロコを落とし、キリストの証人として立てる、神の力と愛に与かろう」と生徒らに呼びかけることを目標とします。

その際、注意が必要です。サウロ回心の出来事は、使徒時代に独特の現象であるとともに、救済史において固有の意味を持ちます。これを弁えた上で、パウロの召命に類似した体験が、キリスト信徒に普遍的に起こり得るとともに、その信徒が生まれ育った教会にとって、その時代と地域において、福音宣教の働きに固有の意味を持つことを厳粛に受け留める必要があります。

### 〈サウロ回心の出来事の救済史における固有性〉

ダマスコ途上の体験に至るまでの、サウロという人物、その半生について振り返ります。彼はローマ帝国キリキヤ州のタルソスに生まれたユダヤ人です。彼の父親はローマ市民権を持ち、タルソスでも名のあるユダヤ人一家でした。「サウロ」はユダヤ人として付けられた名ですが、ローマ市民

権を持つ者として「パウロ」という名を与えられました。ギリシア風の大都市タルソス出身で、生まれながらに自由人であるパウロでしたが、それ以上に、ヘブライ人の先祖と伝統を持ち、その教育を受けていることをサウロは誇りとししました。タルソスを旅立ってエルサレムに行き、当時最も偉大なラビ・ガマリエル門下で教育を受け、ユダヤ教の専門的な知識と実践を身に付けて、イスラエルの教師となる道は前途洋洋でした。特に、ファリサイ派の思想は彼の心を捉えたようで、律法の伝統的な解釈を学び、それを実践することこそ、神に受け入れられる道であり、来るべき世の命に与かる条件であると信じて疑いませんでした。

時は紀元30年から33年、希望と野心に燃える若者サウロが闊歩したエルサレムに、「ナザレ人の運動」が起こります。「十字架で死んだイエスこそメシアである」との主張は、サウロにとっては、余りにも馬鹿げていて、真剣に取り上げる価値もない思想でした。「木にかけられた者は神から呪われている」と律法（申命記21:23）にあるからです。十字架にかけられたイエスは神から呪われた者であって、神の特別の愛顧の対象であるメシア（ダビデの再来）であるはずはないと思ったからです。しかし、この一派は無視できない存在となります。「イエスは復活した」との教えを、律法学者や神殿祭司までもが信じるようになったからです。

神殿を含む、イスラエルの秩序を乗り越える、新しい秩序の創始者となった「イエスこそメシアである」。そう主張する思想は危険であり、脅威であると感じたサウロは、エルサレム教会の説教者「ステファノの殺害に賛成し」（使徒言行録8:1）、「この道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺し」（使徒言行録22:4）、「至るところの会堂で、しばしば彼らを罰して、イエスを冒瀆するよう彼らに強制し、激しく怒り狂って、外国の町にまでも迫害の手を伸ばし」（使徒言行録26:11）ます。大祭司カヤパから得た捜査令状



を手に、シリアに赴いて、ダマスコへ逃げたナザレ人イエスの一派を逮捕しようと思気込んだのです。その途上で、サウロは、太陽よりもまばゆい天からの光を見て、地面に倒れ、死んだはずのイエスの声を聞くのです。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」(使徒言行録9:4,5)。

このダマスコ途上の体験がサウロにもたらした決定的影響は、彼が「洗礼を受けた」(使徒言行録9:18)ことです。「イエスの名を唱えて洗礼を受け、罪を洗い清められた」(使徒言行録22:16)ことです。この出来事がサウロの「回心体験」と言われる所以です。復活の主イエスとの出会いによって、彼はキリスト信徒の主張が正しかったことを知ったのです。「イエスこそメシア、神の子(神そのもの)である」(ガラテヤ1:12,16)と悟ったのです。それで彼は「ナザレ人イエスを迫害する者から、罪を赦されて、神の子イエスを信じる人に」回心させられたのです。彼をユダヤ教徒からキリスト信徒に回心させたのは、神の偉大なる御業でした。

### 〈パウロの召命体験の福音宣教における普遍性〉

「行け、アナニア。あの者(パウロ)は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたし(イエス)が選んだ器である」(使徒言行録9:15参照)。

ダマスコ途上の出来事は、サウロの回心体験であると同時に、彼の召命体験でもありました。イスラエルの人びとの前に、また異邦人とその王たちの前に、神の子イエス・キリストの御名を運んでゆく「神の選びの器」としてサウロは召命を受けたのです。復活の主イエスの口から出る御言葉を聞き、まさに神の独り子なる正しい方と出会い、キリストの御心を悟らされた彼は、「その見聞きしたことの証し人」となるように召されたのです。サウロをユダヤ人の中から、ローマ市民の中からも救い出し、新しいイスラエルであるクリスチャンとして回心させ、神の子イエス・キリストの御名を運ぶ選びの器として召し出した神は、パウロを福音宣教者として派遣なさいます。人びとを神

に立ち返らせ、赦しと和解に与らせるためです。回心体験とともに召命体験をしたパウロは「イエスこそ神の子であると宣べ伝え」(使徒言行録9:20)、「イエスがメシアであると論証し」(使徒言行録9:22)たのです。

宗教改革者カルヴァンは、パウロの召命体験を、クリスチャンの召命体験の雛形と理解しました。「選びの器(選ばれた機関)とは、優れた教職者と考えられる。この機関organという語は、神が御心に従って人の働きをお用いになる以外に、人は何も行うことが出来ないことを明示する。私たちは神の器vesselならば、神こそが創造主であり、神だけが器を用いる力を手にしておられる。この箇所(使徒言行録9:15)で、キリストがパウロについて仰っていることは、一様に、すべての者にあてはまる。従って、人がいかに熱心に働き、その職務を勇敢に行ったとしても、決して自分を称賛する理由とはならない」(J.カルヴァン『新約聖書注解—使徒行伝』)。

### 〈生徒らに呼びかけること〉

サウロ回心の出来事は、救済史において、特に旧約の律法と預言を福音理解に結びつける上で固有の意味を持ちます。パウロの召命体験は、福音宣教における復活の主イエスのご支配と聖霊の指導を証しする出来事です。

教会学校(日曜学校)に集う生徒たちの多くは教会員の子どもたち、幼児洗礼を受けており信仰告白が待たれる未陪餐会員でしょう。そうではない生徒たちもまた、やがては信仰を告白して洗礼を受けることになるでしょう。

信仰告白を求められる生徒らには、サウロ回心の出来事に「キリストに従う」という信仰告白の本質を見て取るよう呼びかけることが必要です。また、伝道に召される生徒らには、パウロの召命体験から「聖霊に仕える」という福音宣教の要請を弁え知るよう呼びかけることが大切です。

一人の生徒が信仰を告白すること、そして召命に応答すること。この出来事は、100%人間の営みであると同時に、100%神の御業です。主イエスに結ばれた者が体験する、厳かな恵みの成就です。

(二宮 創)

---

## 7月13日 サウロを回心させる復活のキリスト 説教展開例

---

テキスト	使徒言行録 9章1～19節
子どもカテキズム	問29
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問30～32 ウェストミンスター大教理問答 問66～68

---

### (単元のねらい)

救済史の文脈において、キリスト教会を迫害したサウロがキリスト信徒に回心する出来事は、旧約の律法と預言がキリストにおいて成就したという福音理解へと彼を導くために、復活の主イエスご自身が起こされました。サウロの回心の出来事に「キリストに従う」という信仰告白の本質を見て取ることができます。また、キリストに従ったパウロが福音宣教者に召される体験は、信仰告白して洗礼を受けたキリスト信徒が、聖霊によって、それぞれの時代と地域における教会の伝道の働きへと召されることの雛形です。パウロの召命体験から「聖霊に仕える」という福音宣教における要請を弁え知ることが大切です。これらのことを分かち合い、呼びかけるための説教を祈り求め、書き留めましょう。

---

## キリストに従う人になる

---

「どうすれば、信仰告白できますか。信仰告白したら、どうなりますか」。こんなふうに、いつか質問してみたい。でも、まだしなくていいかも。じゃあ、いつすればいいのかな。今でしょ!。ということで、今日は皆さんが心の内に秘めている大切な質問に、ご一緒に取り組みたいと思っています。日曜学校の教師が、答えを持っているではありません。生徒である皆さんが、一人一人自分で、答えを見つけていただきたいのです。そのためのお手伝いをさせていただきます。

幼児洗礼を受けているあなたは、信仰告白することを求められています。まだ洗礼を受けていないあなたも、やがて信仰告白して洗礼を受ける日が訪れます。つまり、洗礼の後か前かにかかわらず、今ここにいる皆さんは、信仰を告白するよう導かれているのです。導いているのは、日曜学校に奉仕する教師たちを訓練し、派遣しておられる主イエスさまです。「どうすれば、信仰告白できますか。信仰告白したら、どうなりますか」。この問いは、主イエスさまが聖霊を遣わして、あなたの心に抱かせた問いなのです。この問いに答えるためには、聖霊の導きによって主イエスさまの御心を知ることが、どうしても必要です。

今日の聖書の箇所は、ひとりの人間に信仰を抱かせ、それを告白させ、洗礼を受けさせる主イエスさまの御心を知るためには、絶好の箇所です。「サウロ」という名のユダヤ人、生まれながらにローマ市民であるため「パウロ」と名乗った人。彼はユダヤ人の家庭に生まれた子どもとして、十戒を教えられ、それを守って生きる青年へと成長しました。生まれ故郷タルソスから都エルサレムへ留学し、最も偉大な律法学者ガマリエルの門下でユダヤ教の専門知識と実践を身に付け、イスラエルの社会で教師となる前途は洋洋でした。

その折も折、紀元30年ごろ、エルサレムに新しい思想と運動が起こります。「十字架で死んだナザレのイエスこそメシア（キリスト）である」。こう主張する者たちが現われたのです。十字架という最も呪われた処刑方法で死んだ罪人が、イスラエルの待ち望む救い主メシアであるはずがない。サウロは鼻で笑い、聞き流していました。しかしそうもしてはいられなくなります。「イエスは復活した」という教えを、律法学者や神殿祭司までが信じるようになったからです。イスラエルの宗教と社会の秩序をひっくりかえす、イエスの

弟子たちを無視できなくなったのです。

サウロは、厳格なユダヤ教ファリサイ派の青年として、ひたすら信仰的な熱心から、エルサレム周辺にいたイエスの弟子たちを徹底的に迫害するようになります。シリアへ逃れたイエスの弟子を追いかけて行って、つかまえ、イエスをメシアと呼ぶことをやめさせようとしています。激しく怒りながら、早馬を走らせるサウロでしたが、ダマスコの町に近づいたとき、突然、太陽よりもまぶしい天からの光を見て、地面に倒れてしまうのです。そして不思議にも、天から語りかける声を聞くのです。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」（使徒言行録9:4,5）。サウロは目が見えなくなり、畏れに囚われながら待っていると、そこにイエスの弟子が現われて、こう告げます。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現われてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたし（アナニア）をお遣わしになったのです」（使徒言行録9:17）。やはり！あの声は！死んだはずのイエスの声でした。「イエスは復活した」と言って憚らない弟子たちの主張は、真実だったのです。目からウロコが落ちて、サウロは見えるようになりました。彼は身を起こして、洗礼を受けました。イエスの名を唱えて洗礼を受け、罪を洗い清めていただいたのです。食事をして元気を取り戻したサウロに、イエスの弟子アナニアは、さらに告げてください。「あなたは、異邦人や王たち、またイスラエルの子らに、主イエスの名を伝えるために、主イエスが選んだ器です」（使徒言行録9:15）と。するとどうでしょう！迫害者だったサウロは「イエスこそ神の子である」、「イエスこそキリストである」と宣べ伝える、伝道者パウロに生まれ変わりました（使徒言行録9:20, 22）。

「どうすれば、信仰告白できますか」。この問い

の答えを求めているあなたには、サウロが回心した出来事に注目していただきたい。無視していたナザレのイエスを無視することができなくなった。疑っていた復活の主イエスを疑うことができなくなった。イエスの弟子たちを迫害した自分の罪と向き合わないわけにいかなくなった。悔っていた十字架のキリストを恐れ敬わないわけにいかなくなった。自分の意志をはるかに超える神のご意志によって、このように導かれたことを感謝せずにはいられなくなった。サウロはこうして、洗礼を志願したのです。聖書は彼の信仰告白の言葉を伝えていません。しかし「キリストに従う」という信仰告白の本質を描きました。「わたしはキリストに従います」という思いが整えられたら、教会の牧師に志願してください。キリストに従うあなたの言葉と行いも整えられます。

「信仰告白したら、どうなりますか」と不安になったり躊躇したり。そんなあなたには、パウロの召命体験に注目していただきたい。キリストに従ったパウロは、主イエスに結ばれたのです。十字架のキリストとともに死んで、復活の主イエスとともに甦ったのです。キリストの贖いの恵みによって、罪を赦され、神との和解を得たのです。主イエスの復活の命を分け与えられ、新しい人生を歩み始めたのです。「イエス様こそわたしの主、わたしの神、わたしを救ってくださいる方、わたしを生かしてくださいる方」と、証ししないではいられなくなります。「あなたを生かしてくださいる方、あなたを救ってくださいる方、あなたの神、あなたの主こそ、キリストです」と、宣べ伝えないではいられなくなります。このような召命体験を、あなたもすることになるのです。信仰告白した人は「聖霊に仕える人」になります。「わたしは聖霊に仕えます」という願いが与えられたら、教会の牧師に相談してください。聖霊に仕えるあなたにふさわしい賜物と奉仕と仲間たちが与えられます。

（二宮 創）

---

〔今週の暗唱聖句〕 使徒言行録 9章4,5節

サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。  
わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

---

7月13日 サウロを回心させる復活のキリスト 幼稚科

〈ねらい〉

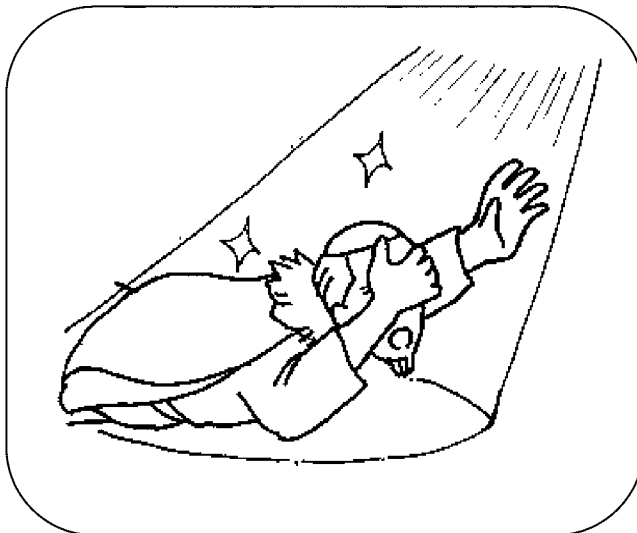
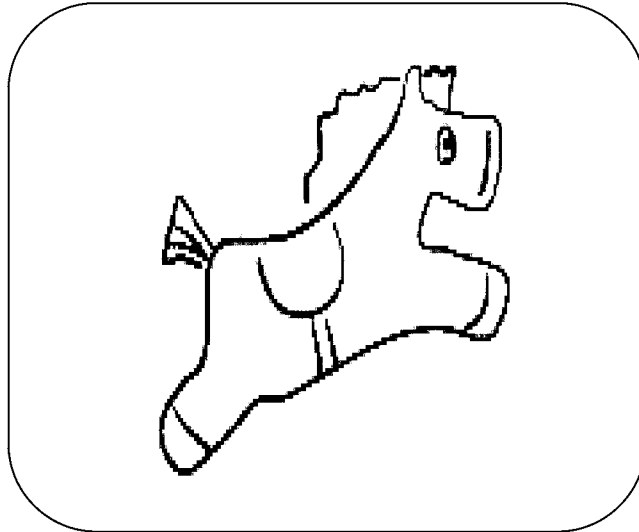
神様の力によって、私たちは、「イエス様こそ、わたしの主、わたしの神さま」と告白し、キリストに従う人に変えられます。

先生へのひとくちメモ

「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのわたしは、あなたが迫害しているイエスである。」  
「馬」から落ちたサウロは、イエス様の光によってかえられました。

〈展開例〉

ぬり絵をしましょう。



## 7月13日 サウロを回心させる復活のキリスト 中学科

対話の手掛かりとして……。

- ①いつになったら自分は信仰告白をしたらよいのだろうか、そのタイミングを伺いながら教会にきている中高生たちもいることでしょう。でもそのためには、自分もあのサウロのように決定的な回心が必要なのだと思います。まるで回心することが、「キリスト者になる条件」の一つのように。それに対して、教師たちは、回心・悔い改めは人間の業ではなく、神様がなさることです、と教えることはできるかもしれませんが。でもそれだけでは、彼らは納得できないのではないのでしょうか。「私もあのサウロのような回心体験を通して、キリストを信じる者とされたい」という彼らの気持ちの奥には何があるのでしょうか。個人的な経験から一つ言えるのは、キリストに救われた喜びを実感しないまま、信仰告白することは、神様に対して失礼ではないかと真剣に考えているということです。
- ②イエス様の救いが心から本当に分かるまで、信仰告白はしない。洗礼を受けないという思いは、単純にわがままだとか、自分に頼り過ぎだといって叱るのではなく、むしろ喜んであげたらよいのではないのでしょうか。決して皆がサウロのような回心体験をするわけではありません。皆がサウロと同じような仕方でキリストに出会うわけではないのです。あるいは、誰の目にも分かるようなとても大きな罪を犯さなければ、キリストの救いが分からないということでもないのです。去年のクリスマスに信仰告白をした高校生が、教会学校版の月報の中で、後輩たちこのように語り掛けていました。「信仰告白とは、キリストと一緒にこれから生きていくことを約束します、と神様と教会の皆の前で誓約することだよ」と。印象深い言葉でした。イエス

様と一緒に生きていくことができたら、もうそれで十分なのです。なすべきことは、復活の主が示してくださいます(6節)。キリストに従っていく歩みの中で、主の恵みがいかに大きいものであったのかを知ることができるのです。

- ③今回のテキストを読んでいて、改めて心に留まることの一つは、「見える」という言葉がたくさん記されていることです。そもそもサウロは、すべてが見える人間だと自負していました。だから、キリストの十字架が如何に愚かなものであるのかを分かったつもりでいたのです。だから、キリスト教会を迫害することは正しいことだと信じていました。でも、復活の主に出会って、サウロの目が閉じられます。キリストとの出会いによって、私たちはすぐに目が開かれるわけではないのです。むしろ閉じられるということがあるのです。イエス様のことが分かるということは、変な言い方かもしれませんが、イエス様のことが分からなくなることでもあると思います。「イエス様とはこのような方だ」「自分とはこういう人間だ」と、今まで分かっていたつもりが、いや実はそうではなかったということを経験するのです。だから分からなくなることは、信仰が薄いということでは必ずしもありません。神様の前に自分はまだ未熟だし、従っていける器ではないと思うとき、既にそこに復活の主との出会いがあるのではないのでしょうか。ぜひそこでサウロが祈ったように、祈ってください(11節)。そして、アナニアを通して、サウロの目が開かれたように、教会の仲間たちは、その人のために祈るのです。見えなくて悩んでいる自分のことをいつも心に掛けて、祈ってくれる仲間がいることを知っていることは、キリスト者としてのこれからの歩みを支える力となるのです。

テキスト 使徒言行録 11章19～30節  
子どもカテキズム 問65  
参照教理問答 ハイデルベルク信仰問答 問32, 54, 55

---

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

19節「ステファノの事件」は、使徒言行録7章から8章にかけて書き留められています。その事件をきっかけにユダヤ当局による大迫害がエルサレム教会に対して起こりました。この大迫害によって、使徒たちを除く教会員たちが、ユダヤ地方、サマリア地方に散っていったのでした(8:1)。教会への大迫害は、教会にとっては逆境でしたが、この逆境を通じて福音がそれらの地方にも宣べ伝えられたのでした(8:4)。さらに福音は、サマリア以北のフェニキア地方、キプロス島、そして、ローマ帝国第3の都市、シリア州の首都アンティオキアにまで、散らされた教会員たちによって宣べ伝えられたのです。神さまは、教会にとって大迫害という逆風をかえって福音の伝播という順風に変えられたのです。神さまにおいて危機は好機(チャンス)となるのです。

しかし、この段階で、それらの地方のユダヤ人だけにしか御言葉は宣べ伝えられませんでした。彼らは、十字架で殺されたが三日目に復活させられたナザレのイエスこそ、神さまから遣わされたメシア(＝キリスト)であるとの説教を聴いたのです。

20節 キプロス島や北アフリカのキレネからアンティオキアにきた教会員たちは、現地の「ギリシア語を話す人々」、ユダヤ人以外の異邦人にも、主イエスについての福音を宣べ伝えました。十字架で殺されたが三日目に復活させられたナザレのイエスこそ、救い主であると語ったのです。ローマ皇帝が救い主でなく、イエスこそ救い主である！と。

21節「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28:20)と約束なさった主イエスさまは聖霊にあって彼らとも共におら

れ、彼らの伝道の働きを助けられました。神さまの御心のゆえに、アンティオキアでは、主イエスさまを信じる者が多かったのです。こうして、異邦人を中心とするアンティオキア教会が創立されました。私たち日本の教会のご先祖にあたる教会です。

22節 アンティオキア教会創立の情報がエルサレム教会に伝わりますと、教会(使徒たち)は、バルナバをアンティオキア教会に派遣しました。バルナバ、本名ヨセフは、キプロス島生まれで、自分の畑を売ってその代金を教会に献金した人でした(4:36,37)。バルナバは「慰めの子」という意味のニックネームです。彼がキプロス島出身であったことや彼の人柄などから、アンティオキア教会のリーダーたちも受け容れてくれるに違いないと、教会は判断したのでしょうか。

23節 バルナバは、アンティオキア教会に到着すると、神さまの恵みがユダヤ人以外の異邦人たちにも豊かに与えられている様子を見て喜びました。そして、教会員たちに向かって「固い決意をもって主イエスさまから離れることのないように」と説教しました。主イエスさまから離れてしまうならば、アンティオキアにおける伝道と教会形成は立ち行かないからです。アンティオキア伝道の努力も徒労に終わってしまうのです。教会の創立者たちの信仰がその教会の行く末を決めます。

24節 バルナバのことがもう一度紹介されます。彼は「立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちて」いました。バルナバがアンティオキア伝道を核になって行ったおかげで、教会は成長しました。この点、エルサレム教会のリーダーたちの判断は間違っていないでして、「慰めの子」と呼ばれる

ぐらいですから、現地の人たちの傍らにあって、悩み苦しみをよく聴いてあげたのかもしれませんが。大牧者イエスさまに倣って、迷える小羊と共に歩む中で、その一人一人にふさわしく福音を宣べ伝えたのでしょう。真理を知らされている者が取りがちな上から目線的な態度でなかったことは確かです。

25節 バルナバは、しばらく、アンティオキア伝道に従事しました。しかし、アンティオキア伝道がいよいよ豊かな実を結ぶためには、サウロとの協力が必要でした。エルサレム教会での出会い以来(9:27)、バルナバはサウロを高く評価していたのでしょう。サウロは、エルサレムで、命を狙われ、タルソスへと逃れていましたが、バルナバは、タルソスに行って、彼を捜し当てました。

26節 バルナバは、サウロをアンティオキアに連れ帰って、二人は協力しながら、アンティオキア伝道、そして、教会教育に従事しました。その結果、宣教の実が豊かに実りました。この頃、「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるように」になりました。ハイデルベルク信仰問答問32で、キリスト者の意味を確認しましょう。「問32 しかし、なぜあなたが『キリスト者』と呼ばれるのですか。 答 なぜなら、わたしは信仰によってキリストの一部となり、その油注ぎにあずかっているからです。それは、わたしもまたこの方の御名を告白し、生きた感謝の献げ物として自らをこの方に献げ、この世においては自由な良心をもって罪や悪魔と戦い、ついにはこの方と共に全被造物を永遠に支配するためです」(吉田隆訳)。バルナバとサウロとの協力伝道によって、十字架と復活のイエスを救い主と告白する者が、アンティオキアで増えていったのです。この帝国第3の都市で、主イエスさまのものとした者たちが極めて少数者ならば「キリスト者」と未信者から呼ばれることはなかったでしょう。何かにつけ、人数も、その生き方も、目立つよう

になったので、そのように呼ばれるようになったのでしょう。キリスト者の存在が社会のいろんな領域で影響を与えるようになったのです。人生、世界のあらゆる領域で、イエスさまを主と信じ、告白して生きる、それがキリスト者ですが、彼らはカルヴィニストのご先祖とも言えましょう。

27節 エルサレム教会には、この当期限定の預言者集団が存在したようです。アンティオキア伝道の進展を聞いて、伝道の応援にやって来たのでしょうか。

28節 預言者の一人アガボが、世界中の大飢饉を聖霊によって予告するのです。真の預言者の予告は必ず実現します。ローマ皇帝第4代クラウディウスの時に現実となったのです。

29節 どうやら、ユダヤ地方が大飢饉の影響をもろに受けたようですが、アンティオキア教会の教会員たちは、各々の経済力に応じて、ユダヤの諸教会に援助の手を差し伸べることにしました。教会会議で決めたのでしょうか。

30節バルナバとサウロとの二人が、アンティオキア教会から派遣されて、援助の物品をユダヤの諸教会に届けました。アンティオキア教会は、伝道活動に励む群れでもありましたが、愛の業、執事的活動にも熱心な群れでした。教会の頭イエスさまにしっかりつながったがゆえの豊かな実りを見て取ることができます。

### 〈子どもたちに対して〉

この聖書箇所を黙想しながら、いつも私の心を占めていたのは、ヨハネによる福音書15章5節の御言葉です。アンティオキア教会の精力的な伝道活動も、また、ユダヤの諸教会に対する深い愛の業も、すべては、イエスさまにつながったの豊かな結実であることを伝えたい。(長谷川潤)

---

## 7月20日 世界を目指すアンテオキア教会 説教展開例

---

テキスト 使徒言行録 11章19～30節  
子どもカテキズム 問65

---

### (単元のねらい)

今回の聖書箇所には、とても大事な真理が示されている。世界宣教を志すアンテオキア教会だが、そのような教会も、主イエスさまから離れないことが宣教力の源であったことを教えられる。バルナバの勧めを忠実に守り、教会外の人たちから「キリスト者」と呼ばれるぐらいにその信仰と生活の路線をはっきりと社会に対して打ち出した先輩たちに倣いたい。

---

## すべての人にイエスさまを!!

---

愛するお友だち、おはようございます。

みんなの幼稚園、小学校では、いよいよ、長い長い夏休みが始まりますね。幼稚園や小学校は夏休みですが、こどもの教会（日曜学校）は、毎週日曜日の礼拝にももちろんお休みはありません。こどもの教会の礼拝式で聖書の御言葉に聴くことで、イエスさまとのきずなをいよいよ太くされて、一週間の生活を始めましょうね。みんなが暑さに負けないで、この夏も元気に過ごすことができるように、先生、お祈りしているからね。また、暑いからって、冷たいもの食べ過ぎないようにね。

さて、世界で最初の教会、エルサレム教会は、イエスさまのことをユダヤの人たちにしか伝えませんでした。ところが、いろんなことがきっかけになって、ユダヤの人たちの他にも伝えるようになったのです。その一つのきっかけが、ステファノさんがユダヤでえばっている人たちによって殺されて、そればかりか教会がひどくいじめられたことでした。それで、教会の人たちは、いろんな所に逃げて行って、その途中、イエスさまのことをその土地その土地の人たちに伝えたのです。特にアンテオキアという大きな町では、ユダヤの人の他にもイエスさまのことを伝えました。そして、そのアンテオキアの町に教会が誕生したのです。この教会の人たちは、ユダヤの人たちではありませんでした。

このアンテオキア教会でリーダーとなってイエスさまのことを伝えたのは、バルナバという人

でした。このバルナバさん、聖霊なるイエスさまに助けられて、たくさんの人たちにイエスさまのことを伝えました。そうしたら、たくさんの人たちがイエスさまを信じるようになって洗礼を受けました。しかし、バルナバさん、前にエルサレムで会ったサウロさんと力を合わせるならば、もっとたくさんの人たちにイエスさまのことを伝えることができるのにと考えて、タルソスという所にサウロさんを見つけに出かけていったのです。このサウロさんが後のパウロさんです。そして、サウロさんを見つけ出して、アンテオキアに連れて帰ると、丸一年間、バルナバさんとサウロさんとは力を合わせてイエスさまのことをたくさんの人たちに伝えました。

それで、けさ、みんなにおぼえてもらいたいことは、26節に書いてあることです。そこだけ読みましょう。「このアンテオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである」。

「キリスト者」というのはカタカナで「クリスチャン」ですが、イエスさまのものとされた人たちという意味です。イエスさまがご自分のお命と引き換えに罪と悪魔の支配から救い出して、ご自分のものとしてくださった人たちのことです。アンテオキアの町にどれぐらいの人数のキリスト者がいたのかわかりませんが、最初の頃に比べると、バルナバさんとサウロさんの働きでキリスト者の人数が増えていたのでしょう。そうい



うわけで、キリスト者が町の中で目立つようになっていたのでしょう。ローマの国で一番偉い皇帝ではなく、十字架で殺されたけれども三日目に復活し天の王座に着いたイエスという男を救い主と堂々とやっているのです。また、神殿に祭られている神々でなく、イエスを人となられた神さまと信じて拝んでいるのです。アンティオケの町の人たちにとってはとても気になる存在です。もしかしたら、警察などは、あの十字架で処刑されたイエスの弟子たちなので、何か悪いことをしでかすかもしれないと、いつも見張っていたかもしれませんね。

教会の人たちのことを「キリスト者」と呼んだのは、最初は教会の外の人たちでした。もしかしたら、教会の人たちへの良くない思いから、そのように呼んだのかも知れませんが、「キリスト者」という呼び方には、とても大事なことが示されていたのです。それが、イエスさまのものとされている、イエスさまにつながっているということです。バルナバさんは、アンティオキアに来た頃は、「固い決意をもって主から離れることのないように」(23節)と教会の人たちに勧めました。礼拝式で御言葉に聴き続けること、そして、祈り続け

ることが、主イエスさまから離れないためには大事なことです。そうすることで、イエスさまのものとされていること、イエスさまにつながっていることをはっきりとおぼえることができます。

バルナバさんもサウロさんも、そして、アンティオキア教会の人たちも、イエスさまにつながっていたので、イエスさまから力を与えられて、たくさんの人たちにイエスさまのことを伝えることができました。また、雨が降らず、食べる物ができなくて困っていたユダヤの教会の人たちのことを思いやって、お金とか食べる物などを送ることができました。イエスさまにつながって与えられる愛が、アンティオキア教会の人たちの元気の源だったのです。イエスさまから力を与えられて、すべての人にイエスさまを伝えたのです。

みんなの元気の源もイエスさまです。私たち、ぼくたちは、イエスさまから離れると、何にもできません。イエスさまにつながってこそ、イエスさまのことをお友だちに伝えたり、お友だちを思いやることができるのです。毎週日曜日、こどもの教会(日曜学校)の礼拝式で、聖書の御言葉に聴いて、イエスさまとのきずなをいよいよ太くしましょう。(長谷川潤)

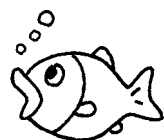
---

[今週の暗唱聖句]

使徒言行録 11章26節

このアンティオキアで、弟子たちが初めて  
キリスト者と呼ばれるようになったのである。

---



〈ねらい〉

世界中の人たちに、  
聖書の御言葉（聖書に書いてあること）  
を伝えるために大切なのは、  
イエス様からはなれないことです。

先生へのひとくちメモ

だからあなた方は行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。（マタイ28:19）

それから、イエスは言われた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」

（マルコ16:15）

〈展開例〉

ぬり絵をしよう！



対話の手掛かりとして……

①「キリスト者」(クリスチャン)とは、どういう人たちのことを指すのでしょうか。思いっただけあげてみてください。例えば、イエス・キリストが私の救い主であることを信じている人たち、毎週教会の礼拝に出席する人たち、など色々あげることができるでしょう。正解は一つだけではありません。ただ「キリスト者」とはどのような人なのかという客観的な事実を述べるだけではなく、それらのことを自分のこととして口にすることができるかどうか大切に思います。つまり、中高生たちが、「わたしはキリスト者です」ということを、喜びと誇りをもって口にすることができるように導いてあげることです(この課に限ったことではありませんが)。

②教会に来ている中高生たちが、普段どういう環境に置かれているかは、それぞれ違うと思います。でも、その多くは、あまりキリスト教とは関係のない場所で生きているのだと思います。そういう中で、自分は日曜日に教会に行っている。私はクリスチャンですと、皆の前で口にすることに、どこかためらいを覚えている中高生たちもきっと多いことでしょう。なぜなら、自分がキリスト者であることを告白することによって、失うものがあるからです(本当の意味の損失ではありませんが)。そうやって、小さい子どもであっても、その子なりに葛藤や重荷を抱えながら生きているのです。その壁とどう向き合い、また乗り越えて行くかが大きな課題となります。そのことは、教会学校の教師たちが少なからず経験してきた道ではないかと思うのです。そのような経験を信仰の先輩たちから聞くことができることは、子どもたちにとってとても大きな恵みだと思います。

③当時のアンテオキアで、「キリスト者」と人々から呼ばれたのは、良い意味でそう言われたのか、わるい意味でそう言われたのか分からないそうです。きっと両方の意味が込められていたのでしょう。そしてなぜ「キリスト者」と呼ばれたのか。その理由について、彼らが、いつもキリストのことを話していたからだと言われます。それは何も御言葉の説教をしただけではないでしょう。普段の会話のなかで、キリストのことが口に出てくるのです。それほどまでに、キリストに捕らえられてしまっていたのです。そこまで自分の生活の中に、イエス・キリストがしみ込んでいるのです。

④植村正久という牧師が、伝道者になりたての時、名古屋の教会である老人のキリスト者に出会ったそうです。その人の口癖は「俺は飯より、キリストが好きだ」という言葉だったそうです。最初は、ご飯とイエス様を比べるなんて失礼な人だと、思ったようですが、植村の心の中にはずっとその老人の言葉が心に残っていました。だから、晩年の説教の中で、植村はこの老人の話をしています。あのときはイエス様に対して失礼なことを言う老人だと思っていたが、今になってみると、あの老人の言うことがよく分かる。私たちも「イエス様が(何よりも)好きだ」と言って、人生を終えることができれば幸いです。

⑤「キリスト者」—それは、「キリストのものとした人たち」と説明されることがあります。

ハイデルベルク信仰問答の問1を思い起こすこともできるでしょう。「私はキリスト者です」と告白して生きる人生は如何に慰め深いものなのでしょう。

---

## 7月27日 会議を通し、聖霊に導かれる教会 聖書黙想

---

テキスト 使徒言行録15章1～21節  
子どもカテキズム 問34,65

---

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

テキストは、使徒たちがエルサレム教会に集まって開いた、言わば世界最初の教会会議の経緯について記された箇所です。ちなみに、この会議は、それ以降の「公会議」のルーツとして考えられています。公会議とは、教会のいのちにかかわる教理他の確定のために世界の指導者たちが集まった会議のことを言います。当然のことですが、私たちの教会も、たとえば、4世紀に開催されたニカイヤやコンスタンティノポリスで行われた会議他の会議決定を継承しています。例えば、381年のコンスタンティノポリスで決定された通称「ニカヤ信条」は、全世界の教会が唯一、承認している「基本信条」です。また、子どもカテキズムのベースにも据えられています。このように、全世界の教会の信仰の一致をつくりだすための会議とその決定の重要性は、はかりしれないほど重大です。

この最初の会議は、使徒言行録において歴史の分岐点をもたらすものとなります。これ以前は、使徒ペトロの活躍が描き出されていました。ところがこの後、彼の姿は消え、代わりにパウロの使徒としての大きな働きが報告されていきます。同時に、「使徒」という言葉も用いられなくなります。使徒たちはなお存命であったのですが、新しい時代がここから始まったことが暗示されます。つまり、この会議は、使徒なき後の教会のあり方に対するモデルともなる出来事と言えます。長老主義教会を標榜する私たちは、教会は役員たちによる会議によって整えられると信じ、それだけにその会議の制度を整えます。したがって教会の会議とこの世の会議との本質的な違いについて未整備であれば、教会は会議によって倒れてしまうことも起こりえます。聖霊なる神は、会議を通して教会に働かれ、導かれることを確信します。しかし、それは、自動的にそうなのではありません。いかなる善き制度を整えることができたとしても、そ

れで教会が正しく形成される保証には、まったくありません。聖霊の支配に明け渡し、御心に従おうと志す会議か、自分の考えにこだわり、自分の価値を少しでも認めさせようとするための会議か、どちらに傾いているのかが常に問われます。このテキストから、教会のあるべき会議の姿、共同体全体で御心に従うあり方を学べるはずですが、

会議の発端は、ファリサイ派から信者になったキリスト者がエルサレムにある教会から異邦人教会にやってきて「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ救われない」(1節)と教えていたことによります。これだけを聞けば、もはやキリスト教ではなくユダヤ教そのもののように思えます。主イエス・キリストを信じ、その恵みによって救われることを否定しているように聞こえるからです。しかし、よく読むと(5節)、彼らの主張は、「確かに、神の恵みによって救われることは正しい。しかし、異邦人は割礼を受けることによって神の恵みをさらに強め、確かなものとすることができるはずである。したがって、割礼を受けるべきことがどれほど大切であるか」というものでした。つまり、神の恵みによって救われることを否定しているわけではないのです。ただ、旧い律法とユダヤの伝統を尊重することも大切であると、そこにもアクセントを置いただけです。しかし、パウロたちは、福音のみ、恵みのみによる救いを貫かなければ、やがて、人間の功績が誇りとされ、福音は形骸化し、教会が実質的に死んでしまうと考えたのです。パウロたちと彼らとの間には、ぬきさしならない意見の対立と論争が起こります。しかも、教会のいのちそのもの、根幹にかかわる議論と対立になりえるのです。こうして、指導者たちは、会議を開催して、解決に乗り出します。

パウロたちは、出席の道すがら異邦人たちが主イエスを信じた事ごとを詳しく伝えます。聴いた

人びとは、「神の恵みの事実」を知って、大いに喜びました。正しい教理には、事実が伴うのです。

こうして会議が始まります。どれほどの時間を掛けたのかわかりません。しかし、熟議されたはずです。ついに、使徒ペトロが「主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じ」だと、発言します。これは、ペトロの使徒的な権威によって、つまり彼個人の確信を問題提起者たちに主張したということではありません。むしろ、会議の結論を基にした言葉、要約としてのニュアンスがあります。加えてパウロたちは、この福音の真理とは、ペトロやパウロのいわば人間的な主張ではなく、神の恵みの事実であることを証言(12節)します。つまり、教理の決定、教会の信仰的決断、会議の議決とは、単に出席者の多数決に基づく決定ではないということをはっきりとします。教会のいのちに関わる事ごとは、教会が熟議を経た後、神の恵みの事実、福音の真理を「追認」させられるということです。

こうして、この会議によって、主イエスの恵み「のみ」による救いという福音的な真理、言わば宗教改革的真理が勝利しました。そして、この決議は、教理条項の確定に留まらず、現実の教会が異邦人教会を「差別」する誘惑を回避させ、克服させることにもなりました。福音を律法で補強しようとする人間的な企ては、教会員お互いを差別し、群れを二分してしまうのです。ヤコブの主張は、ユダヤ人(エルサレム)教会と異邦人諸教会との分裂を回避させるための主張です。現実の教会の痛みや悩みをどのように和らげることができるのかという、使徒的な牧会的な配慮からのものです。しかも単なる人間的な妥協や融和策ではありません。問題提起者たちの悔い改めを促しつつ、同時に、異邦人キリスト者たちにも彼らの「弱さ」を受け入れるようにと、互いを思いやり、愛の絆を結ばせる信仰から出た知恵だと思えます。

こうして、この会議は「満場一致で決定」(25節)することができました。見逃せないのは、問題提起者たちも従ったということ、つまり、自分たちの福音理解を修正することができたという点です。まさに聖霊によって導かれた会議の力をまざ

まざと見る思いが致します。つまり、まことの教会によるまことの会議の特質とは、「聖霊とわたしたち」(28節)による会議であるということにあります。満場一致になったのは、聖霊の導きがあったからです。ここに、教会の会議のモデルとしてのエルサレム会議の意味と重さがあります。「聖霊と私たち」と確信をもって語るができるのは、自分たちの教会は、神の教会であり、頭なるキリストの教会であり、聖霊なる神こそが主となって導いておられるという確信があるからです。そして、その徹底した信仰に基づくとき、議論は、お互いを貶めたり、単なる非難に陥らせることを回避させ、克服させるのです。兄弟への信頼と愛が、議論の前提に置かれているのです。

### 〈子どもたちに対して〉

おそらく、子どもたちは、自分たちの教会が会議によって治められていることを、ほとんど知らないと思います。しかし案外、教師会のような会議の存在は、身近に感じているかもしれません。何よりも、契約の親が教会(会議)に対してどのような思いをもって向き合っているのかは、敏感に察知しているかもしれません。親が、会議によって励まされ、慰められていることが、大切です。教会とその会議が、かえって重荷となっているとき、おそらく、子どもたちは、私たちが説く聖書の教えに説得力を欠くこととなります。教会への帰属意識を阻害することともなります。契約の子たちの教育は、礼拝説教の「言葉」だけではなく、現実の教会の「空気」つまりその交わりによってもなされます。今朝、改めて、子どもの教会の教師会の交わり、教会の交わりが、愛と信頼に満ちたもの、教会を聖霊の宮、神殿として、聖なる教会として信じる信仰を再点検したいと思えます。教会を、この世のいかなる集団、団体、組織とも違う神の家であるという理解を育みたいと思えます。

ここでは、触れませんでした。恵みと信仰「のみ」による救いという福音の教理を語るための実例として極めて有効なテキストです。

(相馬伸郎)

---

## 7月27日 会議を通し、聖霊に導かれる教会 説教展開例

---

テキスト 使徒言行録15章1～21節  
子どもカテキズム 問34,65

---

### 〔単元のねらい〕

私たちの教会は、長老主義教会を標榜しています。会議を重んじる伝統を受け継ぎ、役員会議によってさまざまな事項を処理して前進します。この会議の主は、議員ではなく聖霊なる神でいらっしゃる。つまり会議は、聖霊の支配に服することなしには無意味です。そこに、私たちの実践的課題があります。私たちの各個教会が、聖霊がご支配くださる神の神殿であると信じるのが必須です。また、お互いに信仰の真理の全体についても部分においても、なお十全な理解をなしえていない、欠けた者たちの集いであるという理解が不可欠です。これらの真理は、礼拝説教や分級だけで教えられるものではありません。むしろ、教師たちが率先して、現実の教会をして聖なる教会として信じ、愛し、交わりを積極的につくっていくことが求められます。そのとき、子どもたちの心の中にも、神が、同じ思いを育ててくださると信じます。それだけに、この説教や分級にも心を込めたいと思います。

---

## 神さまに導かれる私たちの教会

---

世界で最初の教会は、エルサレムで生まれました。イエスさまが、天に戻られる前に約束された通り、聖霊なる神さまが、弟子たちが一つ場所に集まってお祈りしていたところに降臨してくださったのです。こうして、神さまの民は、教会として出発することができました。最初の教会は、聖霊の豊かな注ぎを受け、聖霊に励まされて、イエスさまのご復活を証しし、イエスさまの福音を至る所で語り続けました。こうして今や、エルサレムから世界の果てにまで広がっていきました。

しかし、教会は、いつも順調で、問題も悩みもなかったわけではありません。むしろ、巨大な壁にぶつかって、教会として存在するだけでもとても難しかったのです。ユダヤ人からの迫害、ローマ帝国からの迫害、弾圧が何度も繰り返されました。しかしそれでも、教会は、けっしてイエスさまの証しを止めませんでした。止めないから大変な目に遭いました。けれども、止めないからいよいよ神さまに祝福され、教会の数は増え、イエスさまを信じて救われる人も増え続けました。しかも、今では、その数は、ユダヤ人よりはるかに大勢になっていました。

そんなとき、ある大きな問題が教会の内側から起こりました。ユダヤ人のキリスト者の人たちの中で、「異邦人の皆さん、割礼を受けなければ、あなたたちは、救われることはできません」と教える人たちが出てきたのです。確かに、イエスさまが十字架についてご復活される前までのユダヤ人の男の子は、体に割礼を受けました。こうして、神の民に加えられることになっていたのです。しかし、イエスさまは、割礼を洗礼に代えてくださいました。パウロ先生は、「人は、割礼を受けたり、掟を守ることによって救われるのではなく、ただイエスさまを信じるだけで、神さまの恵みだけで救われる」と福音の真理を訴えました。ところが、彼らは、「確かにイエスさまによる洗礼を受けることは必要だけでも、その前に、ちゃんと割礼も受けなければダメだ、割礼を受けたら洗礼の恵みは確かなものとなるのだ」というわけです。そこで、使徒たちがいるエルサレムの教会で会議を開くことにしました。

学校でクラスのみんなと何かをしようとするとき学級会をすることはないでしょうか。人と人が一緒に何かをしようとするとき、話し合いが大

切になります。皆が協力してくれないと、できないからでもあります。何より、自分一人の意見ではなく、皆の意見を聞くとはとんとん、すばらしいアイデアや方法が出てきたりします。話し合い、つまり会議をすることはすばらしいことなのです。

それなら、教会はどうでしょうか。実は、教会こそ、よく会議をします。それなら、教会の話し合いと学校の話し合いは、同じようなことなのでしょう。まったく同じ部分が多くあります。自分の意見を大きな声で言って、それで済ませてはなりません。みんなの意見をできる限りよく聞いて、そしてまとめることが大切です。

けれどもまったく違ったことがあります。何故なら教会は、ただイエスさまを信じる人たちが自分たちの思いで集まっている場所ではないからです。教会とは、天の父なる神さまがイエスさまの十字架とご復活をもとにして、聖霊なる神さまによってこの地上に生みだし、育ててくださっている神の家だからです。だから、教会の話し合いは、神さまが聖書によって明らかにしておられる御心を、時間をかけて正しく聞いて、それを悟って、その御心に従う決断をするための方法でしかありません。もしも、神さまを第一にしないで、自分たちの考えを第一にするような話し合いであれば、たとい多くの人たちが、同じ意見にまとまってもそれに従う必要はありませんし、そうしてはいけません。

そもそも、パウロ先生が教えていた、「イエスさまをただ信じるだけ、神さまの恵みだけで完全に救われる」という福音の真理は、パウロ先生一人や、教会のみなが考え出したり、決めたことではありません。神さまがお定めくださり、聖書において明らかに示してくださった真理なのです。ただし教会の中で、ある人には、はっきり分かっていたのですが、そうでない人たち、もやがかかっていたような人たちも少なくなかったです。そして今、違う教えを語り出した人たちが起

こりました。確かにそれは、教会にとって、どんな迫害よりも、危険な誘惑であり試練でした。けれども、そのおかげで、時間はかかりましたが、教会の人たちは、はっきりと福音の真理を見つめられるようになったのです。神さまは、そのようにして神さまの教会を、忍耐深く育ててくださるのです。

このエルサレムの会議で、そのように話し合いを重ねた結果、間違ったことを言っていた人たちも、自分たちの言っていたことを、取り下げました。こうして、「満場一致」に導かれたのです。神さまの教会は、自分たちの知恵や能力で上手に「運営」することはできません。してはなりません。あれから2000年、科学技術が進歩して昔の人たちが想像もできないような、さまざまな難しい問題が教会の外にも内にも起こっています。教会は、そのような問題に対しても、神さまの御心をはっきりと伝えなければなりません。大切なことは、自分の考えが正しいとこだわる誘惑に打ち勝つことです。もし、自分の意見が正しくないなら、いつでも神さまのために喜んで変えようとする思いを持つことです。そのために、間話や考えをよく聞いて、分かり合えなければ何度でも話し合うとき、聖霊は豊かに、確実に導いてくださいます。何よりも、教会にとって大切なのは、神さまの御言葉を正しく、しっかりと聴くことです。そして、よく考え、お祈りすることです。教会の間や先輩の意見をよく聞くことです。

今、僕たち私たちの教会も、長老さんや牧師先生たちがいろいろな会議をしながら、神さまの御心を求め、みんなの知恵を集めて、神さまの導きに従って歩んでいます。先生たちは、皆さんに期待しています。楽しみにしています。大人になったら、僕たち私たちの教会を、ますます、イエスさまを信じて救われた喜びに溢れ、その喜びを人びとに一生懸命伝えるすばらしい教会、イエスさまの愛と平和と感謝があふれる明るい教会になるために、活躍してください。（相馬伸郎）

---

[今週の暗唱聖句]

使徒言行録15章26節

「わたしたちは満場一致で決定しました。」

---

〈ねらい〉

教会では、大切なことを会議（話し合い）  
で決めていきます。  
そこには必ず聖霊なる神様が一緒にいて  
助けてくださいます。

先生へのひとくちメモ

～炎は、神様からの力を表しています～  
炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人  
の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、  
“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉  
で話した。 (使徒2:3～4)

〈展開例〉

ぬり絵をしよう。





対話の手掛かりとして……

- ①中高生たちは（子どもたちは）、まだ教会の会議に参加する年齢ではないでしょう。だとしたら、彼らはここから何も学び得ないのでしょうか。昔、エルサレムの教会でこういうことがあったらしいということを知るだけではたいへんもったいない気がします。
- ②キリスト教会は長い歴史の中で、いくつも大きな会議を開いてきました。それらの会議の中で、聖書が私たちに何を教えているのか、その真理を求め続けてきたのです。今では私たちが知っている自明のことであっても（三位一体やキリストの二性一人格など）、当時は教会が立つか倒れるかの大きな問題だったのです。そういう大きな壁をキリスト教会は次々と乗り越えて、今のキリスト教会があることを覚えてほしいのです。
- ③また、「救済史」という言葉にも表れているように、神様は「歴史」というのを大事にされる方です。人間が墮落して、突然、キリストがこの世に来られたわけではありませんでした。神様は全能のお方ですから、歴史や時間を無視して、私たちの心を無理矢理、ご自分の方に向けさせて、強制的に従わすこともできたでしょう。でも神様はそのようにはなさいませんでした。救いのご計画に基づいて一步一步、その計画を進めて行かれたのです。それは、神様が私たち人間と一緒に歩むことを大切にしておられるからです。その中で、私たち人間が心から喜んで神様に従っていくことができるためです。
- ④今、私たちは「聖霊の時代」を生きています。地上に立てられたキリストの体である「教会」を通して、そこに連なるキリスト者一人一人を

用いて救いの完成へと導いておられるのです。それまでの間、この世界において、様々な出来事が起こります。また、「激しい意見の対立と論争が生じた」（2節）とあるように、教会においても対立することさえあるのです。もちろん、それは人間が罪深い存在だからということもあるでしょう。罪の故に、離ればなれにならざるを得ないこともあるのです。でも神様はそのような人間的な弱さがあることを知ったうえで、地上にキリストの教会を立て、私たちを用いて救いの御業を前進させようとしておられるのです。

- ⑤だから、私たちは常に神様の前に謙遜でなければいけません。キリスト者は聖霊でないのです。だから神様のことがすべて分かるわけではありません。でも分からない中で、神様に祈り求め、神様から知恵と力をいただいて、歩んで行くのです。神様の目からすれば、「それは間違っているよ」と言われることであるかもしれません。でも、そうやって失敗することを、神様はご存知なのです。それでもいいから、「わたしを求めなさい」とおっしゃってくださるのだと思います。「神様、私たちは聖霊の働きを祈りもどめて聖書に耳を傾けました。そして、こういうことを、あなたからのメッセージとして受け取りました。感謝してその道を進んで行こうと思います。もし御心でなかったならば、すぐに教えてください」。そのよう御霊の助けを祈り求めながら、私たちができることを精一杯やっていけばよいのです。聖霊が私たちに示されることは、他のキリスト者や他の教派の人たちと全く同じということではありません。聖霊の働きはそれほど豊かなのです。だから、あなたは私と信仰が違うと単純に裁くことはよくありません。同じ主にあって、よい対話ができるように、祈り求めていきましょう。

テキスト 使徒言行録 16章6～15節  
子どもカテキズム 問76, 13

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

使徒パウロとバルナバたちは、エルサレム会議において、自分たちの信仰の確信が全教會的に受け入れられるという決議に導かれました。いわば、反対者に勝利したわけです。その意味で、どれほど主にある喜びに溢れ、また興奮した思いすら抱いたことは想像に難くないと思います。パウロは、人は信仰によってのみ救われ、主にあって、ユダヤ人もギリシア人との差別はまったく取り払われていることをいよいよ力強く説教したと思います。

ところが、この喜びは、長く続きませんでした。彼は、なくてはならない同労者、戦友であるバルナバに、第一回の伝道旅行で実った諸教會を再訪し、さらに丁寧に教育と牧会をなし、伝道を拡大しようと提案します。ところが、二人の間に「マルコ」を連れて行くか行かないかという問題をめぐって、激しい衝突が起こったのです。こうして、二人は、「別行動」を取ることでとなります。どちらの判断が、正しかったのかについて、ルカは、ここでは何も記しません。

ちなみに、聖書によれば（コリント一9:6、コロサイ4:10）パウロとバルナバとの友情は、破綻しませんでした。何より厳しく拒否した「マルコ」のことは、後に、「わたしにとって慰めとなった人々」（コロサイ4:11）と言い、また、「彼はわたしの務めをよく助けてくれる」（テモテ二4:11）と、高く評価しています。

つまり、パウロの判断の方がふさわしかったという印象を持たざるを得ないように思います。一方で、バルナバの判断も、完全に間違っていたとは言えないと思います。いずれにしろ、ここで本質的なことは、この両者の厳しい意見の相違は、自分の正しさに「こだわった」ものではないということです。つまり、二人とも神の御名と栄光を求めての意見であったのです。だからこそ、神がそれぞれを用い続け、遂には、その交わりが失わ

れず、後に、それ以上に深い交わりが結ばれていったのです。神の真理を求めての意見の違いは、教會において当然、起こります。キリスト者どうしの意見の不一致の原因は、数え上げればきりが無いと思います。そもそも人間が知るところは一部分であり、問題に対するお互いの視点が異なっていることが多いからです。しかし、問われるべきは、神への愛と仲間への愛に基づいているのかという一点です。キリストの主権と言いながら、しばしば自分のメンツや考え、やり方を絶対視することが起こります。それこそが、まさに、神に退けられなければならないものです。

パウロは、厳しい思いの中でシラスと共に伝道旅行に出発します。そして、そこでテモテというかけがえのない同労者に出会うのです。その交わりによって数々の手紙が生まれていきます。このチームによる伝道によって「教會は信仰を強められ、日ごとに人数が増えていった」（5節）のです。確かに、パウロとバルナバとの対立は、悲しむべきものです。しかし、なお、神の赦しの中で神の御業が進みます。そこに、私どもへの慰めがあります。

以上がこのテキストが置かれた文脈です。紆余曲折の歩みではありますが、神の大きな祝福の内に歩んだことは明らかです。しかしなお、伝道は平坦な歩みであることを許されません。「アジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられ」（6節）てしまうのです。もとより、神は、いつでもどこでも神の民が御言葉を語ることへと召しておられます。使徒パウロは、その御心を確信しています。だからこそ伝道のために常に熱い思いを抱いて旅を続けているのです。それだけに今ここで、神ご自身が御言葉を語ることを禁じるとは、特別の試練となりえます。しかし、パウロたちは、なお諦めずに進んでいきます。ところが、「ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許

さなかつた」(7節)のです。いったい神の御心は、言わば自己矛盾するようなものなのでしょう。違います。むしろ神の御心は、人間の思うところを越えて、先を見越し、全体をご支配くださるゆえに、人間の計画とは、しばしば異なることがあるのです。確かに、教会が、伝道計画、事業計画を整えるのは、およそ使命に生きる共同体(集い)である限り必須のことと言わなければなりません。しかし、その計画は、神ご自身がその通りに行かせないことをもって、すべての教会の事業が、神の御業によるものであることを私どもに明らかにしてくださることも少なくありません。

それなら、そのとき、彼らは何を考えていたのでしょうか。おそらくパウロたちでさえ、その当座は、落ち込んだかもしれません。「いったい、自分たちの何が悪かったのか。自分たちの中で罪を犯した者がいて、神が御言葉の宣教を許されないのか……」。一瞬、そのような思いがよぎったかもしれません。しかし、この箇所を読むとき、禁じられた、とどめられたことを受け入れる信仰の姿勢を読みとることができると思います。クヨクヨしない信仰のしぶとさです。それは、神の御心は福音伝道である、との微動だにしない確信に生きていたからだだと思います。そして何より、神は、このような不思議な業を通して、彼らに、マケドニア伝道への神の導きへの確信、その召命を劇的なまでに強めてくださったのです。福音が、いよいよヨーロッパ大陸へと渡っていくために、神の祝福と励ましとなったのです。

伝道に行き詰まってしまう夜。誰でも、寝ているときには夢を見ますが、パウロは、「私たちを助けてください」とマケドニア人が立って懇願してくる夢を見ます。彼にとって、「助けて!」とは、「救ってください!」という意味に解釈され、聴こえました。つまり、「御言葉を語ってください!」という懇願です。この召命への確信は、まさに「禁じられ、許されない」という直前の神のいわばマイナスの導きが効いているのです。しかし実は、マイナスではなく、言わばジャンプさせるためのホップ、ステップの役割だったのです。弓を限界まで引く力とされたのです。しかし、そのような

信仰的解釈、召しへの確信を可能とさせたのは、彼らが、寝ても覚めても伝道のビジョンに燃えていたからに他なりません。つまり、日頃の霊的な養い、聖霊に満たされた歩み、言いかえれば、「恵みの手段」を熱心に用いる信仰生活なしに、突然、召命の確信に導かれるわけではないのです。

これらが主の導きであることは、リディアという婦人の救いによって明らかにされます。神の召命は、その実りによって証明されるわけです。

### 〈子どもたちに対して〉

聖書には、生ける神がいらっしゃること、その御心もはっきりと証しされています。それなら、何故、伝道は困難を極めるのでしょうか。何故、キリスト者の人生が平たんなものとはならず、むしろ苦しみや悲しみを味わわなければならないことが多いのでしょうか。これは、信仰者の嘆きです。子どもたちもすでに、お祈りをお願いしたことが、かなわないという厳しい現実を知っていると思います。この課題について、きちんと向き合うことは、子どもたちにも大切です。

このテキストでこそ、祈りの恵みについて学べます。祈りこそ、起こってくる出来事を信仰的に解釈する道、神の恵みの摂理を信じる信仰を養う方法です。生きた信仰は、神との真剣な日々の対話、つまり、交わりなしに起こりません。私たちの信仰が、単なる思想や哲学のようなものでは、理解できないような困難に出会ったとき、信仰の破船にあい、行き詰まってしまうでしょう。しかし、生ける神との交わりの最大の恵みの手段である祈禱(主日礼拝)によって、最善の信仰的解釈へと導かれていきます。こうして、主のご愛に対する深い信頼とそれに基づくたたかな信仰が養われます。確かに、祈りにおける願いがかなわないことは、少なくありません。しかし、この物語を通し、信じる者には、たとい、目の前のことが上手く、思ったように進まなくても、神がご自身の大きな伝道のご計画を進めてくださることを学べます。その人自身をも祝福するご計画を成就してくださることを、子どもたちとじっくり向き合って、論し、励ましたいと思います。

(相馬伸郎)

---

## 8月3日 マケドニア人の幻の信仰的解釈 説教展開例

---

テキスト 使徒言行録 16章6～15節  
子どもカテキズム 問76,13

---

### 〔単元のねらい〕

信仰生活とは、主の御心に従う生活です。その御心は、聖書において明示されています。ただし、聖書には、今ここに生きる私自身や諸教会についての具体的な御心、ご計画については、全く記されていません。それゆえ、キリスト者は、日々、聖書を読んで、顕示された御心を知り、具体的な状況にふさわしく適用する能力、つまり信仰的判断・解釈を磨き続けることが求められています。そのためには、恵みの外的手段を熱心に用いて、内的手段である信仰を深めることが不可欠です。神は、しばしば、私たちの信仰に基づく願いや計画を否定する形で御業を進められます。しかし、それは、信じる者と共に働く神の摂理の御業の中で、さらに大きな祝福へと逆転させるための御業となります。したがって、神は、神の民に、摂理に対する正しい信仰的解釈とそれにもとづく実践を求めておられます。パウロが夜に見たマケドニア人が叫ぶ幻を、単なる夢で終わらせず、神の声として解釈して従ったこの実例は、御言葉の直接的な啓示のない時代に生きる私たちへの特別な励まし、また模範です。

---

## 祈っている人は、行き詰まらない

---

皆さんは、毎日、お祈りしていますか。お祈りすることほど、信仰生活に大切なものはありません。お祈りは、神さまに向かってお話しすることです。神さまとの対話です。話し合うとき、大切なことがあります。先ず相手の言葉をしっかりと聴くことです。自分の気持ちだけを話して、「さようなら」と言ったら対話になりません。お祈りは、まず、神さまの御言葉を聴くことから始まります。神さまを信じるということは、お祈りすることだと言いきっても良いのです。誰かが、どんなに神さまを信じていると言っても、もしお祈りしていないのであれば、それは、生きておられるまことの神さまを信じていることにはなりません。今朝、僕たち私たちは、皆で、礼拝堂に集まって、心をつつにして神さまに祈ります。それを、主日礼拝式と言います。子どもの教会の礼拝式は、皆で捧げる「大きなお祈り」と言えます。今朝、どうしてお祈りすることが大切なのか、パウロ先生が見た夢のお話を通して学びましょう。

パウロ先生の伝道チームは、いくつもの困難を乗り越えて、神さまの福音を宣べ伝えました。そ

の結果、毎日、イエスさまを信じて救われる人たちが増え、各地に教会ができていきました。考えてみれば、当たり前のことです。神さまの御心は、一人でも多くの人たちがイエスさまを信じて救われて、神さまの子どもとなって、教会を通して神さまの国が広がっていくことにあるからです。神さまは、僕たち私たちの味方となってくださっています。だったら、僕たち私たちが神さまのために捧げるどんな小さな働き、奉仕をも喜んで受け入れて、神さまの御心が進むために用いてくださるのは、当然のことです。

ところが実際には、伝道は、いつも上手くいくとは限りません。むしろ、パウロ先生たちも何度も苦しい目にあったのです。実はこのときもそうでした。パウロ先生たちは、今度は、アジア州の町々で伝道しようとしていました。そこには、特に、信仰によってのみ救われるという教会の教えをはっきりと告げたい教会（ガラテヤ）があったからだと思います。ところが、何の理由かは具体的には書いていませんが、できませんでした。それなら、ということで次にビティニア州に入って伝道しようとしていました。ところがそれも、でき

ませんでした。聖書は、その理由を、ただこのように書いています。「聖霊から禁じられたので・イエスの霊がゆるさなかったの」というのです。つまり、神さまご自身が道を閉ざしてしまわれたのです。何だか、おかしいと思いませんか。神さまは、パウロ先生たちの味方のはずです。パウロ先生たちは、神さまの御言葉のために一生懸命、苦勞をしているわけです。いったい神さまは、どちらの味方なのか。神さまがご自分でご自分の邪魔をするなんておかしいと思ってしまう。

パウロ先生やこの手紙を書いたルカさんも、おそらくがっかりしたと思います。へとへとに疲れてもう歩けないと思ったかもしれません。何より、心も挫けそうになってしまったかもしれません。しかし、どうすることもできません。ほんとうに仕方なくトロアスという海の見える町に行きました。パウロ先生は、海の向こうは、今でいうヨーロッパ大陸であって、そこにマケドニアの人が住んでいることを知っていました。

さて、朝になって忘れることがほとんどかもしませんが、人は誰でも寝ているとき夢を見ますね。その夜、パウロ先生は夢を見ました。マケドニア人が立って、「こっちに渡って来てください。わたしたちを助けてください！」と叫んでいる夢です。

起きてすぐ、パウロ先生は仲間たちに、見た夢を告げました。すると、皆が、こう言うのです。「ああ、そうだったのだ。神さまは海の向こうにあるマケドニアに渡らせるために、道をふさがれたのだ。だったら、すぐに、海を渡ってイエスさまの福音を告げに行こう」こうして、皆が、神さまの御心、神さまの召しを確信しました。

皆さんだったら、パウロ先生の見た夢を、どのように理解しますか。会ったこともない人たちが、「この海を渡って、わたしたちを助けてください」と言うのです。確かに、助けを求めているのですが、何の助けを求めているのかは分かりません。

しかし、パウロ先生たちは、「救援物資を届けに行こう」とか、「災害で、住む場所や着るものも失って傷ついている人たちを助けるために、お医者さんのルカに行ってもらおう」というのではなく、ただちに、神さまの御言葉、福音を届けに行かなければならないと考えたのです。どうして、そのように判断したのでしょうか。それは、パウロ先生たちは、福音こそ、人間が生きていくためにどうしても必要な知らせであって、イエスさま以外に救いはないこと、皆にイエスさまを信じて救われてほしいと毎日、考えていたからです。毎日、神さまに、伝道ができるようにと祈っていたからです。お祈りしている人には、神さまのご計画が分かり、自分が今、何をすべきかがわかってくるのです。

パウロたちは、すぐに、船に乗ってフィリビという町に渡りました。待っていましたとばかりに、リディアという女性が洗礼を受けました。神さまの御心は、この町に先に行くことだったのです。

皆さんは、将来、何になりたいですか。今、何をすると神さまに喜ばれるのかとお祈りしたことがありますか。とても大切で、素晴らしいことです。ただ、お祈りしていても、上手くいかないこと、計画通りにいかないことが起こります。たくさん起こります。けれども、パウロ先生のときと同じように、もしそのとき、「ぼくは、神さまのためにこうしたい、神さまに喜ばれるためにこのようになりたい」と思って、お祈りする人には、神さまは必ず、道を聞いてくださいます。何故なら、神さまは、僕たち私たちの味方だからです。神さまのご計画は、必ず、進んでいくからです。そのために今、お祈りすることが大切です。神さまの御心を知るためです。だったら、家でも御言葉を読みましょう。教会に来て、お話を聞いて礼拝しましょう。それを続けていく人は、必ず、パウロ先生のように確信をもって生きていけるようになります。神さまに喜ばれ、お役に立てる人になります。(相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 二 4章8,9節

わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、  
虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。

---

〈ねらい〉

先生へのひとくちメモ

今、何をすると神さまがおよろこびになるか、  
お祈りしましょう。

お祈りは神さまとのお話することです。

すぐには上手いかななくてもあきらめず、お祈り  
を続けましょう。



対話の手掛かりとして……。

- ①「聖霊から禁じられた」(6節)、「イエスの霊がそれを許さなかった」(7節)という言葉が出てきます。決して、パウロたちは神様を悲しませるようなことを企てたわけではありませんでした。むしろ神様がお喜びになる道を求め、その道を進もうとしたのです。でも、神様はパウロたちの伝道計画をお許しにならなかったのです。私たちも、パウロたちと同じような経験したことがあるかもしれません。あるいはこれから経験するかもしれません。神様は必ずしも私たちの思いや計画をすべて受け入れてくれるわけではないということなのです。拒まれることがあるということなのです。たとえそれらが、神様の御心に適ったものであったとしても。そのとき、皆さんならどうするでしょうか。どうしても戸惑ってしまうのではないのでしょうか。自分たちの好き勝手な思いではなく、ちゃんと御心を祈り求めて歩んできたのに、どうして神様は、それはダメだとおっしゃるのだろうか。これまで神様のためにと思って生きてきた人生は無駄だったのかと、氣力を失ってしまうかもしれません。もちろん、私たちは神様のことをすべて知っているわけではありませんから、これこそが御心だと思い込んでしまい、間違っただ道に進んでしまうということも起こり得ます。でも、単純に、神様が禁じられること全てが、イコール、私たちの罪とは限りません。「主のために」と願って計画する私たちの思いが全て御心から外れたものではないのです。むしろ、神様は、主のために願って生きる私たちのことを心から喜んでいてくださるのです。
- ②だから、自分の願いや計画が思い通りに行かない時は、一度、立ち止まってみるのが大切だと思います。そうしないと、私たちは、神様の

本当の思いを知ることができないからです。

では、立ち止まるとは、具体的にどういうことなのでしょう。一つは、祈りつつ、御言葉に聞くことです。御言葉にもう一度聞き直すことによって、神様さまから新しく教えていただく恵みを知ることができるでしょう。また、牧師や教会学校の先生たち、あるいは同世代の教会の仲間たちとの語りを通して、教えられることもきっとたくさんあるはずです。伝道者パウロも、一人で伝道をしたわけではありません。信頼する同労者、教会の仲間の支えがあったのです。

- ③パウロは夢の中で見た幻を見ました。そこで、「わたしたちを助けてください」(9節)というマケドニア人の声を聞いたのです。この幻を見せてくださったのは神様でした。神様はマケドニアに行くようにただ命じられたのではありませんでした。「助けてください」というマケドニア人の心の叫びを通して御心を示されたのです。この叫びを、パウロはしっかりと聞き取りました。私たちも、まだ神様のことを知らない人たちの声に耳を傾けることができる者でありたいと願います。そのような人々の心の叫びの中に、実は、神様の御心があらわれているということがあるのではないのでしょうか。
- ④神様は、祈り求めれば必ずしもすぐに御心を示してくれるわけではありません。後になってから、気付かされ感謝することが多くあります。それまでの間、自分としては不本意だと思いながらしばらく歩まなければいけないこともあるでしょう。しかし、その時も神様は、あなたと共に歩んでくださっているのです。そして、自分は主が示されたこの道を歩むことができ本当によかったと思える日が来るのです。

テキスト イザヤ書 2章1～5節  
 参照教理問答 子どものための平和カテキズム ※第50号8月11日の黙想参照  
 『世界は神のもの～今日における信仰の証言』(CRCNA, 2008), 52～54

『世界は神のもの～今日における信仰の証言』54

「平和の君」に従う者は、平和を造り出す者へと召されている。

調和と秩序を推進し、壊れた関係を修復する者へ。

私たちは自国の政府に訴えかける。平和のために勞し、

公正な関係を回復するようにと。

私たちはこの世界と生活の場における武器の拡散を非難する。

それらがもたらす危険と恐怖の故に。

私たちは世界の諸国に呼びかける。諸国の武器保有を、

正義と自由の保持に必要な最小限度に削減すべきことを。

私たちは誓う。平和の道を歩みつつ告白することを。

私たちの世界が神のものであり、

神こそが私たちの確かな守り手である、と。

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

南ユダ王国で、イザヤが主から預言者として召されたのは、「ウジヤ王が死んだ年のこと」(6:1)である。紀元前739年と推定されるその年には、既にアッシリア帝国が、その巨大な力を方々に振るっていた。新共同訳聖書の巻末地図「1 聖書の古代世界」を見ると、イスラエルからはるか北方の、チグリス川上流に、アッシリアが位置していることがわかる。

イザヤの時代のアッシリアは、強力な軍勢力を組織して、その勢力範囲を広げ、屈服する諸国には貢ぎ物を要求し(例えば北イスラエルの場合、列王記下15:19, 20)、抵抗する諸国は滅ぼし占領した(10:5～11)。

エジプトに至るまでその支配力を及ぼしていたアッシリアに対抗するには、小国は手を組むしかない。しかしアッシリアに対抗する同盟が作られると、その同盟に加わってアッシリアに盾突くか、それとも加わることを拒否して同盟諸国から攻撃を受けるかの選択を迫られる。

主はイザヤを通して、「落ち着いて静かにしていなさい。恐れることはない」(7:4)と語りかけ

たが、南ユダの王アハズは、主の言葉を退けて、アッシリアに助けを求める道を選んだ(列王記下16:7)。同盟諸国のひとつであった北イスラエルは、この後、紀元前722年にアッシリアによって滅ぼされることになる。

アッシリア帝国が、その強大な軍力と、略奪した財産によって蓄えた経済力は、その勢力範囲内を一変させた。力によって支配された世界は、古代の「ローマの平和」になぞらえられて「アッシリアの平和」と呼ばれる。

このような時代に生きた、主の預言者イザヤは、「アッシリアの平和」の偽りを指摘し、主のもたらされる平和を宣言した。それが与えられている御言葉、イザヤ書2章1～5節である。

まことの平和は、アッシリア帝国全体から見れば、ちっぽけな共同体から始まる。それは、主が呼び集められる礼拝共同体である。主の民は、主の教えを聞き、そして御言葉に生き、やがて御言葉を語る。主の教え、御言葉とは、ご自身の元に立ち帰るようにとの主の招きであり、究極的にはやがて来たりたもうイエス・キリストによって成し遂げられた主による和解の福音である。



その和解の福音は、神に背き、神に戦いを挑んでいた者たちに、神の赦しを告げ知らせるので、赦しを知った者たちは、戦うために身を固めていた武器を捨て始める。もはや自らの力を大きくすることも、自分を守ることも、神に対して必要がなくなったことを知るからである。

神に戦いを挑む。これこそが、人が人に戦いを挑む原点である。それで、神との和解を味わった者たちは、人に対して戦いを挑むことの愚かさをも知らされて、力による対抗を止める。「もはや戦うことを学ばない」という方向転換が起こる。

主の平和は、単に武器を捨てさせ、戦いを止めさせるだけではなく、積極的に共同体を維持させる強い方向性も持っている。

鋤や鎌は、農作業の道具である。それは共同体の生活を共に汗を流しながら維持し、また収穫物を分かち合う、具体的に築き上げる平和の象徴である。

#### 〈CRCNAの『世界は神のもの』54について〉

北米キリスト改革派教会は、1986年に『世界は神のもの～今日における信仰の証言』を信条とは別の、改革派信仰の現代的告白として採択し、更に2008年に改訂した（『現代世界における改革派信仰告白』2010、憲法第一分科会）。

「来たるべき神の国の完成という視座で記された『証言』は、この被造世界が神のものであるというテーゼを繰り返しながら、世界の創造・墮落・救済・完成という聖書の物語に沿ってそれぞれの今日的意義が述べられる。詩文調で記された本『証言』は、主として礼拝・教育・伝道用に用いられてきた」（同書、p.76）。

ここで前ページに引用した『証言』54は、「神の民のミッション」という文脈の最後に置かれており、現代に生きる私たち日本のキリスト者にとっても、自らの使命を確認するために示唆に富む。『『平和の君』に従う者は、平和を創り出す者へと召されている。調和と秩序を推進し、壊れた関係を修復する者へ」という初めの文言が、イザヤ書の「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」という御言葉と響き合っている。

そして、平和を創り出し、壊れた関係を修復するという課題は、極めて具体的である。それは、

平和のために労し、公正な関係を回復するようにと、自国の政府に訴えかけることなのである。

これを、私たちの言葉で言い換えればどうなるだろう。例えば（教会の罪を見つめつつ）、東アジアにおける緊張を緩和するために戦争責任を正しく見つめるように、閣僚によるヤスクニ参拝を止めるように、と日本政府に訴えかけることだろう。

例えば（教会の罪を認めつつ）、再び日本を戦争のできる国にするためのあらゆる手立て（改憲、解釈改憲〔特に集団的自衛権〕、秘密保護法の制定など）を止めるように、日本政府に訴えかけることだろう（本稿の執筆は2013年11月である）。

その際、神の民は、繰り返して過去の罪を振り返り、どのようにしてその罪を示され、そこから救われたのかを語り続ける存在なのだという事実を確認することが、最も重要である（詩106）。

私たちは、罪を知り、悔い改めて、新しい歩みを決意し続けるので、『『平和の君』に従う者』と呼ばれる。それで、「平和を造り出す」にあたっては、まず自らの過去の罪を告白し、今も自国の政府のための執り成しの祈りが少ないことを悔い改め、共に生きる道（共同体を維持させる方向性を持つ道）を積極的に指し示そうとする。

その時、教会の発する言葉は、神の正義から自国の政府の過ちを裁くような言葉から、あるいは弱い者に寄り添おうとしてそのこと自体を誇る言葉からも解放されるだろう。

神の民として、繰り返して教会の過ちを告白し、共に生きる道を模索し続ける勇気を持ちたい。

#### 〈子どもたちに対して〉

8・15を前にすると、子どもたちの周りに飛び交うのは、学校でもマスメディアでも、戦争体験の悲惨さを語る言葉である。同時に、子どもたちは、今やインターネット空間で、戦争責任を認める立場を否定する言葉にもさらされている。

教会は、前者の言葉のみを語らず、後者の言葉を批判して終わらない。教会は子どもたちに、戦争中に教会自身が犯した過ちについて、そして今も犯し続けている教会の不作為について、それにもかかわらず和解に与っている者の積極的な責任について、率直に語るのである。（安田直人）

**(単元のねらい)**

神さまは、預言者イザヤをとおして、力による「アッシリアの平和」ではなく、神さまと罪人の間に打ち立てられる、イエスさまによる平和こそが、私たちの生きる世界の平和をも造り出すのだと宣言されました。イエスさまによる平和とは、何よりも、十字架にご自分の命を捨てられ、復活の命を私たちに注がれた、命の分かち合いです。そのようにして「神さまの子ども」とされた私たちは、奪い合う戦い、力による支配を捨てて、共に汗を流して働き、命を分かち合うことで、平和を造り出していきます。「神さまの子どもたち」による、平和を造り出す共同作業の合い言葉は、「光の中を歩もう」です。

**光の中を歩もう**

「いつまで日本はあやまり続けたら良いのですか」と一人の年をとった男の人が聞きました。昨年のことですが、戦争のことを考える、クリスチャンの集まりが開かれたときのことです。

先生は、答えました。「私は日本ではないのかわかりませんが、教会としてなら答えられます。私たちの教会が、戦争中にしたことは神さまの前に恥ずかしいことでした。いつまでも神さまにあやまり、人びとにもあやまったら良いのではないのでしょうか。

さて、イザヤが生きていたのは、激しい戦争が各地で起こっていたときでした。アッシリアという国が、強い軍隊を持ち、近くの国を滅ぼし始めたのです。そこに住む人々を連れ去り、財産を奪い取ります。これはかなわないと思って降参した国には、たくさんのお金を納めさせました。

アッシリアは、お金持ちになり、軍隊の力も強くなって、どんどん大きくなっていきました。やがて神さまの民、北イスラエルも滅ぼされてしまい、南ユダも膝をかがめました。

不思議なことです。戦争が繰り返されたのに、やがて、道が造られ、国々をまたぐ商売が始まって、一見すると平和がもたらされたように思えます。「アッシリアの平和」と呼ばれるほどでした。しかし、それは本当の平和でしょうか？

アッシリアが征服した国々は、高い高い山があ

ります。また神々を拝む大きな大きな神殿があります。イザヤが神さまの御言葉を語るために働いた南ユダは、大きくふくらんだアッシリアの国の中では、ちっぽけな小石ほどの大きさに過ぎません。まして、エルサレム神殿などは、小さな小さな豆粒のようなものです。

けれども、神さまから教えられたイザヤは、「終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる」って言ったのです。どんなに高くそびえる山よりも、ちっぽけでも神さまを礼拝する場所こそが、山々の頭と呼ばれる。

それは、アッシリアの力よりも、今の世界のどんな力よりも、私たちが礼拝している神さまの力の方が強いという宣言です。

どうしてでしょうか。「アッシリアの平和」は本当の平和ではありません。まるで戦いが終わって、「平和」のように見えるのですが、強い人が、弱い人を力づくで支配しているだけです。たくさんのお金が儲けられているのですが、お金が儲かる人ははいよいよ儲かり、お金のない人はすっからかんになっていくのです。

けれども、私たちが礼拝している神さまが与えてくださる平和は、まったく違うものです。神さまの平和のことは、イエスさまのことを考えると良くわかります。イエスさまがなさった一番大きな働きは、私たちと神さまとの間の仲直りの実現

です。

自分たちを神であるかのように思い上がっていた私たちです。正しい神さまから見たら、罰せられても仕方のない私たちです。ところが、イエスさまが、その罰を全部、ご自分の身に引き受けて、十字架に死んでくださいました。

愛に満ちた神さまから見たら、神さまの方に向き直らず、お友だちともケンカしてばかりの、本当に恥ずかしい私たちです。ところが、イエスさまは、神さまを愛し、私たちのことを友として歩んでくださいました。イエスさまは、そういうお方だったので、死んだ後、復活させられたのです。神さまの子どもとしての命に。

イエスさまを信じると、罰は十字架で帳消しにされます。イエスさまのお命をいただいて、神さまを愛し、お友だちを愛する、神さまの子どもになります。そして、神さまの腕に抱きしめられていることを知るので。仲直りです。

イエスさまが実現してくださった、私たちと神さまとの間の仲直りは、本当に大きな出来事です。その仲直りの喜びを知ると、今まで、自分が神さまになろうとしたり、神さまに背いていたことが、おろかなことだったことが良くわかります。

そして、この仲直りが、あのお友だちとも必要なんじゃないか、と考え始めるのです。ケンカの仲直りどころではありません。どうしても、あのお友だちに真剣に生きてもらうために、僕が嫌われてでも何をしたらいいだろうか。私自身が、もっと真剣にあのお友だちの前に立つために、何を捨てたら良いだろうか。

そのようにして、「剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」生活、「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」生活が始まります。

剣も槍も、人をやっつけ、殺すための道具です。でも、鋤や鎌は、人と一緒に生きるために、畑を耕し、できた作物を収穫するための道具です。まったく正反対の道具なのです。

そして、一緒に生きるために、畑の土地を耕すには、時間がかかり流す汗も必要です。人の働

きぶりと比べない忍耐も必要です。

作物を収穫するためには、雨水や太陽の光が、鋤で耕し、種を蒔いた畑に降り注がなければなりません。神さまへの信頼が必要です。

そしていよいよ収穫となったら、畑を持たない人のために、全部を収穫してしまわない広い心が必要です。収穫を分け合って食べることを喜ぶ大きな心が必要です。

イエスさまは、主の平和を実現されるために、ひたすらに私たちに忍耐し、そして神さまを信頼し抜かれ、またご自分のお命すら惜しまない大きな心で、歩まれました。イエスさまを信じて、神さまの子どもとなった私たちには、このイエスさまのお命が、始まっているのです。

ですから、私たちは、強い人が弱い人を支配するような出来事を見たら、声に出すことにしましょう。いくら世界中で、国をまたいで、たくさんの商売が行われていても、お金が儲かる人はいよいよ儲かり、お金のない人はすっからかんになっていく様子を見たら、声に出すことにしましょう。

アッシリアの軍隊が、あちらこちらの国を征服したとき、そこではたくさんの血が流されました。たくさんの人が、住む場所を追われました。そんな戦争を見たら、戦争が始まりそうになったら、戦争の準備をしている人をみつけたら、声を出すことにしましょう。

「光の中を歩もう！ そんなのは本当の平和じゃない。平和は、汗を流して人のために働き、命を分け合うことだ。イエスさまはそうしてくださいました！」

先生は、最初にお話した、男の人に話を続けました。「昔の戦争で、教会は声をあげられませんでした。それどころか、戦争を推し進めてしまい、朝鮮半島の教会に、神社参拝をしても偶像崇拜にはなりません、と言ったのです。恥ずかしいことです。今は勇気を出して、光の中を歩もうではありませんか。」（安田直人）

---

[今週の暗唱聖句] イザヤ書 2章5節 b

主の光の中を歩もう。

---

〈ねらい〉

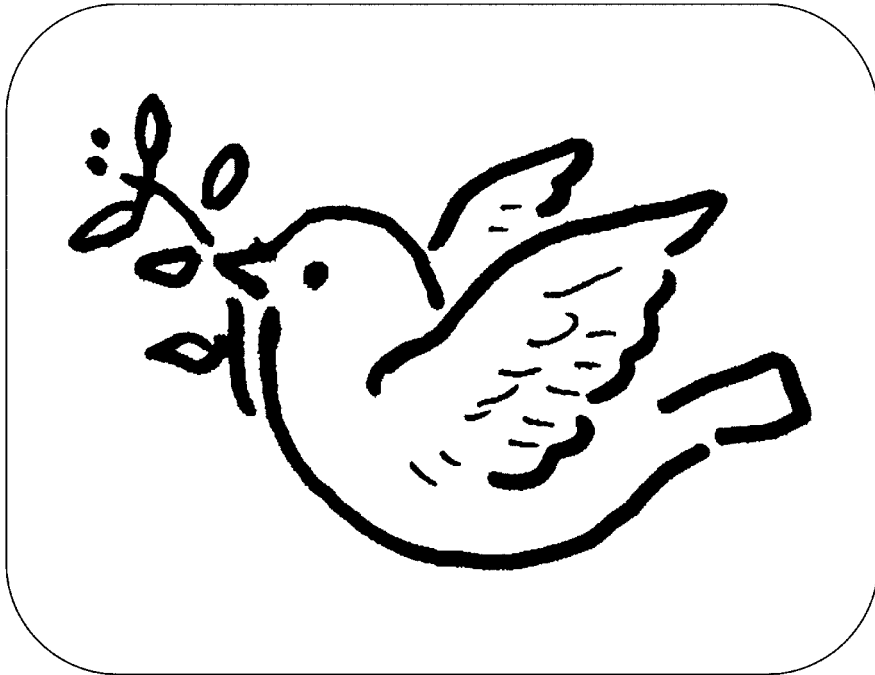
「光の中を歩もう。」  
イエスさまは、神さまを愛し、私たちのことを  
友として歩んでくださいました。  
だから私たちは神さまと仲直りできました。

ひとくちメモ

鳩は平和の象徴  
ノアは、鳩かオリーブの枝をくわてかえってき  
たのを見て、洪水が終わり地が乾いたことを知り  
ました。(創世記8章)

〈展開例〉

ぬりえをしましょう。  
(拡大コピーしてご使用ください)



対話の手掛かりとして……

①今年の8月15日で、第二次世界大戦が終わって、69年を迎えます。中高生の皆さんはもちろんのこと、この文章を執筆している私も、まだこの世に生を受けていません。その当時の様子については、戦争が如何に悲惨なものであったかについては、戦争中の時を過ごした人たちの話や、過去の映像・資料等を通してでしか知るよりほかはないのです。だから、戦争についての理解は様々です。当然、それはいけないことだ。二度と繰り返してはいけないと言う人もいます。また一方で、時代の状況からして戦争することは仕方がないことだったのだと思う人もいます。あるいは、戦争で負った痛みを少しでも和らげようと、戦争を美化する風潮もあるように思えます。そういった中で、キリスト者はどのように考えればよいのでしょうか。

②戦争についての理解が様々なように、「平和」についての理解も様々だと思えます。一般的に「戦争と平和」が一つの言葉として用いられることがありますから、戦争がこの世界からなくなることが平和だと考える人もいます。戦争とまでは言わなくても、人間同士の憎み争いがなくなることが平和だと考える人もいます。平和とは良いことだと考えられています。皆が平和な世界が来ることを待ち望んでいるのです。しかし、その心理を巧みに利用して、「平和」あるいは「正義」の名のもとに、戦争を肯定する人たちもいるのです。そして、実際に、そのような戦争がこの世界の歴史の中で繰り返されてきました。この戦争は、「平和のため」だからと言って、武器を取り、多くの人間の命が奪われていったのです。平和な世界が築き上げられることによって、確かに皆は幸せになります。でも、その幸せとはいかなるも

のなののでしょうか。今回のテキストの中でも、「アッシリアの平和」ということが語られていました。でもそれは神様の目からすれば本当の平和ではありませんでした。「聖書黙想」や「説教展開例」などを参考にして、神様が望まれる平和が何であるかをもう一度確認してみましょう。

③戦時中のキリスト教会は、国の政策に反対することができず、むしろ戦争に加担していきました。つまり、この戦争は正しいものだとして正当化したのです。また天皇を礼拝の中で崇めるということもしていたのです。若い世代の皆さんはどう思われるのでしょうか。なぜ勇気をもって国家の力に反対することができなかったのか。当時の教会は本当に情けない限りだと批判したくなることでしょう。誰よりも神様がこの事実を悲しまれたに違いありません。しかし、ただ批判して終わってはいけないと思うのです。戦時下で日本の教会が犯した過ちを通して、私たちは教えられます。如何に人間が罪深い者であるのかを。それはキリストを信じてない人のことだけではなく、キリストこそまことの神であり、まことの王であると信じている者たちにも、つまり現代を生きている私たちにも言えることなのです。戦争を知らない私もまた、世の権力に屈して、今後、大きな過ちを犯し得る危険性があるということです。ですから、私は戦争のことは知りませんでしたとか、戦争は昔の人の責任だから、私には関係ありませんとは言えないのです。キリスト者は、キリストの十字架によって罪赦された存在です。だからこそ、人間という存在がいかに罪深い者であるかを、神様を信じていない人たちよりも、よく知っているのです。だからこそ、あの時のような悲惨を二度と繰り返してはいけないという強い思いをもって生きて行きたいのです。

テキスト  
参照教理問答

使徒言行録 28章17～31節  
ウェストミンスター小教理問答 問11  
ウェストミンスター信仰告白 5章6節

## I 聖書の解説

### 1. ローマへの旅路

使徒言行録の最後の段落を取り扱う。使徒言行録をルカが執筆した目的は明らかである。それは、1章8節にある「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」という御言葉がいかんして実現していくのか、ということである。パウロが、ローマで伝道したということは、地の果てまでキリストが宣べ伝えられ、弟子達が証人とされたことを意味している。無論、世界の果てはローマではなく、より広い世界が実際にはあるわけだが、当時の世界の中心地であるローマにまで福音が宣べ伝えられたことは、地の果てに至るために不可欠なことであった。

パウロは、長い間、ローマを訪問したいと願っていた（ローマ15:22）。パウロは、ローマの信徒への手紙を伝道旅行の最中、おそらくコリントで執筆したものだと思われる。パウロはコリントに居ながら、ローマに思いを馳せていた。そうしたパウロの思いは思わぬかたちで実現した。それは、自らの逮捕という出来事を通してであった。パウロは、ローマの市民権を有する人物であり、当時のローマ市民は自らの訴えの正当性を最終的にはローマの皇帝に訴えることができた。こうした権利をパウロは使用して、捕えられた後に、ローマに護送された。こうして、彼がローマに到着したのである。その結果、パウロはローマで「パウロは番兵を一人つけられたが、自分だけで住むことを許された」（28:16）のであった。パウロの逮捕という、一見すると好ましくない状況の中でも、神の計画は着々と進んでいる。まさに、パウロ自身がローマの信徒への手紙8章28節で言うように「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共

に働く」のである。

### 2. パウロの伝道

ローマで軟禁状態にあるパウロであるが、まず彼がしたことは主だったユダヤ人と話し合うことであった（17節）。会堂をはじめ、あちこちに出かけて議論を行うのがパウロのスタイルであるが、ここでは未決とはいえ囚人であったのでそのような自由が与えられず、家に招いたのである。主だったユダヤ人との話し合いの結果、さらに話し合いが必要だということになり、多くのユダヤ人がパウロの宿舎を訪れることとなる（23節）。そこで行ったことは、23節によれば、①神の国についての証し、②イエスについての説得、である。

①神の国についての証し。神の国の到来は、新約聖書を貫くテーマであり、イエス・キリストの説教の第一声も神の国の到来を告げるものである。それは、神に対する悔い改めと、主イエス・キリストへの信仰の結果、受くものである（20:21）。パウロは、ユダヤ人たちが熱望していた神の国、神の支配はイエス・キリストというお方においてこの世界に到来して、そしてそれを受け取るためには、このお方を信じる必要があると説いたのである。

②イエスについての説得。相手はユダヤ人である。だとすれば、彼らを納得させるには彼らがよりどころとしている旧約聖書をもとに説得するのが得策である。福音の宣教は、このように、相手にとってふさわしいものである必要が大いにある。

### 3. 異邦人への伝道

パウロは、ユダヤ人に対して神の国について宣べ伝え、そして説得を続けた。しかし、全ての人々がパウロの言葉を信じたわけではなかった（24

節)。こうした態度を、パウロは旧約聖書イザヤ書6章の9、10節によって預言されたものだと理解している。このイザヤ書の言葉は4つの福音書全てに引用されている（マタイ13:14、マルコ4:12、ルカ8:10、ヨハネ12:39,40）。こうした引用はすべてイスラエル人のかたくなさをあらわすものとなっている。そして、異邦人伝道へとパウロは向かうのである。「この神の救いは異邦人に向けられました」（28節）。無論、異邦人にだけ宣べ伝えたのではない。パウロは、イエスによって「異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器」（使徒9:15）である。パウロはイスラエルの子ら、すなわちユダヤ人に対しても宣教の業をなしたのである。よって28節の言葉はユダヤ人に対して宣教をしないということではない。むしろ、それまでのユダヤ人の会堂にまず行って、それから街の人びとに福音を伝えるという仕方を辞めるという意味であろう。福音は、ユダヤ人に対しても、イスラエル人に対しても、伝えられなければならない。

#### 4. ローマでのパウロ

パウロは、ローマで借りた家で多少の不自由はありながらも、人びとに自由に神の国の到来、そしてイエス・キリストについて教え続けたのである。パウロは、ローマで自由を与えられていたが、

その自由を宣教のために用いた。これこそ、キリスト者の自由とよばれる事柄の典型と言えるだろう。

パウロがローマで宣教した2年の後、パウロの身に何が起こったのか、筆者は明らかにしていない。ルカがこの書物を執筆した当時、パウロが生きていたかどうかはわからない。しかし、この書物の目的は、いかにして福音が地の果てに至ったかということである。少々中途半端な終わり方だと思えなくもないが、本書の目的からすればこうした終わり方も決して不思議ではない。

## II 黙想

神の福音宣教は地の果てにまで至るものである。そのために、パウロはローマを目指した。そして、神は不思議な摂理によってパウロをローマまで届けたのである。このように、福音宣教の業は、神の計画と人の情熱によって成し遂げられるものであることを覚えたい。その両者を結ぶものは神の御言葉である。福音の宣教は、御言葉によって示された。それは確実に実現されることである。現在も、神の国は確実に進展していることを覚えたい。神の言葉はとこしえに立つ（イザヤ書40:8）。パウロはこうした確信を持っていたのではないか。今を生きる私たちも、とこしえに立つ神の言葉を信頼して、歩んでいきたい。

（小宮山裕一）



**(単元のねらい)**

ローマで伝道をするパウロの姿を通して、不思議な御業でパウロを導いた神の御業を覚えたい。それと同時に、福音の伝道が地の果てに至るまでの継続的な業であることを覚えよう。

**ローマでの伝道**

今日は、使徒言行録の最後のところを学びましょう。

みなさんは旅をしたことがあるでしょうか。今は飛行機も新幹線もあるので、世界中どこにでも行くことができます。しかし、パウロさんの時代はそうではありませんでした。パウロさんは、ローマという街に行きたいと願っていました。ローマは現在のイタリアという国の首都ですから、聞いたことがあるかもしれません。パウロさんは、ローマに行くために、船に乗りはるばるこの街にやってきました。しかも、パウロさんは逮捕されて、裁判にかかるためにローマにやってきたのです。決して旅行なんかではありません。本来は、自分で計画を立てて、自分の思っているタイミングでローマに来たかったと思います。しかし、パウロさんは逮捕という、一見すると喜ばしくない状況でローマに来たのです。逮捕はパウロさんにとって決してうれしくないことですが、それすらも神様は計画し、パウロさんを導いてくださいました。神様のご計画は不思議です。私たちにははかり知ることはできません。

さて、パウロさんは自分のお金で家を一軒かりて、そこで暮らしました。裁判にかけられていた最中だったので、見張り役の兵士が一人いましたが、パウロさんは自由があり、その自由を神様のご用のために使ったのです。

パウロさんは、どこの街でもそうでしたが、必ず、ユダヤ人の人びとに福音を宣べ伝えました。それから、異邦人に神様のことを伝えたのです。このローマでも同じです。ただ、それまでとは違うのは、パウロさんは自分から会堂にいてユダ

ヤ人とお話ししたり、広場にいて人びとに神様のことを伝えていました。しかし、この時は家にユダヤ人を招いて、そしてお話しをしたのです。パウロさんは、2回、ユダヤ人とお話しをしています。最初は、なぜパウロさんがローマに来なければならなかったのかを説明しました。パウロさんは、決して自分がユダヤ人の伝統的な教えに背いたからではなく、捕えられて、釈放される時にユダヤ人に邪魔をされ、仕方なく裁判をしているのだと説明したのです。それは、パウロさんが語った旧約聖書はイエス様を指し示しているということ、イエス様の復活について語ったので、ユダヤの人びとに恨まれ、結果として、逮捕されてしまったとお話ししたのです。ローマに住んでいるユダヤの人びとも、パウロさんの悪い話を聞いたことがないといいました。ただ、パウロさんが教えていたイエス様についての教えには反対だということ、また日を改めて話し合いを持つことになったのです。それが、2回目の話し合いです。

2回目の話し合いで、パウロさんは神の国についてお話をし、旧約聖書を用いてイエス様についてお話をしました。ユダヤの人びとが待ち望んでいた、神様の国はイエス・キリストによって到来したということ。そして、その神の国に入るといことは、悔い改めて、イエス様を信じる必要があるということ、パウロさんは一生懸命伝えました。ユダヤ人たちは、ある人はパウロさんの話を信じて、イエス様を受け入れました。しかし多くの人びとはパウロさんの話を信じませんでした。そうしたことは、パウロさんにとってショックなことでした。しかし、パウロさんはユダヤ人



がイエス様を信じないことは、旧約聖書のイザヤ書によって予定されていることだと知っていたのです。ユダヤの人びとが、イエス様を信じないということを通して、御言葉が確實であることが明らかになりました。

ユダヤ人がイエス様のことを信じない。パウロさんはそのことを伝えた後、ユダヤ人のみならず、多くの異邦人—ユダヤ人以外の人びと—に神様の救いは向けられる、と宣言します。こうして、全ての国に向かって、イエス様のことが伝えられるようになったのです。

パウロさんが活躍した時代から、2000年が過ぎました。ローマから遠い、この日本という国にも、御言葉が宣べ伝えられて、教会が建っています。まさに、神様の言葉が実現して、私たち日本人にも、救いが与えられているのです。

私たちが住む日本では、教会はとても小さいグループです。だからこそ、私たちは聖霊なる神様に信頼して、一生懸命、御言葉を宣べ伝えなければなりません。救われる人が少ないと嘆く前に、多くの人びとに御言葉が届くように、神様にお祈りをしましょう。  
(小宮山裕一)

---

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙 二 4章2節

御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。  
とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。

---



〈ねらい〉

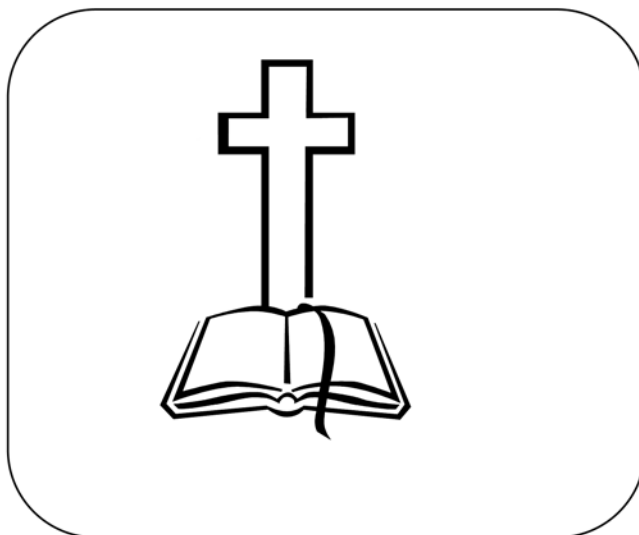
神さまは、思いがけない仕方でも福音の宣教が地の果てまで行きとどくように働いています。

〈展開例〉

「聖書」と「十字架」のぬり絵・はり絵をしましょう。

先生へのひとくちメモ

私たちの喜びは、神さまの子どもとなることです。それは、イエスさまの「十字架」によることです。このことは神さまが「聖書」で示してくださっています。



対話の手掛かりとして……

①『使徒言行録』の最後は次のような言葉で終わっています。「全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」(31節) ローマで捕らえられた使徒パウロがどうなったのかは分かりません。おそらく、この地で殉教の死を遂げたと言われていいます。でもその最期の様子が記されているわけではありません。初期キリスト教会において大きな働きをしたパウロがどうなったのか、読者には気になる点であるかもしれませんが、著者のルカはそれよりももっと伝えたいことがあったのではないのでしょうか。

②ふと、こんな讃美歌を思い起こします。「むねのなみおさまり、こころいとしずけし。われもなく、世もなく、ただ主のみいませり。うたわでやあるべき、すくわれし身のさち、たたえでやあるべき、みすくいのかしこさ」(讃美歌529番3節) 好きな讃美歌の一つですが、一カ所引っかかっていた言葉がありました。それは「われもなく、世もなく」という言葉です。イエス様によって救っていただいたことはとても嬉しいのですが、そのことを喜ぶ私自身がなくなってしまうのは困るな、と最初は思っていたのです。でも段々と、この歌詞の意味が分かってくるようになりました。何も私が消えてもいいなどとは言っていないのです。主イエスは十字架にかけられる前に、弟子たちと約束をしてくださいました。「わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」(ヨハネ14:3)、「わたしが生きてるので、あなたがたも生きることになる」(ヨハネ14:19)。主が生きておられる！ここに私の命もあるのだと知った時、自分に執着しすぎることから解放されたような思いになりました。

③主イエスは、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至まで、わたしの証人となる」とおっしゃいました(使徒言行録1章8節)。その約束のお言葉どおり、聖霊を受けた弟子たちは福音を各地に宣べ伝えていったのです。そして、異邦の地であったローマに福音が宣べ伝えられたのです。使徒言行録は、決して尻切れトンボの未完成の書物ではありません。神様のご計画が実現した形で閉じられているのです。

④今日における「地の果て」とは、今、私たちがいる「この場所」ではないのでしょうか。そして神様は私たちを用いて、福音を広めようとしておられるのです。だから、使徒言行録の続きを記すのは私たちキリスト者だ、と言われることがあります。私たちは将来どのような形で、神様に用いられるかは分かりません。どういう人生の最期を迎えるかは分かりません。パウロたちのように、多くの試練を経験するかもしれません。「全く自由に何の妨げもなく……」(「全く自由に」という言葉は、「大胆に」「勇敢に」「恐れずに」とも訳すことができる)生きられない世の中の力に挫折してしまうこともあるでしょう。でも御言葉は語ります。「全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」と。主の言葉は真実なのです。たとえ、不自由さを感じたとしても、勇気を失うことがあっても、キリストの福音はその壁を乗り越えて、広がっていきます。イエス・キリストは今も生きて働いておられます。そこに私たちの命の源があることを知り、主をますますほめたたえる者へと変えられていくのです。

テキスト

ローマの信徒への手紙 8章26～39節

参照教理問答

ウェストミンスター信仰告白 第8章仲保者キリストについて

ウェストミンスター大教理問答 問55, 178～186 (特に182)

ハイデルベルク信仰問答 問49, 51, 116, 117

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

26節は「同様に」という言葉で始まっている。何と同様に、なのか、一読しただけではわかりにくい。「霊」と「うめき」という言葉から、23節からのつながりであろうと言われている。そして、この「霊」と「うめき」は、「神の子とされること、つまり、体の贖われること」を待ち望むものであって、この点に集中している言葉であることに注意したい。「霊」は「神の子とする霊」であることは15節でも言われており、このような流れがあるので、この日のテキストの範囲は26～39節となっているが、8章の全体をよく読んで黙想することをおすすめする。

26節によれば、「わたしたちはどう祈るべきか」知らない。「どう祈るべきか」の「どう」はhowではなく、whatにあたる言葉で書かれているので、正確に訳すなら、「何と言って祈るべきか」を、わたしたちは知らないのである。「何を祈るべきか」は知っている。「神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいる」と、23節に明確に記されているとおりである。そのことを望みながらうめいているのだが、それを義なる神にささげる祈りとしてふさわしい言葉で「何と言って祈るべきか」が、罪人のわたしたちにはわからないのである。なぜわからないのか。それはロマ書でこれまでに記されているように、罪の問題があるからである。「神の子とされたい」「体を贖っていただきたい(復活の命を与えていただきたい)」と願いつつも、自分の中の罪ゆえに、望むこととは反対のことをしてしまうという現実の中で、わたしたちは、自分中心の思いから出た祈りばかりを繰り返し、神の御心にかなう祈りをささげることがなかなかできない。また、36節で詩編44編23節を引用して「わ

たしたちは、あなた(主)のために一日中死にさらされ……ている」と書いてあるとおりだと言われているように(Ⅱコリ4:10も参照)、罪の世の中で、神の子として、新しく生まれ変わった者として生きることは本当に難しく厳しいので、その中で失意に陥り、祈りへと向かうことさえできないことがある。

そこで、このように弱いわたしたちを助けて、「霊」自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」と書かれているのだが、これは具体的にどのようにしてくださることなのだろうか。

イエス・キリストがうめいた場面がある。マルコ7章31節から37節に、耳が聞こえず舌の回らない人のいやしの記事があるが、34節でイエスが「天を仰いで深く息をつき」と書かれている「深く息をつく」が「うめく」という言葉。イエスはうめいて、その人に向かって、「エッフアタ(開け)」と言われたのだった。耳に向かって「開け」と言われたのではない。「その人に向かって」であった。それゆえ、この人は、耳が聞こえるようになっただけでなく、「舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった」のである。37節の結論文「口の利けない人を話せるようにしてくださる」の「口の利けない」はロマ8章26節の「言葉に表せない」と同じ言葉。だから、マルコ7章37節は「言葉に表せない人を話せるようにしてくださる」と結ばれているのである。

「霊」自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」とは、イエス・キリストご自身が、言葉に表せない人を、うめきをもって開き、話せるようにしてくださったあの出来事のように、イエス・キリストによって遣わされた「霊」が、わたしたちに働いてくださることを意味している。つまり、「神の子とされること」「体の贖わ

れること」を待ち望みながらも、罪ゆえに、それを何と言って祈るべきかわからないわたしたちに、“霊”は、うめきをもってわたしたちを開き、罪の問題を解決して、この祈りの中心点を言葉に表すことができるようにしてくださる、という意味だということがわかる。

ちなみに、26,27節では、執り成すのは“霊”となっていて、34節では、執り成すのは、キリスト・イエスとなっている。“霊”はわたしたちの心のうちに働いて、神への祈りとしてふさわしい言葉になるように執り成し、キリスト・イエスは「神の右に座って」、つまり、天上で執り成してくださるということ。“霊”とキリストは、罪人のわたしたちの祈りが、神に届く祈りとなるように、このように二手から働いてくださるのだから、これほど確実なことはない。それで、31～39節では、この現実性のゆえに「神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」「人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができますか」と、弱いわたしたちが罪に打ち勝って祈ることができるようになることを、強気の発言で記している。

「神の子とされること」「体の贖われること」という、祈りの中心点を想いつつ、何と言って祈るべきかを考えながら8章全体を読むと、祈りの言葉のヒントが見つかる。「罪と死の法則からわたしを解放してください」(2節)、「命と平和を思うことができますように」(6節)、「罪によって死ぬはずのわたしたちの体を生かしてください」(11節)、「霊によって体の仕業を絶つことが出来ますように」(13節)、「恐れにとらわれた生き方ではなく、神の子として歩むことができるように、神の霊によって導いてください」(14,15節)、「滅びへの隷属から解放し、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずからせてください」(21節)、「罪と死に勝った「御子の姿に似たものとなれますように」(29節)……(それぞれ括弧内の箇所参照)。

わたしたちが祈るべき祈りは、わたしたちが罪の悪循環から抜けだして、家庭においても、学校

においても、教会においても、神の子としていきいきと生きること、死んだ者のようではなく、新しく生まれ変わった者として、復活の命を生きたことを願い求める祈りなのである。“霊”とキリスト・イエスの執り成しによって、この祈りを祈ることができ、神に届いたと確信することができる時、「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない」と(8:18)思えるようになるだろう。

### 〈子どもたちに対して〉

自分の罪に気づいたとき、子どもたちは、祈っているだろうか。親や日曜学校教師が共に祈ることによって、“霊”とキリスト・イエスも執り成して下さっているということが子どもたちにわかるように、祈りの体験をしてほしい。

罪に気づいたとき、赦しを求めて祈れるようになってほしい。神さまはイエス・キリストのゆえに必ず赦してくださるということを信じて。たとえ、たどたどしい言葉であったとしても、神さまは心を注ぎ出して祈る祈りを聞いてくださる。

### 〔参考〕ハイデルベルク信仰問答117

問 神に喜ばれ、この方に聞いていただけるような祈りには、何が求められますか。

答 第一に、御自身を御言葉においてわたしたちに啓示された唯一のまことの神に対してのみ、この方がわたしたちに求めるようにとお命じになったすべての事柄を、わたしたちが心から請い求める、ということ。

第二に、わたしたちが自分の乏しさと悲惨さを深く悟り、この方の威厳の前にへりくだる、ということ、

第三に、わたしたちがそれに値しないにもかかわらず、ただ主キリストのゆえに、この方がわたしたちの祈りを確かに聞き入れてくださるという、揺るがない確信を持つことです。

それは、神が御言葉においてわたしたちに約束なさったとおりです。

(赤石めぐみ)

### (単元のねらい)

わたしたちは、罪があるにもかかわらず、イエス・キリストの十字架と復活を通して、神の子として新しく生まれ変わらせていただき、与えられた命をいきいきと生きることができるように変えられる。罪の悪循環に陥りやすいわたしたちが、神の子として、また、新しく生まれ変わらせていただいた者として、この世の中で、いつも罪に打ち勝って生きていくことができるように、イエス・キリストと聖霊とが、弱いわたしたちの祈りを助けて、確実に父なる神に届くよう、執り成してくださっている。このことを知り、確信して、祈ることができるようになりたい。

---

## 罪の力に負けないで生きていくために

---

先週一週間のことを思い出してみてください。お友だちと、ずっと仲良く過ごせましたか。悪口を言ってしまったり、仲間はづれにしたり、意地悪をしたりはしませんでしたか。逆に、そういう目にあったりしませんでしたか。

お家ではどうでしょう？ お父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃんに怒られることはしませんでしたか。兄弟げんかをしたり、ねたんだり、ふくれっ面をしたりしませんでしたか。

街の中を歩くとき、人の迷惑になるようなことをしませんでしたか。困っている人を見かけたとき、助けることができましたか。

クラブ活動や習い事の厳しい練習で、サボったり、ずるをってしまったたりしませんでしたか。

全然、そんな悪いことはしなかったし、悪い目に遭うこともなかった、という人はいますか。

みんなちょっとずつ、心が痛いと思います。自分が一番正しいと思って、相手を判断したり、悪かったことを認めるのが悔しくて、自分を守ろうとしたりして、神さまが悲しまれることをしてしまったのではないかと思います。大人の人たちも例外ではありません。

皆さんは、神さまの子です。聖書にそう書いてあります。神さまの子って、どんな子なのかな。悪いことを一つもしないし、誰からも好かれて、

誰にも嫌われないし、嫌いだと思う人も一人もいない子のことかな。皆さんはそういう子ですか？ そうなれたらいいなあ、と思っているかもしれませんが、こういう子はなかなかいません。それなのに、なぜ、みなさんは神さまの子と呼ばれるのでしょうか？

ここでちょっと、イエスさまのことを思い出してみてください。イエスさまは本ものの神さまの子です。イエスさまはどんな人ですか。たしかに、悪いことを一つもしないし、イエスさまはみんなのことを愛しているから、嫌いだと思う人も一人もいません。でも、誰からも好かれて、誰にも嫌われなかったかな？ イエスさまのことを好きな人はたくさんいたと思いますが、実は、イエスさまのことが嫌いな人もいました。そして、イエスさまを嫌う人たちは、イエスさまを十字架にかけて殺してしまいました。イエスさまは本ものの神さまの子なのに、どうしてでしょう？ どうして殺されなければならなかったのでしょうか？

それは、この世の中に、そして、わたしたち人間の中に、大きな大きな罪があるからです。神さまの子が、どんなに神さまのご命令を守って、神さまに従って正しく生きていたとしても、嫌われてしまったり、殺されるような目にあったりすることがあるのです。神さまの子だから、よけいにそういう目にあう、ということもあります。それなら、神さまの子として生きることは損なことな

のでしょうか。

いいえ、本ものの神さまの子であるイエスさまは、この罪深い世に来てくださって、そのなかで、神さまのご命令を守って、神さまに従って正しく生き、殺されて死んでしまっても、そのあと復活されました。そして今も生きておられます。神さまの子は神さまとずっと一緒に生きていけるのです。神さまは独り子のイエスさまのことが大好きですし、イエスさまも父なる神さまのことが大好きです。大好きな者同士がずっと一緒に生きられるのは、とても幸せなことです。罪の力がどんなに強くても、大好きな者同士の愛のほうが強ければ、こわいものはありません。

神さまは、皆さんのことが大好きです。皆さんは神さまのことが大好きですか。神さまよりも好きな人がいるのではありませんか。神さまが一番好き、と言える人になってください。そうすれば、こわいものはこの世に何もなくなります。

どうすれば、神さまが一番好きと言えるようになって、何もこわいものがない状態になれるのでしょうか。

それは、ほんとうに神さまの子になりたい、と願うことです。そして、神さまとずっとずっと一緒に生きていきたい、と願うことです。聖書をよく読んでいる人は、「わたしたちはもう神さまの子なんですよ。神さまはいつもあなたがたと共にいると言ってくさっているから、もうこれ以上、一緒に生きていきたいですと言わなくてもいいんじゃないの？」と言いたいかもしれません。

たしかにそう書いてあります。でも、神さまはわたしたちに、ほんとうにそう願って、神さまに自分の言葉でそれを祈り求めてほしいと思っています。

そうだとすると、好きな人に、好きだという気持ちを伝えることがとても難しいように、神さま

の子になりたい、と本気で思っても、その気持ちを神さまに伝えることは、簡単なことではありません。「神さまの子にしてください」と言葉で言うのは簡単なのですが、罪がある世の中で生活していると、実は神さまを悲しませることばかりをしまっていて、自分は悪い子だなということに気づいている人は、それでも「神さまの子にしてください」と祈ってもいいのかな？ 神さまに「ムリ」と言われてしまうのではないかな？ と思ってしまうからです。

そんなふうに不安に思う必要はありません。今日の聖書の箇所には、イエスさまが送ってくださった“霊”（聖霊）が、そのように考えて祈りをなかなか言葉にできない私たちを助けてくださる、わたしたちはどう祈るべきか（何と言って祈るべきか）を知りませんが、“霊”（聖霊）が執り成してくださる、と書いてあります。“霊”はわたしたちの心に働いて、「神さまの子にしてください」、「神さまとずっと一緒に生きていきたいです」、「この世の中で、罪に打ち勝って、神さまの子としてふさわしく生きられるようにしてください」という願いを、祈りの言葉にできるように助けてくださいます。そして、34節には、イエスさまが神の右に座って執り成してくださる、と書いてあります。上からも下からも助けの手を差し伸べてくださって、両手でしっかり持っていくかのように、イエスさまと聖霊とが、がっちり皆さんの祈りを神さまに届けてくださる、と聖書に書いてあるのです。こんなに確実で安心なことはありません。神さまは、神さまの子である皆さんのその願いを聞き届けてくださって、この世の中で、罪の力に負けないで、大好きな神さまとずっと一緒に生きられるようにして下さいます。

こういう神さまの子がたくさん現れますように。  
(赤石めぐみ)

---

[今週の暗唱聖句]      ローマの信徒への手紙 8章26節

同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。

わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、

“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。

---

〈ねらい〉

聖霊とイエス・キリストが、どんなときでも弱い私たちのために祈ってくださる。

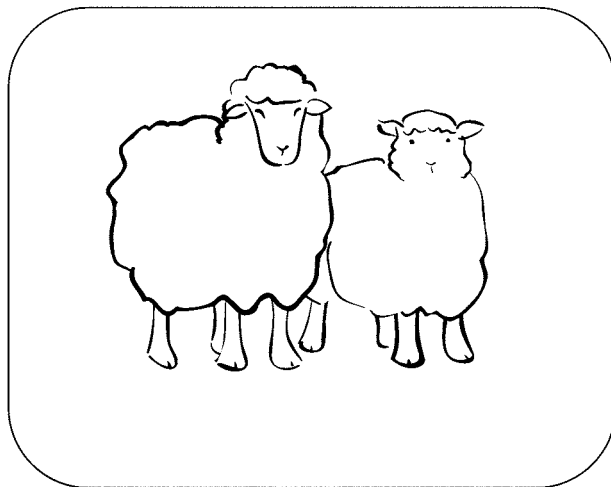
〈展開例〉

「羊」と「羊飼い」のぬり絵・はり絵をしましょう。

先生へのひとくちメモ

「羊」は、強くない・迷子になりやすい私たちを表しています。

「羊飼い」は、羊たちを一番良いところに導いてくださいます。羊飼いであるイエスさまに従っていきましょう。





対話の手掛かりとして……。

- ①今回のテキストは、大変豊かなことが語られています。到底一回では語り切れないでしょから、単元の目標にもあるように、「執り成し」というキーワードに基づいて考えてみましょう。「執り成し」とは、例えば、ある人が、誰かと誰かの間に立って、その場を上手く取り計らうことです。ここでは、「聖霊」と「キリスト」が、父なる神と私たちの間に立って、上手く取り計らってくださるということです。
- ②まず「聖霊」の執り成しの働きについて考えてみましょう（26節～）。信仰者として生きていて様々な弱さを覚えることがあります。その一つは、祈ることができない弱さです。祈ることを怠るというよりも、祈りたくても祈れないほど、心に疲れを覚えることがあるのです。その時に、自分に追い打ちを掛けるように、「お祈りもできないダメなやつだ」と責めてしまうかもしれません。でも、その時に、聖霊は祈ることができない私たちに代わって祈ってくださるということです。すらすら流暢に祈ってくれるわけではありません。私たちの心をすべて知っておられる聖霊が声にならない呻きをもって、父なる神様に祈ってくださるのです。
- ③次に「キリスト」の執り成しについて考えてみましょう（31節～）。キリストが私たちの罪を背負って十字架について死んでくださいました。神様と人間との間にはキリストの十字架が立っているのです。父なる神様は、キリストを通して、私たちをご覧になり、「あなたは義しい」と宣言してくださいます。私たちも、キリストを通して、自分が神様から愛され、赦されてい

る存在であることを知るので。この恵みは、どのようなことがあっても覆されることはありません（35節、38～39節）。

- ④「聖霊」と「キリスト」が、父なる神様に執り成してくださることによって、神様と私たちは敵対関係にあるわけではありません。今も、そしてこれからも、常に私たちの「味方」でいてくださるのです。周りが敵だらけで、誰も自分のことを構ってくれない時ほど、辛いことはありません。そういうときに、私の味方をしてくれる仲間が、「あなたがたたちは間違っている！この人の本当の姿はこうなのだ！」と言って弁護してくれるならば、どれほど励まされることでしょうか。まして、神様が私たちの味方でいてくださるのですから、何も恐れることはないのです。もちろん神様が味方だから、私たちは何をしても許されるのだ。だから、好き勝手に生きればよいのだということではありません。どんなことがあっても、神様が味方でいてくださるからこそ、大胆に、喜びと誇りをもって、神様の御心に従うことができるのです。
- ⑤神様を信じたいのだけれども、まだまだ自分分らないことだらけだと思える人もいることでしょう。キリスト者として歩んでいても、罪や失敗を重ねるうちに、自分は本当に救いの内に入れられているのだろうか、不安になることも多いかと思えます。しかし、「わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」（39節）。主の愛の強さと、救いの確かさは私たちが心で思うよりもっと大きくて確かなものなのです。

テキスト	ヨハネの黙示録 1章9～20節
子どもカテキズム	問35
参照教理問答	ウェストミンスター大教理問答 問52, 54, 16, 121 ウェストミンスター信仰告白 21:7

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

#### イエス・キリストの黙示 (1:1)

書名にも用いられている黙示とは、隠された意味を示すことであり、未来に発生すること、つまり終末の出来事が象徴的な表現を用いて語られています。黙示録を読んでも理解できないために、読むことを避けることがあるかもしれません。しかし、1世紀の人々に理解できる表現を用いつつ、なおも終末に起こる迫害と最後の審判、神の国の完成を適切に教えています。そのため、救いの確かさ、神の国における永遠の生命を確認するためには必要な書簡です。初めから読むのを諦めるのではなく、黙示録もまた、神の御言葉であることを意識しつつ、読み進んでいかなければなりません。

また、1章1節では、「イエス・キリストの黙示」と語られていることにも注目していただきたい。つまり、「神の言葉 (ロゴス)」としてお働きになる神の御子イエス・キリストは、天に昇られても、私たちをご支配くださり、御言葉をもって養ってくださる神です。9月21日からは、旧約聖書に戻りますが、旧約において御言葉をもって民に語りかける御子が、人となり、私たちの罪の贖いのために十字架にお架かりになり、死を遂げられました。この神の御子イエス・キリストは、復活し、天に昇られた後も、私たちを御支配し、黙示録により語りかけると同時に、今も私たちのために執り成してくださっています。

#### 人の子 (1:13)

黙示録では、「人の子」(1:13) が、直接ヨハネに現れてくださり、語りかけてくださいます。その面影が13～16節に語られるが、天における栄光に満ちた姿が描かれています。大祭司のような服装、無罪性を示すような白い羊毛、雪のような

白さ、罪の裁きに対する決意を示すような輝き……。永遠から永遠に生きておられる神の御力、栄光が、ここで表現されています。

また、17節から18節で自己紹介をされています。「最初の者にして最後の者」つまり、永遠から永遠に生きておられるお方であり、「生きている者である」とは、出エジプト3章14節にある「わたしはある。わたしはあるという者だ」と神がモーセに語られた言葉を思い起こさせます。また、「一度は死んだが、見よ、世々限りなく生き」とは、キリストの十字架と復活を指し示し、「死と陰府の鍵を持っている」は、マタイ16章19節を思い起こさせます。

私たちは、主の御前に罪を赦され、神の子とされているのであり、主の御前に畏れをもって主の御言葉に聴くことが求められています。教会は不必要に権威を振り回してはならないが、同時に、神の権威をはっきり示し、畏れをもって御言葉にひれ伏すことも語っていかなければなりません。

#### 秘められた意味 (奥義) (1:20)

新共同訳聖書で「秘められた意味」と訳されているのは、「奥義」と訳されてきた言葉です。私たちが救われ、神の民として歩んでいくために必要なことを、神様が特別に明らかにしてくださったのが黙示です。私たちは、救いという奥義を、神の御言葉が黙示で啓示されることによって知ることができるのであり、聖書の御言葉以外の何にも求めることはできません。

#### 主の日 (1:10)

私たちは、キリストの復活を覚え、週の最初の日にキリスト教安息日として、神さまを礼拝しますが、この日を「主の日」と表現します。

「主の日」との表現は、新約聖書において何度

か記されていますが、週の最初の日、神さまを礼拝する日として「主の日」が記されているのは、黙示録1章10節のここだけです。他の箇所で行われる「主の日」は神の国の完成の時を示しています。そしてカルヴァンは、主の日と安息日との関係について、次のように語っています。「我々は救いの奥義を象徴すると考える儀式をもっとも窮屈な宗教心をもって守るのではなく、教会における秩序を維持するために必要な方策として受け入れているからである」（綱要Ⅱ8:33）。

主の日、私たちは神さまの御前に集められ、神さまに礼拝を献げます。そこで、奥義であり秘められていた神の救いが、神の御言葉である聖書の解き明かしにより、明らかにされるのです。

### 七つの金の燭台 (1:12, 20)

旧約の時代には、幕屋に金の燭台があった（出エジプト25:31, 32, 列王記上7:49, セカリヤ4:2）。そして人の子は、「七つの燭台は七つの教会である」（1:20）と語ります。直接的には黙示録が書き送られる7つの教会（1:11）を指しているが、それは同時にこの世に立てられた一つひとつの教会を指し示しています。

暗闇にある奥義を、光としての神の御言葉を人々に伝えていく使命が、教会に与えられています（マタイ5:14~16）。

### 七つの星 (1:16, 20)

ヨハネは「七つの星」を「七つの教会の天使たち」と解き明かします。天使たちとは各個教会に

与えられた御言葉の奉仕者、牧師を指していると解釈してよいでしょう。

また、七つの星は、人の子の右の手に持たれています。「右」は権威の象徴であり、牧師は主の権威が委ねられた者として、御言葉を取り次ぎ、救いの奥義を明らかにしていくことが求められています。

### 〈子どもたちに対して〉

黙示録を読むことは、子どもたちにとっては難しく、まさにミステリー（秘められたこと・奥義）です。しかし下記の事を確認することにより、子どもたち一人ひとりが、神さまの恵みに満たされ、神さまの救いの中に入れられていることを確認し、救いの喜びを伝えていただきたい。

### 〈確認すべきこと〉

- ・イエスさまは、十字架の死と復活を遂げられ天に昇られたが、今もなお生きておられ、私たちに語りかけてくださること。今も私たち一人ひとりを覚えて執り成しの祈りをしてくださっていること。
- ・主は、秘められた言葉を、教会で、主の日の礼拝において、牧師を通して解き明かして下さり、私たちの救いをはっきりさせてくださること。
- ・神さまを信じることによって、私たちも天国に導かれ、神さまの栄光に包まれて、永遠の生命が与えられること。 （辻 幸宏）



テキスト ヨハネの黙示録 1章9～20節  
子どもカテキズム 問35

### 〔単元のねらい〕

- ・ イエスさまは、十字架と復活を遂げられ天に昇られたが、今もなお生きておられ、私たちに語りかけてくださること。今も私たち一人ひとりを覚えて執り成しの祈りをしてくださっていること。
- ・ 主は、秘められた言葉を、教会で、主の日の礼拝において、牧師によって解き明かして下さり、私たちの救いははっきりとしてください。
- ・ 神さまを信じることによって、私たちも天国に導かれ、神さまの栄光に包まれて、永遠の生命が与えられること。

## ミステリーに秘められた救いの輝き

### 〈聖書はミステリー小説だ！〉

今、読んだ聖書の箇所、難しくなかった？ すべて理解することができたという人がいたら素晴らしいと思います。しかし、理解できなかったからといって、がっかりする必要はありません。みんなは「ミステリー」という言葉を知っていますか。ミステリー小説が好きなおもいるかと思えます。「ミステリー」とは、「神秘的なこと」なのですが、ミステリー小説は、謎を解き明かしながら、一つの事件を解決していきますよね。

聖書、旧新約66巻ありますが、これがすべて救いを解き明かすミステリー小説なのですね。つまり、永遠から永遠に生きておられる神さまがおられ、その神さまが私たちを救い出してください、死んでも甦り、永遠の生命をくださるということを聖書は私たちに教えてくださるのです。

### 〈ミステリーを解き明かすイエスさま〉

先生は名探偵コナンが好きで、土曜日の夕方に放送されていますが、毎週見えています。コナンも、一つの事件があれば、いろいろな証拠を集めて、そして真実を明らかにして、犯人を捕まえていきますよね。

聖書に記されたミステリーも、それを解き明かして下さらなければ、理解することができません。黙示録においては、ヨハネさんに神さまから

黙示というこれから起こることが語られたのですが、それを解き明かす方として「人の子」が現れてくださいました。ヨハネさんは、その方が現れると、倒れてしまい、死んだようになってしまったのです。

### 〈神としてのイエスさまのお姿〉

それはその方が、素晴らしい方だったからですね。それは十字架にお架かりになり、死を遂げられたけれども、三日目の朝に復活され、その後、天に昇っていかれたイエスさまだったからです。イエスさまは、天に昇られて、もうおしまいではないのです。イエスさまは、神の御子として、永遠から永遠に生きておられます。神さまは、天地創造において、言葉を発せられて、天地万物を創られましたが、この言葉こそが、神の御子です。そして旧約の時代も生きておられ、そしてマリアによって人としてお生まれくださり、世において生活し、弟子たちに教え、十字架と復活・昇天を遂げられたのです。この神の御子であるイエスさまは、今も、天において働いておられます。私たちのために御言葉をお語りくださり、神さまが救い主であることを信じるように導いてくださいます。また私たちが毎日祈る時、私たちを守り、私たちの祈りを聞き届けてくださいます。

永遠から永遠に生きておられる神さまとしての

イエスさまがどのようなお姿であったのか、ヨハネは語っています。

・足まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めておられた。

→旧約聖書に記されている大祭司のようであり、またすべてを支配している王のようでもあります。イエスさまは、御言葉を伝えられる預言者として、私たちに救いをお与えくださる祭司として、そして私たちをご支配くださり、救ってくださる王として君臨され、栄光をお示しになります。

・その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く、

→まったく罪がない義しく・聖く・真実な方としてのお姿です。

・目はまるで燃えさかる炎

→一方にあって罪に対しては厳しく罰せられます。

私たちは、創造主であり、救い主である神さま、つまり父なる神さま、御子イエス・キリスト、聖霊なる神さまをはっきりと知り、信じなければなりません。神さまはお友だちではありません。なんでもなあなあで許してくださる方ではありません。私たちは、神さまを神さまとして敬わなければなりません。そのために聖書を読むこと、祈ること、礼拝に出ることを、神さまは私たちに求めています。

#### 〈教会・牧師を用いてお語りになるイエスさま〉

また20節では、「あなたは、わたしの右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、それら

の秘められた意味はこうだ。七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である」と語られますね。イエスさまは、教会や牧師先生を用いて、ミステリーを解き明かしてくださいませ。

つまりイエスさまは、ミステリーの答えを私たちに教えてくださいます。しかしそれは、教会において語られる説教によってです。教会学校においても説教が語られます。また、主の日の礼拝においても説教が語られます。教会学校の先生や牧師先生が聖書を読んで、考え、教えてくださっているのですが、ここにイエスさまが聖霊をとおして働いてくださいます。そして私たちに、わかりやすく、そしてイエスさまこそが私たちの救い主であることを教えてくださるために、イエスさまが聖霊をとおして働いてくださいます。

#### 〈ミステリーの答え〉

ミステリーには必ず答えがあります。聖書が語るミステリーの答えは何でしょうか？ 実は聖書は金太郎飴のように、どこを読んでも、結果として答えは同じなのです。

それはイエスさまが真の神さまだということです。イエスさまは、イエスさまを信じる人の罪を赦し、救ってくださいます。イエスさまが復活されて天国に行かれたように、イエスさまを信じて救われる人は、必ず天国に行き、永遠の生命が与えられます。イエスさまは今も、みんなのことを愛してくださり、見守ってくださっています。祈りを聞き、私たちにとって一番良い答えをお与えくださいます。 (辻 幸宏)

---

[今週の暗唱聖句] ヨハネの黙示録 1章17,18節

恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。

一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。

---

〈ねらい〉

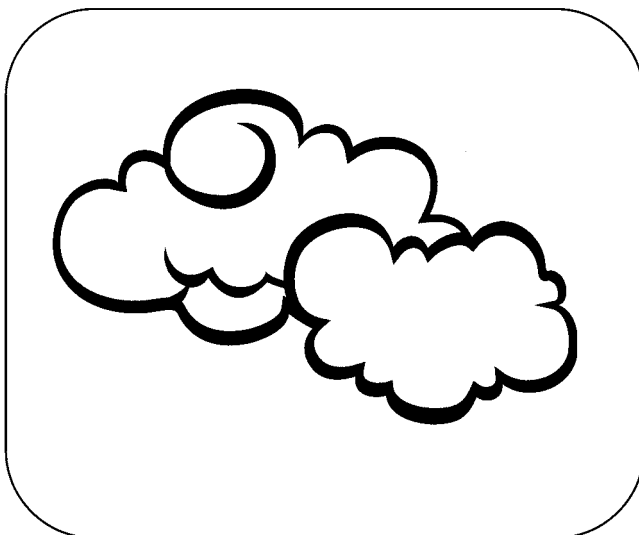
イエスさまは天の神さまのもとから、この地上に来られて、また天の神さまのおられるところに帰られました。しかし、天の上のイエスさまは、いつまでも教会をまもってくださる働きをしています。

〈展開例〉

「イエスさま」と「雲」のぬり絵・はり絵をしましょう。

先生へのひとくちメモ

イエスさまは復活されて天のうえの神さまのもとで生きて働いておられます。



対話の手掛かりとして……。

①聖書の最後にいったい何が記されているのだろうか。興味半分で、『ヨハネの黙示録』を開いた昔のことを思い起こします。聖書の初めに記されている『創世記』のことや、旧約聖書の族长や王たちの物語はよく聞いたことがあるかもしれませんが。もちろん福音書に証しする主イエスの姿勢も知っています。しかし、最後に何が書かれているのか。正直、幼い頃の私の記憶にはあまり残っていないのです。黙示録を読んでもあまりよく分かりませんでした。そして不思議なことに、教会の外で、「黙示録」という言葉が独り歩きしていることに気付かされ、そちらの方に引き付けられることも珍しくないのではないのでしょうか。何か、この世界の終わりのことが書いてあるらしい。謎に満ちた言葉が一体何を意味するのか？ まるで謎解きのような思いで、黙示録を読む人も実際はいるのです。確かに黙示録を読むにあたり、言葉の背後に含まれている意味を汲み取らなければいけません。難しいと言えば難しいのです。でもある神学者がこんなことを言っていました。「ヨハネの黙示録が私たちに伝えたいこと。それは『神を礼拝せよ！』その一言に尽きるのだと。」

②1世紀末、ローマ皇帝ドミティアヌス帝の支配の下、キリスト者たちは迫害の対象になっていました。「わたしはキリストを信じる」と告白し、礼拝する者たちは、迫害され、命さえ奪われたのです。世の支配者の力が、自分の目の前に迫っている中で、礼拝を捧げることは容易なことではありませんでした。自分の命を守るために、神から離れる者たちも多くいたのです。私たちは、黙示録が書かれた時とまったく同じ状況下に置かれているわけではありません。しかし、

今日の日本の政治の動きを見る限り、将来のことがとても心配です。また迫害という形でなくても、神様から引き離そうとする力は無数に存在します。いったいどういう力が身近に存在するのでしょうか。あるいは、思いもしなかった出来事を経験し、立ち上がることができないほどの絶望に打ちひしがれることもあるでしょう。そこでなお神様を仰ぎ見て、礼拝することは可能なのでしょうか。

③ヨハネの黙示録について記したある学者は、黙示録をとおして、私たちは「見ることを学ぶのだ」と言いました。神様が示してくださる幻とは、空想や絵空事ではありません。目覚めた時に、あれは夢だったのか、と言って空しい思いに陥ってしまうようなものでもないのです。辛く厳しい現実の中に、主は幻を通して、生きる力と希望を私たちにも見せてくださいます。

④ところで、ヨハネが幻を見たのは、いつだったのでしょうか。それは「ある主の日のこと」(10節)とありますように、「主の日」(日曜日)に礼拝を捧げているときでした。神様は礼拝をすることが困難な者たちのことをいつも心に留めてくださり、絶えず礼拝へと招き続けてくださいます。色々な事情で、毎週、教会の礼拝に出席することができないこともあるでしょう。神様を礼拝したいという思いと、自分を取り巻く現状との間に板挟みされてしまい、ヨハネのように倒れて、死んだようになってしまうことがあるかもしれませんが(17節)。でも倒れている場所は、主の足もとなのです。だから、主がいつも手を置いて助けてくださいます。「恐れるな」と声を掛けてくださいます。私は今日も主に守られているとの平安を携えて、この世界を生きていくことができるのです。

ヨハネの黙示録4章には、天上における礼拝の様子が描かれている。これは神がヨハネに特別に、幻によって見せてくださったものである。

聖霊に満たされて天へと移されたヨハネがまず見たものは、玉座とその上に座しておられるイエス・キリストであった。キリストは宝石の輝きによって表現されている(2,3節)。玉座からは稲妻がひらめき、雷鳴が響きわたり、落雷のとどろきが起こる(5節)。こうした激しい自然現象は、神の臨在のしるしである。

玉座の中央とその周りには四つの生き物があった(6節)。四つの生き物はキリストの座を守り、神をほめたたえる天使のシンボルである。第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は鷲のようであった。獅子も雄牛も雄々しさ、力の象徴である。人間は創造の冠であり、被造物の中の知恵者の代表である。鷲は空を飛ぶ被造物の中で最強の生き物である。さらに、この四つの生き物には前にも後ろにも、一面に目があった。目はものを見通す英知を表す。つまり四つの生き物は、まさに英知と力の化身であったということである。

この四つの生き物の讃美に、二十四人の長老たちの讃美が加わる(9～11節)。彼らは白い衣(勝利のしるしである)をまとい、頭には金の冠(栄誉のしるしである)をかぶっている。二十四という数字は、旧約のイスラエルの十二部族と新約の十二使徒とを合わせた数であるとされる。つまりこの人々はすべてのキリスト者たちの代表である。

興味深いのは、彼らが自分たちの冠をキリストの玉座の前に投げ出していることである(10節)。このふるまいは、黙示録が書かれたときに、ローマ皇帝に対する忠誠をあらわすものとして実際になされていたと伝えられている。つまり、黙示録は地上の支配者であったローマ皇帝を強く意識し

ながら、皇帝とまことの王であるキリストとを対比するしかたで述べているのである。二十四人の長老たちはキリストの前にひれ伏し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出してキリストを讃美した。

天の玉座は、主なる神の主権を表すシンボルにほかならない。そして今ローマ皇帝は地上の王国の玉座に座し、この世の力を誇り、教会とキリスト者を迫害している。けれども地上の王も王国もやがては衰え、滅びる。たとえ天と地が消え失せたとしても確実に残るのは、永遠に存続するのは、天の玉座に座すお方のみである。

つまりヨハネが目当たりしたのは、この世の王も主なる神の主権に服しているという事実であった。肉の目には地上の王が君臨し、権力をほしいままにしているように見えても、実はいかなる国も復活の主の支配下に置かれている。全世界がまことの王の権威に服している。今ヨハネは万軍の主の本営にいて、そのことをはっきりと確かめたのである。

ヨハネの黙示録は、ローマ皇帝による迫害下にあった教会とキリスト者たちを力づけ、キリストを信じる信仰に立ち続けるよう励ますことを目的に執筆されたと言われている。ヨハネには、迫害下で苦闘していた教会を励まし、希望を与えようという務めが担われていた。そのためには、彼らがやがてあずかるであろう天上の礼拝がいかにすばらしいものであるのかを示すのが何よりのことであった。それで神はヨハネに、天上の礼拝を前もって垣間見せてくださったのである。

私たちの信仰生活にも試練があり、たたかいはある。しかし、私たちの主はこの世に勝利しておられる。このお方こそまことの王であられる。そして主の日に備えられている礼拝は、天上の礼拝の前味である。ヨハネとともに私たちも主の日ごとに天の栄光を仰ぎ、希望を持つことができるのである。終わりまで信仰のたたかいを担い続けることができるのである。(木下裕也)



**(単元のねらい)**

地上の信仰生活には試みもあり、たたかいもある（それは子どもたちも同じであろう）。キリストこそ王であり、主であることを確かめることが、そのたたかいに勝利していく力となり、励ましとなり、希望となる。地上における主の日ごとの礼拝は、天の礼拝の前味である。天の栄光を仰ぎ望みつつ、地上にあって主をあがめるわざに生きていきたい。

**主よ、わたしたちの神よ**

私たちは主の日ごとに礼拝をささげています。主の日の礼拝において、イエスさまは私たちと出会ってくださいます。イエスさまは今天におられ、私たちは地上にいますが、天と地のへだたりをこえて、私たちは復活され今も生きておられるイエスさまとお会いするのです。ここに主がおられるとだれもが認めずにはおれないほど鮮やかなしかたにおいてです。すばらしい恵みです。

でも、ひとつのことを覚えていてください。礼拝は地上でささげられているだけではありません。天でもささげられているのです。

天上の礼拝は、今は地上の旅路を終えて天の国でイエスさまとともにある人びとの礼拝です。この人びとは地上でのすべての信仰のたたかいをたたかい抜いて、今は義の栄冠を受けてひたすらに神さまをほめたたえています。信仰の勝利をおさめた人びとなのです。

今は地上にいる私たちは、地上の礼拝につらなって、天にある聖なる人びととともに声を合わせて神さまをほめたたえます。そして、やがて私たちも一人一人天の国に迎え入れられて、顔と顔を合わせて神さまを仰ぎます。天上の礼拝に加えられることになるのです。

今朝はヨハネの黙示録4章の御言葉に聞きます。ここには天上の礼拝の様子が描かれています。天の王座に、イエスさまが座しておられます。イエスさまの栄光は、まるで宝石の輝きのようです。

そして、天使たちが昼も夜も、絶え間なくイエ

スさまをほめたたえています。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」(8節)。

そこに、信仰を持って生き抜いた人びとの讚美が重ねられます。この人びとは白い衣（勝利のしるしです）をまとい、頭には金の冠（栄誉のしるしです）をかぶっています。そして自分たちの冠をイエスさまの王座の前に投げ出して、イエスさまをほめたたえるのです。

「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです」(11節)。

このすばらしい天上の礼拝の様子を、神さまはヨハネに見せてくださいました。まだ地上にあるうちに、特別に見せてくださったのです。それはヨハネを、またヨハネとともにイエスさまを礼拝して生きていた人びとを、励まし力づけるためでした。

黙示録が書かれた時代、教会は大きな苦しみの中にありました。この時代に世界の王として君臨していたのは、ローマ帝国の皇帝です。ローマ皇帝はこの世の支配者として大きな力をふるっていただけでなく、自分を神にまつりあげ、自分を礼

拝するよう命じていました。そしてこの命令に従わない人びとを捕らえ、罰していたのです。教会につらなってイエスさまを信じる人びとは、もちろん皇帝を神として礼拝することなどできません。それで、このことが厳しい試練となったのです。

天上の礼拝の幻においてヨハネが見たのは、イエスさまがまことの王として王座に座しておられる姿、そしてイエスさまを喜び、ほめたたえる天使たちや聖徒たちの姿でした。今ローマ皇帝による迫害のさなかにあって、教会は苦しんでいます。けれどもローマ皇帝はまことの王ではありません。イエスさまこそまことの王です。そのことはやがてあきらかになります。地上の王も地上の王国も、やがては衰えるのです。滅びていくのです。マーティン・ルーサー・キング牧師は語っています—偉大な王国を築いた王たちは今どこにいるのか。みな消えてしまった。彼らの王国も、今は地上にひとつも残っていない。けれどもイエスさまの救いの祝福はなお広がっている。全世界にイエスさまを信じる人びとが起こされ、教会がたてられている。

イエスさまこそ、世に勝利されたお方です。イエスさまこそ全世界の王です。地上の王たちも、

すべての造られたものもイエスさまに服しています。天上の礼拝を見ることによって、ヨハネはあらためてそのことを確かめることができました。そして、苦しみの中でもイエスさまを信じる信仰のたたかいをよく担うようにと聖徒たちを励ますことができたのです。

私たちはこの地上でイエスさまを信じて生きています。イエスさまを礼拝して歩んでいます。その生活にも、ときに苦しいこともあるでしょう。つらいことや困難に直面することもあるでしょう。けれども、私たちは天上の教会を思うことができます。天にまなざしを向けることができます。イエスさまはいつも私たちとともにいてくださいます。そして、この世のどのような試練にもうちかつ力を与えてくださいます。

地上での主の日ごとの礼拝は、この天上の教会の前味です。天にいる聖徒たちと声を合わせて、私たちもイエスさまをほめたたえましょう。

「主よ、わたしたちの神よ、

あなたこそ、

栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方」。

(木下裕也)

---

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙 13章8節

イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。

---



〈ねらい〉

聖霊降臨から誕生した主キリストの教会。迫害に苦しむヨハネに見せてくださった天上の礼拝。世に勝利されたイエスさまを、天の礼拝とともに、讃美します。

〈お話〉

今朝もみなさんといっしょに、神さまに礼拝をささげることができて、とてもうれしいです。

ぼくたち、わたしたちの教会だけでなく、この町の教会、日本の教会、世界中の教会のおともだちが、この朝もよろこんで礼拝をささげています。元気いっぱい讃美をささげています。

むかしから、わたしたちの国でも、ほかの国でも、教会で父なる神さまを礼拝することを禁止したり、イエスさまを信じてしたがっている教会の人々をひどく苦しめる王がいました。

「ヨハネの黙示録」を書いたヨハネさんやヨハネさんの教会も、その時のローマの王から、とてもひどく苦しめられていました。それを知っていた神さまはヨハネさんに、天の国でささげられている礼拝のようすを見せてくださいました。イエ

スさまは、まるで宝石のように光かがやき、昼も夜もイエスさまをほめたたえる天使の美しい歌声が響いていました。これを見たヨハネさんは、イエスさまこそが全世界のまことの王さまであることが、はっきりわかりました！そしてヨハネさんは、今は苦しみの中にあっても、「だいじょうぶです。イエスさまを信じて、安心しましょう！」と、教会の仲間をはげました。

どんな時でも、イエスさまのおこころはいつもわたしたちと、ともにあります。どんな時でも、イエスさまはわたしたちのためにとりなしのいのりをしてくださっています。どんな時でも、イエスさまはわたしたちに苦しみにうちかつ力をあたえてくださいます。

〈暗唱聖句〉

「イエス・キリストは、きのうもきょうも、また永遠にかわることのない方です」

(ヘブライ人への手紙13:8)

〈さんび〉

『主イエスとともに』90番

(「ふくいん子どもさんびか」いのちのこぼ社)

①9月に入って、はじめての礼拝です。夏休みの間、なかなかそろわなかったお友だちも、新学期、共に礼拝をささげることができたことを感謝しながら、『主イエスとともに』を讃美します。

②工作：「万華鏡」(天の国の輝き)

〈材料〉

- ・500ml 容量のペットボトル・1L 容量のペットボトル (両方とも底が円形のもの)
- ・油性ペンセット

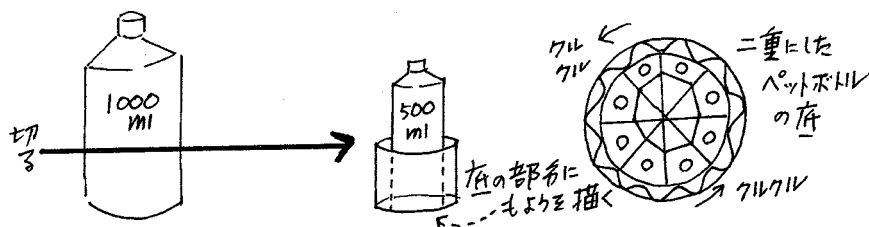
〈作り方〉

①大きい方のペットボトルの底から5cm上を切る。

切り取った底の外側に、油性ペンで模様を描いたり、色を塗る (黄色など)。

②小さい方のペットボトルの底の外側にも、油性ペンで模様を描く。

③大きい方のペットボトルの底に、小さい方のペットボトルを入れて、飲み口からのぞいて見る。クルクル両手で回しながら見るときれいな模様があらわれます！



対話の手掛かりとして……

- ①ヨハネの黙示録第4章には、「天上の礼拝」の様子が記されています。そして、私たちが今、地上で捧げている礼拝と、終末における天上の礼拝は、決して切り離されたものではありません。だから、地上の教会で捧げている礼拝は、天上での礼拝に連なるものであり、その「前味」を味わっているのだと言われます。では、前味とはどういうことでしょうか。こんな説明を聞いたことがあります。天上の礼拝で味わう喜びは、コース料理で言えば、「メイン・ディッシュ」に当たるのだと。そして、地上の礼拝では、その「前菜」を味わっているのだと。前菜を味わいながら、やがて目の前に運ばれて来るメイン・ディッシュ（救いの完成）を楽しみに待ち望みながら礼拝を捧げているというのです。また、地上の礼拝（教会）が、外国の大使館に譬えられることがあります。その国の大使館に入ると、違う国に存在しながらも、まるでその国に来たような思いになるというのです。
- ②そうしますと、問われるのは地上に存在するキリストの教会です。教会に初めてやって来た人たちが、そこで本当に、天への憧れを抱くことができているのでしょうか。また、キリスト者自身も、礼拝に来る度に、天国の前味を味わう喜びにあずかることができているのでしょうか。「天国の前味とは言うものの、実際はねえ……」となってしまうのは、元の子もありません。喜びと成り得ていないのならば、やはりどこかに問題があるはずなのです。中高生たちに礼拝は大事だと伝えると同時に、それが彼らの喜びとなるように祈り求め、福音の言葉を獲得していきたいものです。
- ③W・Hウィリモンという人が、礼拝についてこんなことを言っていました。「礼拝とは神に仕

えること（サービス）を意味します。……神にお仕えするもうひとつの方法は、神が神であられ、あなたが神の子であるゆえに、あなたに求められていることを行うことです。たとえば、神のために歌ったり、神のために笑ったり、神のために涙を流したり、自分がどのように思っているのかを神に打ち明けたり、というようなことです。大まかに言うなら、それは神を喜びながら、神のために自分を笑ってみせることです。それは、恋人が愛する相手のために、いつも自分の愚かさを笑ってみせるのと似ています。すばらしいパーティーは、幾ばくかの喜びと、幾ばくかの愚かさを兼ね備えているものですが、そのことは、毎週日曜日にここで行われるパーティーにも当てはまります。私は確信しています。神は私たちが楽しい時を過ごすことを望んでいてくださる、ということ。私は確信しています。すばらしい時間、すばらしい知らせ、すばらしい神を。」（『教会を必要としない人のための福音』より）「神のために自分（の愚かさ）を笑ってみせる」——印象深い言葉です。私たちは、自分を取り巻く厳しい状況や、罪を思う時に、笑ってみせることなど出来ないと考えます。それは神様に対して失礼だと思っからです。でも、ウィリモンは言います。この世において、笑ってられない状況がある中で、笑うこと、喜ぶことが、毎週日曜日の礼拝において許されているのです。なぜなら、地上での礼拝は、天上の礼拝と連なっているからです。天上の喜びを、今、私たちは地上において、前味として味わうことができます。「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」（ヨハネの黙示録21章4節）という神様の約束が成就した喜びの中に、あなたは既にあずかっている！だから笑おう！だから喜んで、勇気を持って生きていこう！と主は礼拝の度に励ましてくださるのです。

テキスト	創世記 1章1節～2章3節
子どもカテキズム	問12, 15, 37
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問1, 9～10 ウェストミンスター信仰告白 第4章

初めに天地万物をつくられた神の御業を私たちは「創造」と呼びます。「創造」という語は一般的にも「創造的(クリエイティブ)な仕事」などと用いられますが、教会では聖書に由来するキリスト教教理の術語です。ヘブライ語聖書の「創造する(バーラー)」という動詞の主語は神にしか用いられません。人間や何かモノを「創造する」ことはできないのです。

通常、創造は全知全能の父なる神の働きに帰されますが、そこをウェストミンスター信仰告白は慎重に父・子・聖霊の三位一体の神の働きであるとしています。御子なるキリストによる創造とはイメージが難しいかもしれません。しかし、「御子による創造」という教えは参照聖句にあるように新約聖書のヘブライ書1章2節やコロサイ書1章16節から与えられます。キリストによる創造の意義は、イエス・キリストが永遠の昔から神の子であったことを保証し、御子が父と同じ権威をもつ神であることを指し示すところにあります。御子による創造は父の創造と異なるわけではありません。また、聖霊による創造については創世記やヨブ記の参照聖句をご覧ください。要点は、創造は三位一体の神がそれぞれに関与しながら果たされた行為だ、ということです。

ウ告白は聖書の重要な教えである「言葉による創造」に触れていませんが、参照聖句をみればヨハネ福音書1章2節3節が挙げられています。この教理の重要性は、創造と救いとの関係にあります。初めにすべての存在と生命を創造した神の言葉が、キリスト・聖霊・聖書を通して、今も私たちの内に新しい命を造ります。

創造の目的は、神ご自身の栄光のためです。被造物の上に、神の永遠性、力、知恵、慈しみが現れる時、そこで神の栄光が知られます。「それは、極めて善いものだった」といわれるように、神が

「善いもの」を造ろうとされたということ以外に、私たちは創造の動機も目的も知ることはできません。そしてローマ書でパウロが言う通り、私たちは罪に捕われているために、神の創造の素晴らしさを神の栄光に帰することができず、それを感じ取ってもそのまま自然や人間を拝んでしまう性質をもっています。「何故、神様は世界を造ったの?」「何故、神様は私を造ったの?」という根本的な質問への答えは、神が善いものを造られたという他には説明することができません。

神によって創造されたのは「天地とその中に生きるもの」とですが、教理から学ぶ天地は「空と大地」ではなくて、見えるものの世界と見えないものの世界です。天使は見えないものの世界に属します。また、「万物」とはモノに限りません。ありとあらゆる存在のすべてが被造物です。ですから神に等しかったり、神を超える思想などありえません。

「無からの創造」はこれに関係しています。「無」とは何か、という禅問答とは別の関心です。私たちは神の創造以前に立ち入ることはできない、という創造者と被造物の間の断絶が、この「無」ということの中に現れています。神がすべての源であって、神が万物の創造者です。

すると、罪や悪、サタンもまた神の創造かという理屈が成り立ちますが、そうではなくて、神の創造は全くの「善き創造」です。創造とは与える行為です。神の創造に悪意は存在しません。罪は第一に人間の背きに原因があります。創造時の祝福を破壊したのは人間の責任です。私たちはそのような罪の悲惨の中にありながら、神が万物の創造者であり、その最初の祝福を取り去らないで救いの計画をもっておられると知ると、私たちにとって大きな慰めです。私たち自身も世界もともに「神のもの」と知ると、現代の世界にとっ

ても緊急の必要であるはずで、自分で確信するのと同時に、創造者である神を世に対して告白するのも私たちの大切な役目です。

人間の創造に関する聖書の教えについては、まず、神が人間を造られたのは他のすべての被造物が造られた後だ、ということが挙げられます。それは人間の創造が天地創造のクライマックスをなし、人間が生まれる前にそのすべての必要が整えられていたことを指します。厳密に言えば、聖書は人間の創造を必ずしも最後の段階としてはいません。創世記1章の記述によれば、神が6日目にお造りになったのは、陸の獣と人間、そして植物という順序になっています。また、2章の記述に従えば、まず人間が土から造られて、その後、彼のパートナーとして動物たちが造られます。ですから、「最後の創造」はその価値を表すものであって、人間が神のかたちを賦与されて、全被造物を治めるよう地上に「派遣される」ことへと結びつきます。人間が造られてようやく神の創造は完成し、被造物全体に神の祝福が満たされます。

創世記2章から読み始めると神が最初に造った人間はアダムのようですが、創造の秩序を語る1章では「男と女に創造された」とあります。ですから、男女の性別は創造に基礎付けられた基本単位で、三位一体の神が決して孤独には存在されないように、人間は決して一人孤独に造られたものではありません。人間は初めから社会性を持ち、人との交わりをもって地上に置かれました。この詳細は創世記2章に引き継がれて語られます。

聖書における「魂（ネフェシュ）」という用語は肉体と靈魂とを分離して考えるギリシャの人間観とは異なって、人の全人格を総合的に捉える言葉です。人間は塵から造られた肉体でのみ存在するのではなく、神が与えた精神性を豊かに備えています。肉体と精神という二つの側面から人間の全体を捉えるのが聖書の人間観であって、本来神の属性でしかない「不滅性」は、この精神においてのみ捉えられます。理性的で、不滅性を帯びた靈魂は、神の不滅性を捉えうる優れた精神、とし

てよいと思います。

人間の創造という教理において最も重要なのは「神のかたち」における創造という教理です。ここには解決の困難な問題があって、そもそも外形的な「かたち」を持たない神の「かたち」とは一体何かということ、それ故に、この教理には多大な議論が費やされています。ウ告白では、これをパウロの言葉遣いを用いて「知識と義と真のきよさ」という人間の内面性に当てはめています(コロサイ3:10, エフェソ4:24)。しかしパウロが述べる「知識と義と聖」はキリストに贖われて聖霊を宿すようになった「新しい人」の属性です。従って、「神のかたち」は本来創造の時点で人間に与えられていたものの、墮落によって失われてしまった真の人間性であるといっただけでしょう。そして神の子キリストにおいて私たちは「神のかたち」を知らされ、聖霊によってその真のかたちを回復させられます。墮落したとは言え、すべての人間は神の似姿をもつ故に、その命の尊厳は最高度に尊ばれます。これは聖書が教える倫理観の要になる教理として覚えたいところです。

パウロはローマ書2章14節以下で「心に記された神の律法」と人間の良心について述べていますが、これも「知識・義・聖」という神のかたちに含めて考えることができます。創造の時点で人間は、その心の律法に従う能力をもっていました。それは神が人間に与えた、意志の自由と関わります。人間は、自由な意志で神に従うことができると同時に、その自由を用いて神に背くこともできました。これは人間の創造についての神の特別なお考えと言わざるを得ません。さらに、神は人に心の律法ばかりではなく、外部に定めた掟をも与えました。「善悪の知識の木」から食べてはならない、という命令があり、この掟の下に人間の側からの積極的な服従が表示されていました。この秩序の下に、創造時の人間の幸福が示されています。ここには、本来あるべき人間の初めが描かれていると同時に、そこへと回復される終わりがあります。(牧野信成)

テキスト 創世記 1章1節～2章3節  
子どもカテキズム 問12, 15, 37

### 〔単元のねらい〕

善き創造はキリスト教的世界観の粋ですが、どのように子どもたちにこれを語り継ぐのが教会の課題です。進化論との対決でのみ創造を教えるのは聖書の啓示に対する理解を欠きます。創世記1章の記述を、神の喜びを感じ取りながら、一日一日ずつを絵本をめくるように語ることができれば素晴らしいと思います。大切なのは、創造という出来事から神の愛を信じることです。

## よい世界をつくったよい神さま

今から130億年程前に光の玉が爆発して宇宙が誕生したと言われます。ものすごく大きな電子望遠鏡が作られて、それで宇宙の広さを測るとそんなこともわかってくるのだそうです。不思議なことに聖書も宇宙の始まりには光があったと書いています。真っ暗闇の中に目も開けられない程の眩しい光が現れて、その光が爆発の力で広がって、たくさんの星が生まれました。

でも、聖書が書いていることはちょっと違っています。「初めに、神は天地を創造された」とあります。望遠鏡で宇宙を調べても、誰が光の玉を用意して、誰がそれを爆発させたのかはわかりません。実際にそれを見た人は誰もいませんから、コンピューターで計算して、宇宙が生まれたのがどれほど昔か計ってみただけです。ただ聖書には、神さまが天地を造ったと書いてあります。「天地」とは宇宙の全体のことです。

明るい太陽の光が差し込む中に、私たちが住んでいる美しい地球も生まれました。神さまはそこにたくさんの生命が宿ることができるように、一つ一つを準備してゆかれます。明るい昼の時間には、あとで植物や動物が太陽の光をいっぱい浴びて元気になることができるようにしました。夜の時間にはみんなが静かに眠ることができるように小さな月が暗闇を照らすようにしました。地球は空気に包まれて生き物が呼吸できるようになり、青く明るく輝く大空と、青く深く輝く海がわかれて、その海のなかに渴いた大地が造られました。

陸には草や木が生まれました。湿ったところにはコケが生まれました。草や木は種を飛ばしてどんどん仲間を増やして、広々とした草原や深い森になりました。中には美味しい実をつける木もありました。海辺のヤシの実には甘いジュースが密かに隠れていました。

こうして食べ物が十分できてから、神さまはその大空の中を自由に飛び回るように鳥を造りました。また青い海を自由に泳ぎ回ることができるように魚を造りました。もちろん、イルカもクジラも、イカやタコもいたはずです。陸にも色々な動物たちが造られました。今はもういなくなってしまうティラノザウルスやマンモスもいました。蛇やワニやゴキブリも元気に地上を這いずり回っていました。神さまはご自分のお造りになったすべての生き物にむかって、「命を生みなさい、増え広がちなさい」といって、そうすることができるように祝福を与えました。神さまの言ったことはすべてその通りになります。「光りあれ」といったらその通りになったように。すべてのものは神さまの言葉によってつくられます。

そしていよいよ最後に人間が造られました。神さまは人間を男と女にお造りになりました。人間もまた他の動物と同じように増え広がっていくために、そして、男と女が互いに助け合って生きていくために、神さまはそうしてくださいました。人間が最後に造られたのには特別な意味があります。神さまは人間をご自分に似せてお造りになり

ました。もちろん、神さまには体はありませんから、目に見えるかたちはもっていません。けれども、人間は神さまと似ていますから、神さまの言葉がわかります。神さまの心がわかります。それで、神さまに代わって大事な仕事をすることができます。その仕事とは、神さまのお造りになった大切な地球とその中で生きているすべての命を守ることです。

こうして最後に人間が造られて宇宙は完成しました。太陽の光を浴びて青く輝く地球と、その中にいっぱい満ちている生き物をご覧になって、神さまは喜んでこう言われました、「ほら見てご覧、なんて素晴らしいんだ」。創造の完成をお祝いで、神さまはその日をお休みにしました。

私たちが生きているのは、神さまがお造りになった素晴らしい世界です。それがどんなに美しくってどんなに不思議なものか、もしまだ気がついていなかったら、どうぞ見にってください。神さまが「見てご覧」と言っていますから。高い山に登れば、どこまでも続く山並みに夕陽に染まった雲がかぶさり、日が沈むにつれて反対側から明るい月が一番星を連れて上ってくるのに出会います。海に潜ってみるのもいいかもしれません。私には経験がありませんけれども。海の中で一番数が多い生き物はイカなんだそうです。普段は深いところにもぐっているのですが、ときどき上の方に浮かんで来て、ぼうっと光ります。そうすると、空から見ると暗い海がぼんやり光っているのがわかるのだといいます。もっと不思議なのはイカの眼です。体は単純そうに見えますが、イカの眼は人間に近いぐらい精巧にできているのだそうです。暗い海の中において体もふにゃふにゃで難しいことはできそうもないのに、何でそんなに眼が発達しているのかよくわからないと学者が言っています。神さまがお造りになった世界は不思議に満ちています。遠くに出かける必要もありません。道ばたに咲いている花を注意深く観察してみてください。また、草花に寄って来る虫をよく見てください。生きているのがとても不思議に思えて来ます

から。

でも、残念なことに私たち人間は、この素晴らしい世界を大切にしません。もっとお金が欲しいから、便利なくらしがしたいからといって、どんどん木を切り倒し、工場を造って空や海を汚します。鳥や動物たちは住むところが無くなって、数が減っていってしまいます。そうなれば、人間だって生きづらくなってしまふのに、それがわかっているのに、大切な地球を守ることができません。何故ならば、それは人間が、神さまに造られたことを忘れてしまったからです。人間が神さまに背いて世界も悪くなった、と聖書が教えてくれます。

たとえ人間がどんなに悪くなくても、私たちの住む地球が汚れてしまっても、神さまの造った素晴らしい世界は、まだ、生きています。神さまが世界に与えた祝福の力も、まだ、働いています。人間には、この大切な地球を守る仕事を与えられた、と言いました。その仕事も、まだ、終わってはいません。神さまは、罪を犯した私たちを見捨ててしまったわけではありません。だから、イエスさまが来て、私たちが神さまの恵みに気がつくように、十字架にかかって死んでくださったのです。そして復活して、神さまの力を教えてくださいました。神さまは、ご自分のお造りになったものすべてを、まだ、愛し続けておられます。

だから、私たちは神さまがお造りになったすべての良いものを大切にしたいと思います。自然を守るのも、人間を守るのも、神さまがお命じなったことです。それは、世界が神さまの祝福を受けて幸せになるためです。人間が特別なかたちをしていて、神さまの言葉と心がわかるようにされたのは、人間にしかできない大切な仕事があるからです。神さまは私たちに食べ物も着る物も住むところもすべてを与えてくださいますが、それで世界を壊していいとは言っておられません。みんなと一緒に生きて、神さまの素晴らしさをあらわすことができるように、自分自身のことも他の人のことも、鳥も魚も動物も、すべての命を大切にしたいと思います。(牧野信成)

---

[今週の暗唱聖句] 創世記 1章31節

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。

---



## 〈ねらい〉

宇宙、そして人間が住む地球とそこにあるすべてのものを「良いもの」としてお造りくださった神さまの愛を知り、喜びます。

## 〈お話〉

真っ暗で、まだ何も無い時、神さまは「光あれ」と言われました。すると、明るい、暖かい光が、誕生しました。このようにすべてのものは、神さまの言によって造られたのです。夜は、「早くおやすみなさい」と、小さな月の光が照らす静かな暗やみをおあたえくださいました。ぐっすり眠っている間に、子どもは毎日少しずつ体が大きくなります。

広い空、青い海、野原も山もお造りくださいました。そこで、ぼくたち・わたしたちは、走ったり、転がったり、飛んだり、元気に遊んでいますね。

草や木、きれいな花や、わたしたちの体に必要

な野菜や果物、おいしい空気も水も神さまは、ちゃんと用意してくださいました。

空を飛ぶ鳥、海の中を泳ぐ魚、地に住む動物……そしてそれらの生き物と、仲良く助け合って暮らすようにと、神さまは、人間をお造りになりました。

神さまが、お造りになったすべてのものを見る時、神さまがどれほど、ぼくたち・わたしたち人間のことを愛してくださっているかよくわかります。

## 〈暗唱聖句〉

「神はおつくりになったすべてのものをごらんになった」  
(創世記1:31)

## 〈さんび〉

『かみさまにかんしゃ』85番

(「こどもさんびか」日本基督教団出版局)

①「天地創造」に関する絵本(紙芝居)など見ながら〈お話〉をします。暗唱聖句を覚えます。

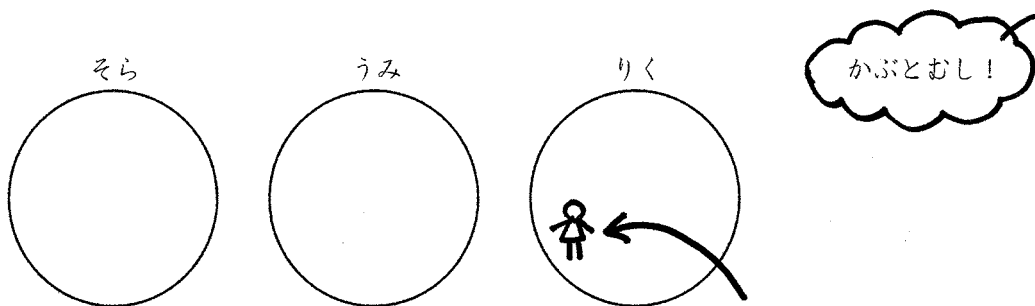
②ゲーム:「そら・うみ・りく」

・地面(床)に1~2mほどの円を3つかいて、それぞれを「そら」「うみ」「りく」とします。

(室内の場合は、ロープなどで輪を作って、床に置きます)

・子どもたちは円の外に立ち、教師が、鳥の名前(例:スズメ)を言ったら「そら」の円に入り、動物や植物の名前(例:ネコ・リンゴ)を言ったら「りく」の円に入り、魚の名前(例:クジラ)を言ったら「うみ」の円に入ります。

\*空・海・陸にすむ生き物と、人間が、仲良く助け合って暮らすように、神さまはすべての「良いもの」をぼくたち・わたしたちに、与えてくださったことを感謝します。



対話の手がかりとして……。

①なぜこの世界が存在し、その世界に私が存在するのか。そんなことを一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。特に、辛い出来事を経験したり、自分の将来について真剣に考え始めた時、どうしても自分の存在の意味を問わずにはおれないと思うのです。そのような時、聖書の最初に記されている天地創造の物語は、私たちに大切なことを教えてくれます。

②創世記の最初の部分に記されている「天地創造」の物語は、誤って読まれることがあります。それは、世界はどのような経緯で出来上がったのかということです。確かに宇宙や世界の成り立ちについて知ることは大変興味深いものがあります。でも残念ながら、聖書はそのような意図で、天地創造の物語を記してはいないということです。大事なのは、あなたが存在する意味を教えているということです。

③もし世界がよく分からない不思議な力によって誕生したのなら、そこに存在する私たちもよく分からないまま、ここにいてということになります。偶然に、たまたまここにいただけなのです。もしそうだとするならば、自分の人生に意義付けをするのは、あなた自身です。要するに、あなたの力や知恵によって、自分の人生を意味あるものにしなさいということになるのです。そしてそれができない人はダメな人間と見なされてしまうのです。あるいは、このように考える人もいるでしょう。自分はいてもいなくてもどっちでもよかったのだ。たまたまここに

いるだけなのだからと、空しい思いに囚われることもあるでしょう。

④でも聖書は語ります。この世界を造り、あなたに命を与えたのは神なのだ。あなたはたまたまそこにいるではありません。自分の力によって、自分の人生を築き上げていく必要ありません。大事なのは、「光あれ」とおっしゃった神の言葉に耳を傾けることです。そこで聞こえてくる言葉は「極めて良かった」と喜びと満足を表しておられる神の声です。あなたは、自分のことをどう思いますか。好きな部分もあれば、どうしても見られたくない嫌な部分を知っているかもしれません。自分が生きている意味すら見失うこともあるでしょう。でも、あなたがここにいてくれとも良かったといってくださる方が、最初からおられるのです。この喜びの音色があなたの人生の中で消えることなく鳴り響いています。

⑤たとえ、自分のことを心から愛することができなくても、あるいは、罪に苦しんでいたとしても、神様は、今、イエス・キリストの十字架をおして、あなたを見ていてくださいます。あなたは神に愛され、赦されている存在です。混沌とした闇の中に光を造り出してくださったように、あなたの中にある闇に神は必ず光を与えてくださいます。いや既にその光が与えられているのです。どうか、神様の言葉を聞き続けてください。神様のために、あなたが用いられることを祈り続けてください。神様は祈りに答えてくださり、具体的な道を示してくださるはずですよ。

テキスト 創世記 2章4～25節  
子どもカテキズム 問15  
参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問12

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

1章に続いて、第二の創造物語が展開される。2章からは、1章で神が最後にお造りになった人に焦点が当てられている。

その中心として、暗証聖句となっている7節を覚えたい。そこには、人が土の塵から造られたことが書いている。土（アダム）の塵から人（アダム）は造られた。人間は土の塵に過ぎない存在であることが書かれている。そして、人はただ神の命によって生きる存在であることがこの創造物語で明らかにされている。

私たち人間が塵にすぎない者であることは、詩編の中でも歌われてきた信仰である。「主はわたしをどのように造るべきか知っておられた。わたしたちが塵にすぎないことを、御心に留めておられる」（詩編103編14節）。そのような塵に過ぎない自分を知る中で、103編では造り主である主がほめたたえられている。

教会学校に来る子どもの時から、自分自身を低く小さく見ることは難しいことのように見える。ただ、やはり子どもたちの置かれている状況も過酷な面があることに違いはないのではないか。自分の小ささや貧しさ、誇るべきところのない自分を知らされることもあるのではないか。自分が塵に等しいような者であるとの現実に向き合わされることも、子どもながらにあるだろう。子どもたちと共に、人はただ神によってこそ生きる者とされることを覚えたい。

人間は、「創造の冠」と言われるように神によって特別に造られた存在である。1:27には人が神にかたどって創造されたことが記されている。塵で造られたとはいえ、人には他の被造物とは異なり、特別な神からの配慮が与えられる。2章を見ると、人は特別にエデンの園に置かれる。さらに、

主なる神は人の助け手として女を造り、お与えになる。

この2章には、エデンの園での具体的な生活が明らかにされているのではない。ただ2章を見る限り、エデンは非常に豊かで、塵から造られた人間が神の命に生かされるにふさわしい場所であることがわかる。そこには、見ばえがよく、食べるに適するあらゆる木があった（9節）。また、園の中央には、死と関係のない命の木も生えていた。また、そこには園を潤す非常に豊かな水の流れもあった。人にはそこを耕し、守る務めが与えられる。これは現在の労働とは異なり、ただ喜びに満ちた、日毎に主をほめ称える務めであったはずである。エデンの園を耕し守ること、これは人にとってただただ喜びであっただろう。

さらに、人には最良の助け手である女が与えられる。それは、父母との関係にもまさる深い結びつきである（24節）。男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人は、「ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉」と助けが与えられた喜びの声を上げる。この2章を見ると、主なる神は、人のために全ての命の喜びを備えられていることが分かる。

しかし、エデンの園の命の喜びも長く続くものではなかった。9節では「善悪の知識の木」が命の木と共に園の中央にあったことが記され、17節ではそれを食べると必ず死ぬことが強調されている。また25節では、裸であったことを二人とも恥じなかったが、3章では恥じるようになる。このように、やがて3章で墮落に至り、命の喜びから罪の嘆きと悲しみに至り、エデンを追放されるに至ることへの伏線が2章にはある。2章を見る時に、3章とのつながりを見てとることができ

る。

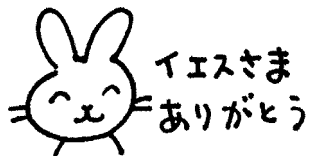
3章の墮落とのつながりの中で2章を見る時に思うことは、子どもたちもまた、この罪の嘆きと悲しみの悲惨な現実の中に置かれていることである。子どもたちもそのような現実と無関係ではない。しかし、その中で、神にかたどって造られた人間は、2章にあるような神の命の喜びと守りにこそ生きる者であることを覚えたい。

神は、墮落した世界をそのまま見捨てられない。神は、この罪と悲惨に満ちた世界を、完成に向けて今も導かれる。ヨハネの黙示録には、完成された新しい天と新しい地の幻が記されている。そこには、「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」(21:4)。また、新しい都には、命の

木が豊かに実を結んでいる(22:2)。そして、その都の中には命の水の川が豊かに流れ、都の中心には神と小羊の玉座がある(22:1)。

キリストの命に生きる恵みが与えられている。それは、人が再び、この2章に記されている創造の命の喜びに生きる望みが与えられているとも言えるだろう。悲惨な罪による死の現実も、キリストの贖いによって、創造の回復・完成へと導かれる。

子どもたちにとっての一番の幸いは、この神の命に生きること、キリストの命に生きることである。この命の恵みに止まることである。主が差し出してくださっている命を、子どもたちが自ら受け取って生きることを願いたい。(宮崎契一)



テキスト 創世記 2章4～25節  
子どもカテキズム 問15

### 〔単元のねらい〕

暗証聖句である2章7節を中心に取り上げたい。テキストを通して、神様の豊かな命に生かされるところに人の生きる幸いがあることを覚えたい。神の豊かな命に生かされる歩みは、いつも自分は塵に等しい者であることを覚えながらのものである。子どもたちと共に、心から主に依り頼む歩みへと導かれたい。そこに、私たちが神の命に生かされる歩みがある。

## 神さまの命に生きる

先週に引き続いて、神様が天と地の全てのものをお造りになった話を見ています。神様は、ご自分の力ある御手によって、私たち人間を含めて全てのものをお造りになられました。神様は私たちを、神様と関係なく生きようとお造りになったわけではありません。むしろ、神様と深くつながって生きようとお造りくださいました。そして、その神様とのつながりに生きることが、みんなにとっての一番の幸せであるということをお今日は覚えたいと思います。

今日のところを見ると、神様は土の塵で人を造り、その鼻に命の息を吹き入れられて、人は生きる者になりました。こういう不思議なことが書いてあります。みんなは、このことを言われてもこれは一体どういうことなのかと難しく思うかもしれません。

でも、聖書を見てみると、そこには私たち人間が、神様の前に本当に塵のようで何者でもないこと、また草や野の花のように、枯れたりしぼんだりするような小さな存在であることが書いてあります。

みんなも、毎日の生活の中でそういう自分を覚えることがあるのではないのでしょうか？例えば、家でお母さんやお父さんと一緒に過ごしている時でも、学校で友達と一緒にいる時でも、自分は駄目な自分だなあ、本当にどうしようもない自分だなあ、と思わされることがあるのではないのでしょうか？

私も、自分が子どもの頃は気がつきませんでした。今大人になって思い出してみると、小さい子どもの時にも本当に神さまや周りの人たちに罪を犯しながら、歩みをしていた自分のことを思い出します。

みんなも多分、神様にあやまりたいことや、赦してほしいことを抱えながら、毎日の生活をしているのだと思います。私たちは本当に神様の前に小さな者、塵に過ぎないような者です。

ただ、そのように私たちが、神様の前に限りなく小さな自分であり罪人であることを教えられる時、私たちは心から神様を求め、神様に依り頼んで生きることへと導かれます。神様へ導かれるところに、みんなや先生たちにとっての、生きることの幸いがあります。塵に過ぎない人も、神の命によってこそ生きる者にされるのです。

神様は、特別にお造りになったご自分の愛する人間を、神様の命に生きる素晴らしい場所に置いてくださいました。エデンの園という場所です。そこは、全てが満たされた場所、神様の命の恵みが豊かに溢れている素晴らしい場所でした。食べるのにおいしそうな実を付けたあらゆる木が、園の中にはありました。また、そこは本当に豊かな水の流れがありました。エデンは、本当に私たち人間が心から喜ぶことができる、神様の命に溢れた素晴らしい場所だったのです。

さらに、神様は「人が独りでいるのは良くない」と言われます。みんなもたった一人で生きていく

ことはできないと思います。神様は、一人であったこの人のために一番素晴らしい助け手である女を造り、与えてくださいました。

男性と女性が結婚によって結ばれることは、人間同士の結びつきでは一番強いものです。それは、みんなの友達との関係はもちろん、お父さんお母さんとの関係よりも強いものです。この助け手が与えられた男は、自分に一番良い助け手が与えられたことをとても喜びました。エデンの園での生活は本当に神様の命の恵みに溢れた素晴らしいものだったのです。

けれども、悲しいことに、この幸せは長続きしません。やがて、男と女は神様の言葉に背くことになります。そして、2人はエデンの園から追い出されることになります。

今、みんなが生きている世界も、本当に神様に背いてその言葉に従わない罪の現実でいっぱいの世界です。世界には、人間同士の争いや戦いがいつもあります。それが無くなることはありません。また、人と人が憎しみ合ったり、傷つけ合ったり、人の命を奪ってしまうこともよくニュースで見るとも思います。

みんなの学校での生活や、家での生活の中でもそういう厳しくて悲しい罪の現実はあるのだと思います。友達との関係は楽しいものだけど、難しさもあります。喧嘩して憎み合ったり、互いに傷

つけ合ってしまうことさえあるかもしれません。また、お父さんやお母さんとの関係も大切なものですが、いつも完璧に上手くいっている、というものでもないと思います。親との関係でも難しさはあります。

それ以外のことで、自分が神様の前に駄目な自分であること、自分は神様に謝って赦してもらわなければいけない自分であることを思い知らされることもあるのではないのでしょうか？私たちは、神様に赦されて、神様が与えてくださっている豊かな命に生きることを必要としています。

神様は、命の恵みから離れてしまった人間を、そのまま放ったらかしにはなさいませんでした。神様は、罪人が命に生きようと、旧約聖書で繰り返しイスラエルに語られ、彼らを導き、新約聖書では御子であるイエス・キリストを救い主として与えてくださいました。

キリストは私たち塵に過ぎない罪人のために、死んで甦ってください、私たちがこのキリストの命に生きようと、命の招きを与えてくださったのです。

イエス・キリストを自分にとっての救いだと信じる時に、私たちは神様の豊かな命に生かされています。どうか、みんながこのイエス様を心から受け入れて、神様が与えてくださっている命の恵みを共に喜びたいと思います。 (宮崎契一)

---

[今週の暗唱聖句] 創世記 2章7節

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。  
人はこうして生きる者となった。

---



## 〈ねらい〉

ぼくたちわたしたちは、神さまに造っていただいた「神の作品」であることを知り、喜び、感謝します。

## 〈お話〉

9月に入り、暑い夏から、秋になりました。

時々涼しい風も吹くようになって、コスモスの花も咲き始めました。夜には、コオロギの大合唱が聞こえるようになりましたね。ブドウや、ナシなど、おいしいくだものもいっぱいです。神さまがお造りになったすてきなもので世界は満ちています。神さまは、言によってお造りになった世界をごらんになって「たいへん良い」と満足されました。

神さまのお造りになったものの中で、一番の特

別は「人間」でした。神さまは、「人間」の「その鼻に命の息を吹き入れられた」からです。それは、人間が神さまに、お話し（お祈り）したり、感謝することができるためです。

どんなにかしい動物（チンパンジーなど）でも、神さまにお祈りしたり、礼拝したりすることはできません。神さまは「人間」を特別に造ってくださったからです。

神さまを礼拝すること、家族やお友だちを愛するために、ぼくたちわたしたちをお造りくださいました。ぼくたちわたしたちは、神さまに造っていただいた、神さまの大切な「神の作品」です。

## 〈暗唱聖句〉

「その鼻に命の息を吹き入れられた」

（創世記2:7）

①子どもたちに身近な自然の移り変わり、身近な動物について話しをしながら「たいへん良かった」と創造された他の生き物と、人間のちがいに気づくようにします。

②工作：「息を吹き入れられたわたしたち」

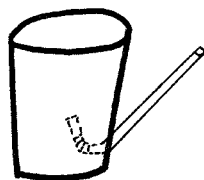
## 〈材料〉

・紙コップ、ビニール袋、先の曲がるストロー、セロハンテープ、マジックペン

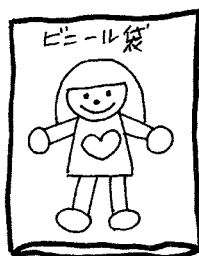
## 〈作り方〉

- ①紙コップの下あたりに、ストローがちょうど入るくらいの穴を開け、曲がるストローの先端を差し込む。
- ②ビニール袋に自分の顔（体）をマジックペンで描く。
- ③ビニール袋の口をコップの中のストローの先にかぶせてセロハンテープで巻いて留める。
- ④ストローに息を吹き込むと、ビニール袋がふくらんで、描いた自分の顔が出てくる。

①



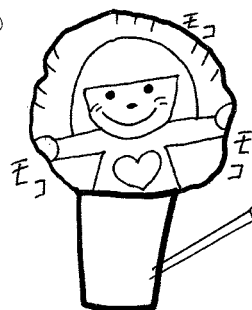
②



③



④



対話の手がかりとして……。

- ①天地を創造なさった神は、最後に人間をお造りになりました。「最後に」ということは、決して後回しされたということではありません。私たち人間が生きていくうえで必要なすべてを神様はまず備えてくださったのです。準備万端の舞台の上に、神様はあなたを立たせてくださったのです。確かに、私たちは何も無い砂漠のような場所に放り出されたかのような経験をすることがあるでしょう。でも神様はあなたがあなたらしく生きることができるようになるためにすべてを備えてくださるのです。
- ②あなたが「あなたらしく生きる」とはどういうことでしょうか。自分の夢に向かって走り、ゴールテープを切ることでしょうか。自己実現をすることでしょうか。確かにそういう生き方は格好いいかもしれませんが、でも、それ以上にあなたらしい生き方があるのだと聖書は初めから告げています。人間は神に「かたどって」（創世記1:26～27）に造られたと聖書は語ります。少し難しい言葉ですが、要するに、私たちは、神様と一緒にお付き合いをして生きるために造られたということです。皆さんはそれぞれに夢があり、目標があるかもしれませんが、でもそれらを目指す歩みの根底に、神様と共に歩む生き方があることを忘れないでください。具体的には祈ること、御言葉に聞くこと、礼拝ささげることなどです。そういう生き方を重ねていけば、思いもしなかった豊かな祝福にあずかることができるでしょう。それは自分が描いていた夢を実現することがたとえできなくても、なおそこで「私は幸いだ」と言える人生です。
- ③「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。

人はこうして生きる者となった」（7節）人間は「塵」から造られました。そのことを実感するのはどういう時でしょうか。色々あると思いますが、その一つは、葬儀の時かもしれません。かつては元気だったあの人が、地上の生涯を終えて、火葬され、埋骨されていきます。私たちの人生で深い悲しみや空しさを覚える瞬間です。でも、聖書は、人間は神様から「命の息」を吹き込まれてはじめて生きるものになったと語ります。ここに深い慰めを覚えます。「息」——それは、目には見えませんが、人間が生きていく上で、なくてはならないものです。息（呼吸）をしないと、私たちは生きていくことはできません。また、試練や逆境の中にあるとき、心臓は動いていても、胸を締め付けられるような思いになります。息苦しくて、生きている心地がしない時があります。そのような時には、私は何によって生かされているのか。そのことに思いを向けたいのです。神が吹き込んでくださる「命の息」を呼吸するとき、あらゆる空しさを乗り越えて生きられる喜びがあることを告げています。

- ④イエス様の弟子たちは、主が十字架にかけられる前に、逃げ出してしまいました。そして主がお甦りになった知らせを聞いても、恐ろしくて部屋に閉じこもっていたのです。主の弟子として、本来果たすべき使命を見失っていたのです。でも、そこに復活の主が来てくださいました。そして彼らを裁くわけでもなく、平和を告げてくださいました。そして「息」をかけてくださったのです（ヨハネ20:19～23）。罪に陥り、神様から与えられた命を十分に生きられなかった弟子たちは、復活の主の息吹（聖霊）を受けて、新しい人間へと生まれ変わりました。もう死を恐れや空しさに捕らわれることなく、主が与えてくださった命を生き抜いたのです。



テキスト 創世記 3章1～24節  
 子どもカテキズム 問16～21  
 参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問12～20

### 〈聖書テキストの解説と黙想〉

#### 【KEY1 聖書本文を語る】

[STEP1] 聖書本文を読む。

創世記3章1～24節をゆっくり声を出して、数回、読む。

[STEP2] この箇所テーマは何か？

最初の人間の墮罪と、主の裁きの宣告、そして同時に与えられる救済の予兆。

[STEP3] それをどのように展開しているか？

(救済史において重要な箇所であるため、他の箇所との関係を示しながら、やや詳しく記す)。

神は人間をご自身に似せて (1:27)、極めて良いものとして (1:31) 創造された。そして、人をエデンの園に住まわせて、そこを耕し、守るようになされ (2:15)、「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と命じられた (2:16,17)。

しかし、蛇の誘惑を受けた女は、主の命令に背いて、その木から取って食べ、一緒にいた男も食べた。これが、人間の最初の罪であり、罪が世に入った出来事である (ローマ5:12)。その結果、互いに恥ずかしくなかった裸 (2:25) は、隠さなければならぬほど恥ずべきものとなり、人は覆いなしに神の御前にも立つことができず恥ずべき存在となった。

神は、蛇と女とアダム (人) に、それぞれ裁きを宣告された。女には産みの苦しみが大きくなること、人間だけでなく他の被造物も呪われたものとなり (参照：ローマ8:19～22)、人が生きるための労働は苦しみとなったこと、そして、肉体に死がもたらされることが、宣告された。

しかし、主は、蛇への宣告の中に、女の子孫が蛇の頭を砕くという約束 (原福音) を与えられた。これは、キリストによる神の国において実現する (参照：ローマ16:20、黙示録20:2,10)。また、

主は裸を覆うために、「アダムと女に皮の衣を作って着せられた」。そのために動物の命が初めて犠牲とされた。そこには、キリストが犠牲となり、罪人の恥を覆われたことが象徴されているかもしれない (参照：ガラテヤ3:27)。

アダムは、エデンの園から追放され、命の木に至る道はふさがれた。しかし主の民は、キリストが再び来られる終わりの日に、豊かに実る「命の木」が川の両岸にある新しい都エルサレムに入れられることになる (黙示録22:2)。

#### 【KEY2 神の福音を語る】

[STEP1] この箇所神はご自身について何を表されたか？

神は、ご自分の命令に背いた人間と、それをそのかした蛇に裁きを宣告された。

神は、ご自分の命令に背いた人間を、なおも憐れみ、女の子孫によるサタンへの勝利を示し、裸の恥を覆うための皮の衣をも着せられた。

神は、人をエデンの園から追放し、終わりの日まで、命の木に近づくことができないようにされた。

[STEP2] 前後の章は、神について何と言っているか？

神は、世界を極めて良いものとして創造し (1:31)、人間をご自身に似せて創造された (1:27)。そして、人間に善悪の知識の木からは取って食べてはならないことを命じられた (2:17)。

その命令に背き、罪に生きようになった人間は、さらに4章において、神のかたちである人を殺すほどに罪をエスカレートさせる (4:8)。それでもなお、神は人を憐れまれる (4:15)。

[STEP3] 聖書全体を通しての神の働きに、この箇所はどのように関係しているか？

神は世界と人間を極めて良いものとして創造された。しかし、この箇所では、神に背いて、神

との交わりを失い、極めて良い状態を破壊してしまっただ。罪は世に入り込み、義人は一人もいなくなった。しかし、神は、それでもなお、人を憐れんでくださり、サタンに勝利する救い主を与えることを示してくださいました。この方は、私たちの罪の犠牲として、十字架の上に屠られ、私たちの罪を覆い、私たちが新しい人として生きられるようにしてください。この方が再び来られる時には、神の国が完成し、人は再び栄光の主と共に、命の木の実る都に住む。

### 【KEY3 子どもたちの信仰と生活のために語る】

[STEP1] この箇所が登場する当時の人びとの必要は何だったか？

主は、彼らが従うべき命令を与えられた。それは、難しいものではなく、従う意志があれば、従い続けることのできるものだった。しかし、彼らは、その命令に背いてしまい、かえって、裸の恥に恐れを抱き、裁きを宣告され、神との交わりが与えられていた園から追放されるに至った。

[STEP2] 私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

子どもたちも、神が命じられることに従うことができない。ケンカの原因は、自己中心的にふる

まい、友達や兄弟姉妹のことを愛し、赦すことができなかったことである場合が多い。いじめなどの深刻なケースでも、主の命令に従うことのできない現実の自分に気づかされる。

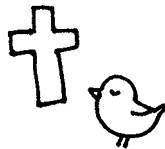
本来ならば、主の裁きを宣告され、主との交わりから追放されなければならない存在であることに気づかされる。

[STEP3] この聖書箇所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

しかし、主は、それでもなお、私たちに憐れんでくださる。主のご命令に、くりかえし背いてしまう私たちのために、主は独り子をお与えくださった。私たちを落とし入れて、主に背かせるサタンを、その方は滅ぼしてください。私たちが受けるべき罰を一身に引き受けてくださり、十字架で犠牲となってくださった。その方のゆえに、私たちの恥は覆われ、主との和解に入れられる。その方が再び来てくださるときには、エデンの園にあった「命の木」が実を結ぶ新しい都エルサレムで、神と小羊と共に住まわせてくださる。

(テモテ指導者訓練「聖書的説教」モジュールを参考に項目を立てました)。

(大西良嗣)



テキスト 創世記 3章1～24節  
子どもカテキズム 問16～21

### 〔単元のねらい〕

はじめの人間が罪を犯し、罪が世に入ったことが取り上げられる。この後に続く聖書の大部分は、この問題を解決するための歴史であると言える。「救済史」という名称も、罪に陥って、主の裁きを受け、主との交わりから追放された人間を救済して下さる主の歴史を意味する。その意味で、重要な歴史の転換点であると同時に、私たち人間の問題の根源を取り扱う場面でもある。そして、私たちが陥ってしまった罪の現実から、救い出してくださった主の憐れみの始まりでもある。子どもたちと共に、神に背いてしまう現実を認め、それでもなお救いを与えてくださった主に心からの感謝を表したい。

## 食べるなと命じた木から食べたのが!?

神様は、私たちが住んでいる、この世界のすべてを造られました。そして、私たち人間をも造ってくださいました。

最初の人間は、だれだった？ 先週のお話で聞いたね？ そう、アダムと、エバです。

神様は、アダムに、1つだけ大事な命令をお与えになりました。

「エデンの園にあるどの木からも取って食べていいよ。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはいけないよ。それを食べると、必ず死んでしまうから」。

どうだろう？ これは、難しい命令かな？ 「食べるな」と言われると、食べたくなくなってきちゃうかな？ でも、神様の言うことだから、きちんと守ろうと思えば、守ることができる命令だね。

ある日、エバのところに、蛇が来て、話しかけました。「神様は、エデンの園のどの木からも食べてはいけないなんて、そんなひどいことを言ったの？」

「いえいえ、そんなことないわ。園の木から自由に食べていいんです。だけど、園の真ん中に生えている善悪の知識の木の実だけは、食べてはいけないんです。触ってもいけないんです。死んではいけないからと、神様は言われました」。

触ってもいけないなんて、神様は言われていな

いけどねえ。

蛇は、言いました。

「そんなことないよ。死んだりなんかするもんか。それを食べると、目が開けて、神様のように、何が善いことで、何が悪いことかを知ることができるようになるんだ。神様は、そうなることを知っているから、あなたたちに食べさせないんだ」。

エバは、蛇の言葉を聞いて、善悪の知識の木の実を見てみました。とてもおいしそうです。なんだか、食べたなら賢くなりそうな気がします。エバは、手を伸ばして、実を取って食べてしまいました。そして、一緒にいたアダムにも渡しました。アダムも食べました。

食べてどうなった？ すぐには死ななかつた。だけど、自分たちは「裸だ！」ということに気がつきました。今まで、裸でも、ぜんぜん恥ずかしくなかつたのに、急に怖くなって、自分の体が見えないように隠し始めました。とりあえず、いちじくの葉っぱで、腰の周りを隠しました。

「風の吹くころ」たぶん、夕方かな？ 神様が園の中を歩いて来られる音が聞こえました。神様が歩く音なんて、私たちは聞いたことがないね。でも、エデンの園ではそんなふうに、神様と人間が近くにいたんだね。アダムとエバは、木の間に隠れました。かくれんぼをしたわけじゃないよ。「神様に見られたくない」って、おびえて隠れました。

「どこにいるのか？」と神様が呼ばれました。

「あなたの足音が近づいてきたので、怖くなって隠れました。だって、わたしは裸なんです」。アダムが答えました。

「誰が、お前が裸であることを教えたのか？ さては、食べてはいけないと命じた木から取って食べたのか？」

そう問われる神様に、アダムは何と答えたでしょうか？「はい、そうです。ごめんなさい」と言った？ そうじゃない。

「エバが私にくれたので、食べました」。どこかで聞いた感じだね。「ボクが悪いんじゃないよ。何々ちゃんが悪いんだよ」なんていう具合に、みんなも言っているね。アダムは、神様のご命令に背いて、善悪の知識の木から取って食べた。そうすると、人間は、どんどん罪を犯すようになっていくんだね。

神様はエバに言いました。「何ていうことをしたのか！」エバは、何と答えた？「蛇が悪いんです。蛇がだましたから、食べてしまいました」。エバも、やっぱり、「自分のせいじゃないよ、蛇が悪いんだよ」と言いました。みんなも、「よく自分が言っていることと同じだなあ」と思ったかもしれないね。最初に、アダムとエバが罪を犯してから、罪が世界に入ってきました。私たちだけでなく、だれもが、同じように罪人になってしまいました。

神様は、蛇に、罰を言い渡されます。「お前は、呪われるものとなった。お前は、生涯這い回る。やがてエバの子孫がお前の頭を砕く」。

蛇がしたことというのは、人間を神様に背かせ、神様から引き離すことです。それは、サタンの働きです。エバの子孫として生まれるお方が、蛇(サタン)の頭を砕いて滅ぼす時が来る。つまり、イエス様がサタンに勝利して、私たちを勝利の列に加えてくださるという約束を、神様が与えてくださったのです。

エバには、赤ちゃんを産むときの苦しみが大きくなるのが告げられました。みんなのお母さんも、本当に苦しい思いをして、みんなのことを産

んだと思います。

アダムには、土が呪われたので、野菜を育てようとしても、とても苦勞することになると告げられました。食べ物を手に入れるために、苦勞するようになる。みんなのお父さんも、とても苦勞して働いて、みんなのために食べ物を買うお金を稼いでいると思います。

そして、やがて、土に返ることが告げられます。つまり、死ぬということです。人間は、だれもがやがて死ぬものとなりました。人間は、そうやって、滅んでいくものとなりました。

私たちも、アダムとエバと同じように、悪いことは人のせいにして、いつも罪を犯しています。ですから、私たちも、死んで、滅んでいくべきものなのです。

そのように言い渡されて、アダムとエバは、エデンの園から追放されます。神様と一緒に過ごすことができなくなりました。

けれども、神様は、裸であったアダムとエバのために、皮の衣を作って着せてくださいました。これで、恥ずかしい思いもせず、神様や人びとの前に立つことができます。神様は、アダムとエバがご自分のことを裏切ったけれど、それでも、愛して、憐れんでくださるお方なんだね。

エデンの園の真ん中には、善悪の知識の木のほか、命の木がありました。アダムとエバの罪によって、人は、その命の木に近づくことができなくされています。けれども、イエス様が再び来られる時には、命の木が植わっている、新しい都エルサレムに私たちも招きいれられます。そこには、神様とイエス様がいらっしゃって、かつてエデンの園で人と一緒に過ごしてくださったのと同じように、私たちと一緒に過ごして下さいます。

本来なら、罪のために滅びなければならなかった私たちです。けれども、神様は、イエス様という救い主を与えてくださって、私たちの罰を受けさせ、私たちが神様と永遠に一緒に過ごすことができるようにしてくださったのです。この素晴らしい恵みを感謝しましょう。(大西良嗣)

---

[今週の暗唱聖句]

創世記 3章15節

彼はお前の頭を砕き お前は彼のかかどを砕く。

---

## 〈ねらい〉

神さまのこぼれを守ることができないわたし。  
神さまから、かくれようとするわたし。

それでもなお救いをあたえてくださる神さまに、くいあらためと感謝の祈りをささげます。

## 〈お話〉

きれいな花がたくさん咲いて、おいしい果物もいっぱいになっています。たくさんの鳥や動物もうれしそうに、なかよく暮らしています。みなさんは、どんな果物が好きですか？

アダムさんも、エバさんもおいしい果物が大好きでした。バナナ、オレンジ、ぶどう、もも、なし、いちご……食べたい時に、食べたいだけ、なかよく食べていました。鳥も動物も、好きな果物を分け合って、なかよく食べていました。

神さまは、「ここにある果物は、どれでも好きなだけ取って食べなさい。でも、あの真ん中にある木の果物だけはけって食べてはいけません。死んでしまうから」と言いました。

ある日、エバさんのところへ、へびがやって来

ました。「あの真ん中にある木の果物を食べてごらん」とささやきました。エバさんには、とてもおいしそうに見えました。エバさんは神さまとの約束をすっかり忘れてしまって、へびの言うとおりに食べてしまいました。アダムさんも食べてしまいました。アダムさんもエバさんも、神さまのおこぼれより、へびのこぼれを信じてしまったのです。

さあ、たいへん。神さまの歩く音が聞こえてくるとアダムさんもエバさんもこわくなって、木のかげにかくれました。人間に「罪」と「死」が入ってしまいました。

## 〈暗唱聖句〉

「主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか』」  
(創世記3:9)

## 〈さんび〉

『字のない本のうた』61番

(「ふくいん子どもさんびか」いのちのこぼれ社)

①サタンがへびのすがたをして現われたこと、サタンは人間を神さまから引き離そうとするものであることを話します。

②工作：「4つのリング」

## 〈材料〉

・色画用紙（黒・赤・白・黄・茶）

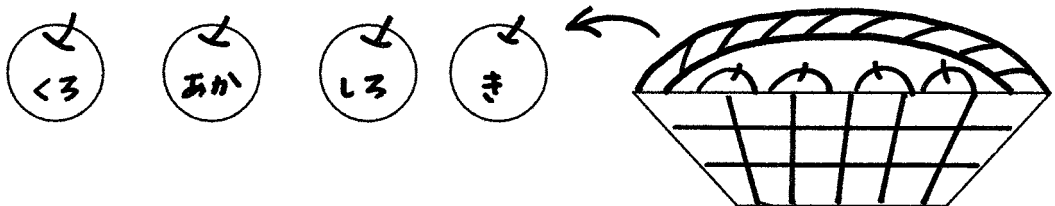
## 〈作り方〉

①茶色の色画用紙で、中に入れられるカゴを作る。

②子どもの手のひらくらいの大きさの丸いリングを、黒・赤・白・黄色と5つ切り抜いて作る。

\*『字のない本のうた』を賛美しながら、かごの中のリングを一つずつ取り出します。

「(黒) 罪によごれ くらい心も (赤) 主イエスさまの 血で洗えば (白) 白い雪のようにきれいになり (黄) 輝く天の国へ行ける」



対話の手掛かりとして……。

①蛇はイブをどのようにそそのかしたのでしょうか。それは神のように賢くなれるということでした。「あなたは神になれる」という言葉に、アダムとイブだけではなく、多くの人間が心を惹かれるのです。そして、人が神になりたいと願うとき、その心の中にあるのは、自分の人生を、あるいはこの世界を自分の思う通りに動かしてみたいということです。誰に強いられることもなく思いのままに自由に生きられる。何の苦しみの悩みもなく生きられる。そういう生き方を手にすることができたのならばどんなに素晴らしいことかと思うのです。

②この実を食べたら、素晴らしい人生が待っていると思って、禁じられた実を口にしました。でもその結果どうだったでしょう。サタンの言うとおり、神になれたのでしょうか。そうではありませんでした。そこに待っていたのは、自分たちが裸であるという事実でした。だから恥ずかしくなって、葉で自分たちの体を覆いました。神様の言葉を無視して、自分の欲望を優先させる時、そこに待っているのは、恥ずかしさであり、空しさです。裸であること、ありのままであることは恥ずかしさになってしまいました。でも本来人間はそういうものなののでしょうか。自分の存在を飾ったり、偽ったりしないと、あなたはあなたとして立つことができないのだ。何の価値もないのだと聖書は教えるのでしょうか。決してそうではありません。どれだけ、周りの人たちに様々な面において弱さがあったとしても、神様はありのままのあなたを愛して下さいます。誰が何と言おうと「わたしはあなたを愛している」これが神様のお心です。でも人はその神様の言葉を自ら捨てたのです。

③この墮落物語を読むとき、毎回のように出る疑問があります。なぜ神様は、アダムとイブが罪を犯さないように造らなかったのか。なぜ禁じられた実を口にしようとしたときに、それはいけないことだとおっしゃらなかったのか。人間が罪に陥ったのは、神様あなたが責任をもってお造りになった人間をちゃんと支えておられないからではないですか、と。でも神様は、私たちに「自由」をお与えになりました。神に従う自由と従わない自由です。もちろん神様の思いは、わたしと一緒に歩んでほしいという思いです。でも、神様に従うか従わないか、どちらを選ぶか。それはあなた自身の問題でもあるのです。親や教会の先生から言われて、嫌々することではありません。でも、一度ぜひ牧師や教会学校の先生たちに、神様に従ってよかったと思えたことを色々尋ねてみてください。

④さて、神の命令に背いたアダムとイブに対して神様はどのような行動を起こされたのでしょうか。8節を見ると、「あなたはどこにいるのか」と声を掛けられました。神様はあなたを探しておられるのです。罪の中にある人間を捜しておられるのです。それは見つけ出して、懲らしめるためでしょうか。そうではありません。もう一度、わたしのもとに立ち帰って、神様の眼差しの中で、あなた自身の素晴らしさを見出してほしいと願っているのです。主イエスもまた、あなたを捜し続ける神のお姿を譬え話の中でなさったことがありました。(ルカ15:4~7) 罪を犯した時、自分を見失った時、神はあなたに声をかけてくださいます。どうかその声を聞き逃さないでください。罪を犯した時、神の存在が遠くに感じることもあるかもしれませんが、しかし神の御声は遠くないのです。むしろ近いのです。そして、主イエスはあなたが神様のもとに立ち帰る道を、十字架をもって開いて下さっているのです。

# 2014年10～12月カリキュラム (第55号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
10月5日	アブラハムの召命	—	—
		創世記12:1～9	詩編37:5
自分たちも、アブラハムを通し神の選びと召命にあずかっていることを悟らせる			
12日	アブラハムへの約束	問30, 31	ウ告白7, 11, 14章、ウ小20等
		創世記15:1～21	創世記15:6
アブラハムへの約束がキリストによって私たちにも及んでいる事感謝しよう			
19日	イサクの奉献	問13	ウ小11、ハイデ26, 27, 28
		創世記22:1～19	創世記22:14
アブラハムの信仰を導かれた神の恵みを語り、感謝と信仰に招こう			
26日	エジプトに売られるヨセフ	問13	ハイデ27, 28、ウ小11、ウ大18
		創世記37:12～36	コリント一10:13b
ヨセフ物語を通して、神の歴史支配を確信するしたたかな摂理の信仰へと導こう			
11月2日	主が共におられる幸い	問11, 13, 14	ハイデ1、終末の希望の宣言
		創世記39～41章	創世記39:2
主が共にいてくださることで安心して生きて行ける、救いの恵みを感謝しよう			
9日	悪を善に造りかえる主	問13	—
		創世記45章、50章	ローマ8:28
いかなる悪さえ神の善へと変える主を信じ、歴史形成の主体者として生きよう			
16日	神の人モーセ	問34, 65	—
		出エジ2:1, 10, 3:1～10	出エジプト3:12
契約に真実な神を仰ぎ、神に応答して教会共同体形成のために生きよう			
23日	主の過ぎ越し	問13, 24	—
		出エジプト12:21～27	出エジプト12:26～27
贖いのみわざによって罪赦され、神の民とされた恵みを喜ぼう			
30日 待降節	出エジプト	8, 11, 13, 41, 66	ウ大101, 121
		出エジプト14章	ヨハネ16:33
神の救いの確かさとその力の偉大さを讃美し、語り続けよう			
12月7日 待降節	平和の王イエスさま	問23, 27	ウ告白8:1、ウ大42、ハイデ31
		イザヤ書9:1～8	イザヤ書9:5
神の国の福音を告げ、実現する主イエスの御業にあずかった喜びを深めよう			
14日 待降節	マリアへの告知	問22	ウ小22
		ルカ1:26～38	ルカ1:38
神の母とされるマリアの信仰に学び、今も注がれる神の顧みの眼差しを覚えよう			
21日 降誕祭	キリストの降誕	問22	ウ小22
		ルカ2:8～20	ルカ2:11
羊飼いに知らされたキリスト降誕の福音を感謝し、クリスマスを喜ぼう			
28日	契約のしるし	問24, 65	ウ告白7, 8章
		出エジプト24章	出エジプト24:8b
契約の恵みに応答することへと招かれていることを改めて確認しよう			

## 2014年度 年間カリキュラム (第53～56号)

(2014年4月～2015年3月)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2014年 第53号	4月6日	レント	ゲツセマネのキリスト	マタイ26:36-46
	4月13日	受難週	十字架のキリスト	マタイ27:45-56
	4月20日	復活祭	復活されたキリスト	マタイ28:1-10
	4月27日		弟子たちを慰めるキリスト	ヨハネ21:1-14
	5月4日		弟子たちを立ち上がらせるキリスト	ヨハネ21:15-19
	5月11日		弟子たちを派遣するキリスト	マタイ28:16-20
	5月18日		キリストの証人となる	ルカ24:36-49
	5月25日		教会を建て上げるキリストと聖霊	ヨハネ15:11-17
	6月1日		キリストの昇天	使徒1:6-11
	6月8日	聖霊降臨祭	新しいイスラエル・教会の出発	使徒2:1-5
	6月15日		聖霊によって説教する教会	使徒2:14-36
	6月22日		最初の教会の姿	使徒2:37-47
	6月29日		ペトロとヨハネの働き	使徒3:1-10
第54号	7月6日		御言葉をめぐって整えられる奉仕者	使徒7:1-7
	7月13日		サウロの回心させる復活のキリスト	使徒9:1-19
	7月20日		世界を目指すアンティオキア教会	使徒11:19-30
	7月27日		会議を通し、聖霊に導かれる教会	使徒15:1-21
	8月3日		マケドニア人の幻の信仰的解釈	使徒16:6-15
	8月10日	平和主日	平和主日	イザヤ2:1-5
	8月17日		ローマで伝道するパウロ	使徒28:17-31
	8月24日		聖霊とキリストに導かれて歩む教会	ローマ8:26-39
	8月31日		天上のキリストの働き	黙示録1:9-20
	9月7日		天上の礼拝	黙示録4章
	9月14日		天地創造	創世記1章-2:3
	9月21日		人間の創造	創世記2:4-25
	9月28日		罪と墮落	創世記3章



年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第55号	10月5日		アブラハムの召命	創世記12:1-9
	10月12日		アブラハムへの約束	創世記15:1-21
	10月19日		イサクの奉献	創世記22:1-19
	10月26日		エジプトに売られるヨセフ	創世記37:12-36
	11月2日		主が共におられる幸い	創世記39-41章
	11月9日		悪を善に造りかえる主	創世記45章、50章
	11月16日		神の人モーセ	出エジ2:1-10, 3:1-10
	11月23日		主の過ぎ越し	出エジプト12:21-27
	11月30日	待降節	出エジプト	出エジプト14章
	12月7日	待降節	平和の王イエスさま	イザヤ9:1-9
	12月14日	待降節	マリアへの告知	ルカ1:26-38
	12月21日	降誕節	キリストの降誕	ルカ2:8-20
	12月28日		契約のしるし	出エジプト24章
2015年	1月4日		約束の地	ヨシュア3章
第56号	1月11日		ダビデとゴリアト	サムエル上17:41-54
	1月18日		ダビデ契約	サムエル下7:1-17
	1月25日		ソロモン王	列王上3章
	2月1日		ユダの滅亡	エレミヤ18:1-17
	2月8日		回復の預言	エゼキエル34:11-31
	2月15日		捕囚からの解放	イザヤ45:1-13
	2月22日		礼拝の再建	ネヘミヤ8:1-12
	3月1日		異邦人の救い	イザヤ56:1-8
	3月8日	受難週	新しい契約	エレミヤ31:31-34
	3月15日	受難週	苦難の僕	イザヤ53章
	3月22日	受難週	受難のキリスト	ヨハネ18:1-11
	3月29日	受難週	十字架のキリスト	ヨハネ19:17-30

### 〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●編集委員の一人として、聖書黙想と説教展開例の教案提供に関わり続けています。時折、中会の諸集会などで、教会学校教師として奉仕されている兄弟姉妹が、「教案読みましたよ！」と声をかけてくださいます。「まだやっていいんだ」と、ほっと胸をなでおろします。もっと多くの方に執筆いただけたらと、常々思います。(二宮 創)

●日曜学校に奉仕する五人でようやくまとめました。これは「強いられた恩寵」と感謝しています。皆さまの工夫を加えていただき、イエスさまが子どもたちに伝わるようにと願っています。クリップアート、『石橋えり子カット集・教会と子どもの四季』(日本キリスト教団出版局)からカットを用いさせていただきます。(増田 守)

●『朝ドラ』に、明治の日曜学校の風景がありました。今の時代の子どもたちと将来のためにも、子どもの教会がどれほど大切であるかを思わされます。諦めずに、挑戦を重ねてまいりましょう。皆様の知恵やアイデア、ぜひ、分かち合いましょ！(相馬伸郎)

### 〈あとがき〉

●第54号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●53号の中部中会ジュニアサマーキャンプ2013の報告で、キャンプ讃美3曲の掲載が抜けておりました。長谷川はるひ姉はじめ、関係者の皆様におわび致します。今月号に掲載致しました。

●犬山教会学校のキャンプ、また礼拝の様子をご報告くださった、教会学校教師会の皆さま、金起泰先生、金蕙苓姉に、心から感謝いたします。パワーポイントを用いての礼拝の様子が、白黒の誌

面でうまく伝わるとよいのですが。

●編集長による「教会学校教案誌の原点とカテキズム」は、今年の定期大会で報告・出版される予定の『子どもと親のカテキズム』の執筆意図などをご説明するものです。来年4月からのカテキズムに基づく2年間のカリキュラムは、新しい『子どもと親のカテキズム』に従って作成されます。皆さまのお手元にお届けできる日も近づいてきました。どうぞお祈りください。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。当教案誌編集部より提供させていただきます。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

### 〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、『子どもカテキズム』もぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼ひ』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihito.tsuji@nifty.ne.jp

---

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	安田直人 (田無教会牧師)
牛島智子 (東京恩寵教会執事)	小宮山裕一 (ひたちなか教会牧師)
巻頭説教	赤石めぐみ (伊丹教会信徒)
坂井孝宏 (勝田台教会牧師)	辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)
日曜学校・教会学校訪問	木下裕也 (名古屋教会牧師)
今枝光彦 (犬山教会長老)	牧野信成 (西神教会牧師)
金蕙芩 (犬山教会信徒)	宮崎契一 (奈良伝道所宣教教師)
長谷川はるひ (関キリスト教会信徒)	大西良嗣 (滋賀摂理教会牧師)
教会学校教案誌の原点とカテキズム	分級展開例
相馬伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)	幼稚科 青葉台キリスト教会日曜学校教師会
聖書黙想・説教展開例	相馬直子 (名古屋岩の上教会信徒)
浅野正紀 (せんげん台教会牧師)	中学科 藤井 真 (堺みくに教会牧師)
二宮 創 (太田伝道所宣教教師)	イラスト作画
長谷川潤 (四日市教会牧師)	表紙 長谷川いのり (関キリスト教会信徒)
相馬伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)	本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会信徒)

---

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上教会牧師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
二宮 創	太田伝道所宣教教師
長谷川潤	四日市教会牧師
安田直人	田無教会牧師

---

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』  
2014年7・8・9月号 (季刊)  
第54号  
2014年5月25日発行

---

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)

---